

---

# 笑道 - わらいのみち -

桶乃弥

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

笑道 - わらいのみち -

### 【Nコード】

N7076D

### 【作者名】

桶乃弥

### 【あらすじ】

役者志望のはずが異色キャラ芸人のクラスに配属された少年の運命は！……ってほど文章は弾けていません。タレント養成所を舞台に、芸能界の表裏と『笑い』をテーマにした物語。携帯サイトで連載中の作品を、加筆修正後アップしています。

第一章 「華やかなる世界へ」(1) - 僕の居場所 1 -

中学二年の夏休み。また訪れる新学期を前にして、僕は自分の居場所を探していた。

別に今の生活に不満があるわけではない。衣、食、住すべてにおいて何不自由なく流れる時間。にもかかわらず僕はさまよっていた。

僕は一体何がしたいのだろう。何を求めているのだろう。僕の中で「結論」というプレッシャーが何度も何度も押し寄せていた。でも、それに気付きながら正面から受け止める事無く、今日もただ家の中でボーッと好きな音楽を聴いている。

「なるようになればいい」

そんな風に自分を抑え込んでいた。部活に励む事などなく、勉強なんてなおさらやる気も出ない。先生の話もろくに耳に入れず教科書に無駄な絵を描いて貴重な時間をプチプチと潰してたくらいだ。成績の不安など少しも気にならなかった。友達と馬鹿な話で盛り上がった、この中学生生活をのんびり過ごせばそれでいいのではないのかとそう思っていた。

でも、やがては必ずやってくる高校受験、そして大学、就職。まだ先の話なのに、避けては通れない現実を、やり過ごす事が困難に思えてきた中学二年生の夏休み。

「何かが足りない」

はたから見れば普通の男子中学生。小学校の頃は我先にとばかり教室で大声張り上げていたはずだった僕は、いつの間にか大人しい地味なタイプになっていた。ちょっととしたイジメを受けた事も一因

かもしれない。そこから表向き目立つことに臆病になった。その積み重ねはやがて自分をさらけ出す術を失っていたのだ。自然と家の中でも家族との言葉数は気付かないうちに少なくなっていた。

「どこかで発散したい」

だからといって誰かを傷つけるのではなく、人と共存できる自分にしか生み出せない居場所が欲しかった。その居場所で二つ目の自分を大いにさらけ出す事さえできたなら。この胸のくすぶりも少しは癒えるのかもしれない。本当は人一倍目立ちたがりである自分の性格を誰よりも一番知っていたからこそ。

「とにかく、この世で自分の名前を残したい」

ぼやけた未来にまだ見えぬ目標が植えつけられた夏休みだった。

第一章(2) - 僕の居場所 2 -

ある日の朝。テーブルに置かれた新聞を開く。新聞を読むといってもテレビ欄とスポーツ欄を目で流すくらいだ。結果面白そうな番組や記事が無い朝は少しガツカリする。その日もそんな朝だった。

ふとテレビ欄の横の広告に目が留まった。そこには「新人オーディション願書募集」という文字が大きく躍っていた。そしてこの夏の昼ドラで見覚えある新人の女優や子役の写真が数名並んでいる。どうやら芸能プロダクションのタレント養成スクールらしい。

「養成所かあ……」

その時、僕の中で大きな衝動が駆け巡ったのだった。そして気がつくとその広告に僕の目は釘付けになっていた。見ると所定の書類を提出し、二度の書類選考の末、合格者にはプロダクション主催の無料オーディションへの参加資格が与えられるという。

「お金かからないなら送ってみようかな」

自分でも驚く行動力だった。僕は履歴書を買ってくると必要な事を書き込んでいく。するとほとんど白紙に近い履歴書が出来上がった。それもそうだ。学歴など小学校卒業と中学校入学くらいしか書くことがない。かといって幼稚園卒園など流石に気が引けて書く気にならない。おまけにそろばんなど習い事もやってこなかっただけに、世間的に認めてもらえそうな資格や特技なんて一つも持っていない。

「あ、そうか」

何の取り柄もない奴でも、この世界は手を広げている。そう考えることで気が楽になった。僕は意気込みを示そうと志望動機の欄いっぱいに関心を書き込んだ。そこしかアピールできる場所が無く、でも、そこが何も無い自分を示すことのできる場所だったから。履歴書を書き終え、アルバムから適当な写真を選び終えるとそれを白い封筒に入れた。あとは切手を貼って投函するだけだ。

「母さんくらいにはこの事を言っておこうかな……」

一瞬そう思ったが、もし書類選考で落ちてしまったら顔から火が出るほど恥ずかしい話だ。僕は親には何も告げない事にして家を出るとその封筒を近くのポストに放り込んだ。ポストの蓋がパタンと閉じた時、どこからか変な達成感が僕の胸に湧いてきたのだった。

新学期が始まった。相変わらず淡々と流れる生活を送っていたが、実は授業中も審査の事で頭がいっぱいだ。あれからというもの、学校から帰宅すると真つ先に郵便受けを開く作業を楽しみにしていたが、なかなか審査結果の通知は来なかった。

一ヶ月ほど経ち、願書を出したことも少し忘れかけてしまった頃、家に帰ると郵便受けの中から白い封筒らしき物がはみ出していた。特に気に留めることなく蓋を開けて取り出し、その大きな封筒の表紙に目をやると、差出人である社名が印字されていた。

「あ、きた！」

それは紛れも無く僕が願書を出した芸能プロダクション『フェイス・アクト』からの封筒だった。僕は慌てて封筒を真上にかざし、光にすかして中を確認した。間違いない。中に何かは入っている。……いや、もちろん空の封書など届く訳も無いわけで。ただ、そんな変な事が気になるほど僕はその時舞い上がってしまった。

僕は手紙の角度を変えて中に書かれているであろう文字を探ろうとするが、さすがに合否の結果までは分かるはずも無く……。僕は家の中に入ると靴も脱がず玄関先でその封筒を開け始めた。そして慎重に手を差し込み、中に入っている紙を取り出したのだ。

「おや？」

てっきり便箋か何かで届くと思っていたが、驚いた事に金縁の入った一見表彰状のような紙が入っていた。そしてそこには僕の名前

である「奥村光弘殿」と書かれており、その横に「第一次書類審査に合格しました」という文が書かれていた。

「……う、受かった」

まだ一次の書類選考、それもオーディションを受けるための段階のもの。それでもその時の僕にとっては、どんな形であれ自分の存在を認められたという事が、嬉しくて仕方が無かったのだ。

その日の夜、僕は何度も何度もその文を読み返したのだった。

僕は一次審査の合格を母さんに伝えた。「母さんはどういう顔をするだろう？　どんな反応をするだろう？」。そう考えると少し緊張したが、何よりも「合格」という響きを早く伝えたいその一心で打ち明けたのだった。

「これ、いつの間に送ったの？」

母さんは驚いた様子でまずそれを聞いてきた。応募を内緒にしていた事に対して怒られるのかと思ったが、「夏休み中にちょっと新聞で読んで……」と僕が素直に打ち明けると、母さんは嬉しそうに言ってくれた。

「へえー、良かったね」

反対されるわけも無く、深く追求されることも無く、母さんはただそう言っただけでも感心した様子で「アンタがねえ……」としきりに口にしたのだった。

それはその日のうちに父さんにも伝わったようだ。でも、取り立てて父さんからは何も言われなかった。

それから二週間が過ぎ、「最終書類選考合格」の通知が届いた。そしてそこにはオーディションの日時、時間などが書かれたプリントも同封されていたのだった。

「最終も合格したよ。今度はオーディションだって」

母さんにそれを話すとまた素直に喜んでくれた。そして今度は父

さんや妹の雪菜も「おめでとう」と声をかけてくれた。さすがに家族みんなに言われると照れくさくて「まだ早いよ」と僕は謙遜したがどこかで少しばかり鼻が高くなっていた。

こんなに温かい家族が居ることで、僕はきつと甘えん坊に育ってしまったのだろう。そして幸せを幸せと感じ取れないからこそ、僕は僕なりに茨の道を探しているのかもしれない。茨の道を笑って過ごせる自分の居場所。自分だけしか認められない居場所を。

そう言えばその日の夕飯は、いつもよりちよつと馳走だった気がする。それに気づいたのはもう何年も経ってからだった。

第一章(5)・オーディション 1 -

オーディションの日がやってきた。だけど朝からどんよりと曇り空。にわかには緊張している僕の心を、空が代弁しているようだ。

オーディションの内容なんて分からない。一体、何を求められるのだろうか。やはり演技力を確認するのか。まさか水着審査なんて無いだろうな。そんなつまらない空想を描くうちに、電車は目的の駅に着いた。

会場へ向かう道中、僕と同じくらいの年齢らしき多数の女の子がゾロゾロと同じ方向に歩いていく。

「もしや彼女達もオーディションを受けるのだろうか？」

もちろん、それは勝手な決め付けで、会場であるビルに着く頃には駅で見かけたライバルになるはずの面々は殆ど残らなかった。

僕は内心、競争率が低くなったという妙な安堵感も芽生えた。だが、立て看板に書かれた『フェイス・アクト オーディション会場』の文字を見た瞬間、再び緊張が体を駆け抜けるのだった。

気持ちを落ち着かせるため、しばらくビルの前で参加者の様子を伺ってみる。その殆どが中高生くらいの女の子だ。友達同士で訪れたり、僕と同じように一人で乗り込んできたりする者も居た。しかし中には親子連れの姿もチラホラ。なるほど、例えこのオーディションが学歴や経歴にプラスになるようなものでは無いとしても、試験を受けるといふ事に変わり無く、親が心配してついて来るのもおかしい話では無い。

ただ、僕にとってそんな選択肢はあり得なかった。仮に親が「付いて行く」と言い出していたら、速攻で「来ないでくれ」と言った

だろう。それは此処から先は自分で切り拓きたいという僕なりのケジメだった。願書を出した時からそう決めていたのだ。

会場の横に設けられた待合室は、多くの参加者で溢れかえっていた。小学生らしき姿もあれば、中年の男性や女性、お年寄りの姿もある。他人から見れば一体何の集いだろうかと思う異様な光景だ。僕はそんなライバル達の中、今一度気を引き締め直すと、整然と並べられたパイプ椅子に腰を下ろした。

しばらくすると係員らしき女性が声をかけてきた。年齢を伝えると番号札と一枚の紙を差し出される。

「呼ばれたら隣の部屋に来て下さいね」

係員はそう言うのと立ち去った。僕は軽く頭を下げて見送った後、その紙に目を通す。そこには台詞や表現力のテーマなどが書かれていた。どうやらこのオーディションで使用する課題のようだ。僕は時間を惜しみ一心不乱に課題であるその台詞などを覚えようと集中する。だが、迫り来る緊張がそれを覆いつくし、なかなか頭に入らない。結局、自分の番号を呼ばれるまでに覚えきることが出来なかったのだった。

「……ヤバイ」

わずか五行ほどの台詞を覚えきれない自分を恥じた。これもきつと審査の対象になる。

曇り空は晴れる気配も無いまま、僕は審査会場のドアノブに手をかけた。

## 第一章(6)・オーディション 2

オーディション会場の部屋に入るとそれまで混みあっていた待合室とは違い、意外に広い部屋だったので少し驚いた。

部屋には手前から奥に向かって机が一行に並べられ、審査員の先生方が等間隔で着席している。ざっと見渡しても十人以上居るようだ。この先生方全てに審査してもらおうという事なのだろう。

机の前には先生の名前と審査担当の書かれた紙が張り出されており、演技指導や発声といった科目ごとに分けされていた。オーディションは特に審査する科目の順番が決まっているわけでは無いらしく、ランダムに空いた先生から順に審査を受けるようだ。

基本的に先生と一対一で審査を受ける形。てっきりグループごとにまとめて審査されると思っていた僕は、思い描いていた物と違ったそのシステムに、緊張からますます混乱してしまった。気付けば先ほどもでかろうじて三行程度は覚えていたあの台詞も、今ではすっかりどこかへ飛んでいってしまった。

「次は……二百三十五番、奥村さん」

係員から呼ばれ返事をする、「審査表」と書かれた紙を手渡された。どうやらこの紙に先生方が採点をつけるようだ。

「それでは、君は始めに歌唱指導の津村先生の審査を受けてください」

「あ、ハイ」

係員は僕の前を歩き、先生が座っている机の前へと案内してくれ

た。

実はその間、僕は係員が言った『歌唱指導』の言葉が引つかかっていた。それはこのオーディションが役者としての演技中心の審査だと思い込んでいたからだ。

「歌唱っていう事は、やっぱり何かを歌わせるという事だろうか？」

だが、先ほど手渡された課題には歌唱審査らしき科目は書かれていない。「せめて心の準備のために課題曲くらい載せておいて欲しいな……」と、僕は少々悶々とした気持ちのまま津村先生の前に立った。

恐らく五十代前後と思われる男性の津村先生。先生は穏やかな笑みを浮かべながら僕に話しかけた。

「君は……今日これが初めての審査ですね」

「ハ、ハイ！ お願いします！」

そんな僕の元気良い返事が気に入ってくれたのか、津村先生はさらに機嫌良さそうに笑顔を見せて僕にそれを言い放った。

「それでは、君の好きな歌をいま歌って下さい」

「……はい？」

いきなりの難題に僕は愕然とした。

津村先生は戸惑う僕に気を使ったのか、続けてフォローしてくれた。

「何でもいいよ。歌詞を覚えている曲なら。例えば童謡でもいいからね」

その先生の言葉でますます僕は混乱した。確かに童謡なら歌詞も覚えているし、メロディーも単調で歌いやすい。採点付きカラオケの高ポイントをヒットするには最適だとも言われている。

しかし、ここにはカラオケのような伴奏はない。何より小学生ならまだしも、オーディションという大舞台で、「チューリップ」や、「いとまきのうた」や、「かもめの水兵さん」といった歌を、中学生にもなって臆面も無く歌える訳がない。あまつさえ学校の朝礼では後ろに並ぶくらい背も高く、どちらかと言えば老け顔と思うこの僕が。

周りを見渡せばライバルが多数「合格」目指し審査を受けているこの状況。ここで僕が大声を張り上げ童謡など歌い出せば、きっと彼らは心の底で「勝てる、コイツには絶対勝てる」と、含み笑いをこらえるのに必死になるのは目に見えている。

チラリと津村先生を見る。どうやら僕のように、いきなり出された課題で戸惑う参加者には慣れているようだ。選曲に時間のかかる僕に対し、特に苛立つ事も無く笑顔で答えを待っていてくれる。

「どうすればいいんだ……」

すると僕の体全身が突然猛烈な寒気に襲われ、目の前が青白い光

に包まれたのだった。「ええい、ままよ！」。僕は心で叫んでついにある一曲のタイトルを口走った。

「石原裕次郎さんの『ブランデーグラス』を……」

すんなりと言い切った。この曲はたまたま昨日テレビで見た、「ナツメロものまね大全集」で流れた一曲だ。

別に取り立てて好きなのではない。親が幼少の頃よく聴いていて、自然と歌詞も記憶に残っていた。ただそれだけの事だ。

津村先生はそのタイトルに少し驚いたような顔をしたが、すぐさま「はい、じゃあお願いします」と丁寧に答えてくれた。僕は少々震える声で『ブランデーグラス』を歌い始めた。

「1」……、こおくれえ〜でえ〜およしよお〜……」

歌っている最中、ブランデーがこれほど苦いものとは思わなかった。もちろん飲んだ事は一度も無いが。

第一章(8)・オーディション 4

僕が故・石原裕次郎さんの名曲『ブランデーグラス』の一番を歌い上げると、審査員の津村先生は「難しい歌なのによく歌えたね」と、笑顔を交え褒めてくれたのだった。これは良い印象を与えられたようだ。

津村先生は採点表に記号のような物と、評価らしきメッセージを書き込むと僕の前に差し出して言った。

「じゃあ、今度は演技の坂野先生ね」

僕は大きく頭を下げて「ありがとうございます」と礼を言うと、坂野先生の居るテーブルを探した。その足取りは会場に訪れたときよりも遥かに軽い。難問をクリアし、手応えを感じたのだ。

「あ、あの先生だな……」

僕は自信満々で坂野先生の前に立つ。坂野先生は先ほどの柔和な感じを受けた津村先生とは違い、少々厳つい顔をした初老の男性だ。僕は浮き足立つ気持ちを抑えて先生の言葉を待った。

「はい、では演技を見せてもらいます。君は今、空を飛んでいます。その体で思いつきり表現してください」

やられた。またしてもカリキュラムには載っていない課題をぶつけられてしまった。どうやらこの場で体を使って一人で黙々と表現しろというらしい。しかも直訳すれば『鳥になれ』と言わんばかりの強引な設定。周りには大勢の人が居るというのに、これではしらくら鳥の刑だ。

しかし、この時僕は自分に問いかけた。

「何を恥じる必要があるのだ？　ここはタレントを目指す為の第一歩の場所なのだ。ひとたびタレントになれば、人々の白い目に晒されながら、語り、踊り、時には歌わなければならないのだ。恥ずかしさも何もあつたものではないではないか」

その時、再び全身に寒気が走ると青白い光が目前に広がった。僕は無意識のうちに両手を真横に広げその言葉を発した。

「僕は風の子！」

そしてテーブルの前を「ブンブン」言いながら八の字を描き走り回った。

これはどうしたと言うことか？　自分で今、何をやっているか分からないほど、僕は『風の子』になっているではないか！　その心地よさからついつい調子に乗り、坂野先生の存在も忘れ、無我夢中でその場を走り回るのだった。

僕は今、空を飛んでいるイメージを浮かべ、まさしく『風の子』になった。両手を広げ縦横無尽にその場を疾風のごとく旋回していた。誰の声も、誰の目も気にせず、僕はそれを思いっきり表現し続けたのだった。

しかし、あまりに調子に乗りすぎてしまい、わずか三メートルほど横で、別の参加者が審査を受けている事など、すっかり頭の中から抜け落ちてしまっていた。

……そして案の定それは起きた。隣で審査を受けていた女の子の腕に、広げた僕の手がぶつかってしまったのだ。

「あ、すみません」

僕はその瞬間、自身が演技中という事も忘れ、『風の子』から現実に戻ると、その女の子に向かって思いっきり謝ってしまうのだった。すると、先ほどまで高揚していたテンションも一気に下がってしまい、またいつもの奥村光弘に戻ってしまったのだ。

演技を中断した僕に、坂野先生は特にその表情を変える事もなく、「はい、結構です」と言うと、採点表にスラスラとペンを走らせた。先生の顔を伺う限り、どうやら今回は大失敗のようだ。どんな事情があるかと、演技を途中で投げ出すなんて、プロの世界ではあってはならない事なのに……。

「次は……隣の川島先生に審査を受けてください」

いきなり走り回ったせい、少々息遣いが荒くなっていた僕は、その採点表を受け取ると息を整えながら坂野先生に頭を下げるのだった。

次の審査に向け隣のテーブルに目をやると、先ほどぶつかった女の子がまだ審査中だった。その子も恐らく僕と同じ中学生くらいのもようだ。

その内容は、どうやらカリキュラムに書かれている台詞を基に演技をしているらしい。見ると彼女は全ての台詞を暗記済みのようで、目を輝かせ大きな声を出しその役を演じきっている。気付けば僕は目の前のライバルにすっかり見とれてしまっていた。

「ありがとうございます！」

その女の子は審査をする川島先生に深く頭を下げる。その声で僕もようやく我にかえる事が出来たのだった。瞬間、僕の気が引き締まった。彼女くらいのレベルでなければ合格は厳しいのだと。

すると、彼女は側で立っていた僕に気付き、微笑みながらエールを送ってくれる。

「お互い頑張ろうね」

先ほどぶつかった事で、「彼女はきつと怒っているだろうな」と、思い込んでいた僕は、その言葉に拍子抜けしてしまい、「あ、うん」としか言えなかったのだった。

第一章(10)・オーディション 6

女の子が次の審査に向かい、僕は入れ代わるように川島先生の前に立った。と、同時に僕は思い出した。

「ああ、ヤバイ……台詞……」

彼女はその台詞を完璧に記憶し、演技に集中していたというのに、僕は課題の台詞など殆ど覚えていないのだ。カリキュラムにも一度目を通したかった僕だが、かといって読みながら台詞を喋るのはあまり良い印象を与えられないはずだ。

そう、及第点では駄目なのだ。彼女ほどのレベルに至らなければ、このオーディションは合格できない。ここまでの通算成績は恐らく一勝一敗。何としても勝ち越さねばならない。どうすればこの危機的状況を乗り越えられるのだろうか。僕はジッと川島先生の第一声を待った。

今日のオーディションで初めて女性の先生に審査してもらおう。先ほどのように身体だけで表現させた坂野先生と違い、川島先生は本格的に役作りをさせるようだ。課題の台詞や設定が完全に思い出せない状態の僕にますます不安な思いがつのる。

川島先生が採点表を見る。すると少し鼻で笑った気がした。採点表にはこれまで審査した先生からのメッセージが書かれていたようだが、僕はそれをあえて見なかった。というよりも、場の雰囲気は飲まれ、読んでいる暇も無かったと言ったほうが正解かもしれない。しばらくすると先生は思わぬ課題をぶつけてきた。

「じゃあ……あなたには即興で台詞を話してもらおうかな」

すぐには理解しがたい言葉だった。課題の台詞を覚えていないという僕の不安は一掃された。しかし……「即興?」。よくよくその言葉をかみ締めれば、それどころではない事にようやく気が付いた。またアドリブの要求ではないか! しかも今度はかなりの高難易度だ。こんな事なら読みながら台詞を喋って、顔の表情や動きで表現した方がいくらかマシではないか!

僕は何をどうすればいいのか、その新たな不安を抱え困り果てていた。すると混乱する僕に構う事無く、先生は少し考えこむ仕草の末、こう話しかけてきた。

「そうねえ……あなたは今好きな女性に告白しようとしています。でも、彼女はあなたの親友が好きです。そしてそれをあなたは知っています。その上で彼女に告白してください」

その無茶苦茶ゴーイングマイウェイな設定に、僕はますます混乱するのだった。

第一章(11) - オーディション 7 -

川島先生の課題は、『彼女を射止め、親友を捨てる』と言うものだ。僕は頭の中でその状況を仮に自分の立場だったらと置き換えて整理する。

もし、彼女に告白して返事がノーだった場合、その後の三人の間に漂う気まずい雰囲気はどうしろというのか。いや、むしろその逆で、彼女の返事が僕の望み通りになったとすれば、親友を裏切った罪悪感に打ちひしがれて生きる道が正しいと言い切れるだろうか。そして、「それも若さゆえのなせる業だ」などと一人感慨深くポツリと漏らすのだろうか。

あらぬ妄想の迷い道に陥る中、ふと川島先生に目をやった。考え込む僕に何かを問いかけたようだ。このままではいけない。早くこの設定の中の登場人物に移らねばならない。

だが、大きな問題がある。告白どころか僕自身、学校で女子と会話することなど殆どなかった。当然彼女などいないし、告白する仕事草や、言葉の引き出しも持ち合わせていない。全てが未経験の中、漫画などで得た予備知識からその役を演じなければならぬ。つまりこれこそ真正銘の役作りだ。

「難しい？」

意を決したように川島先生が尋ねてきた。だが、ここで僕が「ハイ」と言っただけでこの課題から降参してしまえば、その時点で役者失格の烙印が押されるはずだ。僕は口元を引き締め、首を横に振る。

「いえ、大丈夫です」

もちろん、そんなワケが無い。ノープランで出た言葉だ。  
先生は僕のその返事に笑顔で合図を送る。

「では、お願いします」

すると、僕の全身にこの日三度目の寒気が走り、青白い光が交錯する中で自然と体が動き出したのだった。

僕は机から少し後ろに下がると、場面転換よろしくクルツとその場で一回転し、そして俯きながら自ら創りあげた台詞を話し始める。

「急に呼び出してゴメン。……オレ、君がアイツを好きな事は知っている。……でも、やっぱり言わないと……どうしてもオレの気がすまないんだ」

そして、目の前に居る川島先生の目を見つめ、僕は大声で言い切った。

「オレと結婚してください！」

その瞬間、会場内が一気に静まり返ったのだった。

僕の『告白』が轟いたその瞬間、隣のテーブルに居た坂野先生がチラツとこちらを見た気がした。目視はしていないが、雰囲気での目が全く笑っていないと感じ取れた。するとどうだ、周りのライバル達も此方を伺っている事が、背中越しに伝わってくるではないか。そして、それらの眼差しも、坂野先生と同じく「失笑」という言葉が相応しい視線だった。もちろん、目視はしていないが。

僕は途端に「やってしまった」と心で呟いた。気付けばテンションはガタ落ち。そのクセ周りの反応はいたって冷静に受け止められた。おかげで目が泳いでいる事に自分でも気付いていたくらいだ。そして僕は改めて感じ取った。これは間違いなく大失敗だ……。

「はい、奥村さん結構ですよ……。ではこの採点表を受付に渡してから帰ってくださいね。お疲れ様でした」

川島先生は少し笑みを浮かべながら僕に採点表を差し出した。僕は特に気にも留めずに「ハイ」と応えて受け取ると、一目散に部屋の出口へと向かっていた。

「までよ……おかしいじゃないか」

ふと、部屋を見渡した僕は、ズラリと勢ぞろいした先生方を今一度見渡す。僕が審査を受けた先生はわずか三人。しかし、どう考えても三人で審査が終了とは思えない先生の数だ。そして、この理由が何を意味するのか思いつくまでに、そう時間はかからなかった。

「つまり、『お前なんか審査するまでもない』って事が……」

僕は力なく受付で採点表を渡すと、そのまま玄関先のロビーへ向かい肩を落とし歩いていく。冷たい廊下の中、背中越しに冷たい視線を感じながら……。

「やっぱり『結婚』は違うよな……せめて『付き合っただよなあ……』」

今更悔やんでも仕方が無いのに、後悔の数が冷たい視線と同じように僕の脳裏に突き刺さる。払っても、払っても、それは一向に止む気配が無い。

やがてビルの玄関が見えてくる。僕の目の前に太陽の光射す現実の世界が口を広げて待っていたのだった。

オーディション会場を後にして、ビルの外に出た僕。空を見れば嫌味なほどに真っ青な快晴だ。僕は力なくため息をついた。

「やっぱり俳優なんて……。芸能界なんて向いてないんだろうな」

実生活が地味すぎた僕にとって、芸能界はもうひとつの覆面を被った自分をさらけ出せそうな、そんな華やかなる世界だった。その世界でならば、僕はきつと僕にしかできない何かを残せそうな気がしていたのだ。

新しい自分の居場所を見つける為に受けたオーディションだったはず。でも、やり遂げた充実感や達成感はそこになかった。気づけば一人、僕はビルの玄関先でポーンと立ち尽くしていたのだった。

ドンッ

それはいきなりだった。その衝撃で僕はよろけて前のめりに倒れそうになった。

「邪魔なんじゃ。ボケッ！」

そんな捨て台詞を残し、肩をいからせ歩いていく関西弁の男。恐らく高校生くらいだろうか。ビルの玄関はそれほど狭いわけでもないのに、わざわざ僕に目掛けて体当たりしたとしか考えられなかった。それでも僕は普段聞きなれない関西弁に威圧され「すいません」と小声で謝るのだった。もちろんそれは本心ではない。

「何だよアイツ……。感じ悪い奴……」

だからと言ってケンカを仕掛けるほど僕は強くない。その男の後姿を、ただ睨みつけるしかなかった。オーディシヨンの不甲斐なさで落ち込む僕に、再び現実の弱さが襲い掛かってくる。

「はあ………」

ビルを出た時のため息とは、また違う感情の混じったため息だった。それは目に見えるほど白く、冷たく。

しばらく目を充血させ、僕はいつしかトボトボと帰路に着くのだった。

第一章(14) - 雪菜の心配事 -

僕が玄関のドアを開けると、廊下をかけてくる足音が響き渡る。騒々しいその音の発信元は妹の雪菜だった。

「兄ちゃんおかえり！ どうだった？ オーディション」

今更思い出したくも無い散々だったオーディション。詳しく話すのも面倒くさかった。

「別に……まあ、それなりに」

僕は、雪菜に目を合わせることなく言葉少なくリビング格に向かった。そんな僕の気持ちが分かるはずもない雪菜はしつこく付きまとい尋ねてくる。

「ね、ね、オーディションには誰かいた？」

「誰って？」

「俳優さんとか、テレビに出ている人。審査員で友クンとか来てなかった？」

「友クン？」

「飯田友宏。『フェイス・アクト』所属じゃん」

「そんなの知らねーよ」

「えーっ？ だって事務所の先輩になるかもしれない役者サンだよ。覚えておかなきゃ……」

「煩いなあ！ もういいだろ。どこか行けよ！」

雪菜の言葉にカチンときてしまった僕は、ついつい怒鳴り声をあげてしまった。驚いた雪菜はふて腐れてしまい、不機嫌そうに自分の部屋へ戻る。すると、リビングでテレビを見ていた母さんがボソツと言った。

「ちょっと冷たいよ。今の言い方」

「……」

「雪菜はね、今日ずっとアンタの事を心配していたんだからね」

「え……？」

「後で謝っておきなさいよ」

母さんの言葉、その時の僕は素直に受け止められなかった。その言葉の重みを、『家族』を受け入れる器を、独りよがりな僕は当然持ち合わせてはいなかったのだった。

第一章(15) - 合格通知 -

二週間後、リビングで昼寝をしていた僕は雪菜の大声でたたき起こされた。

「何だよ……」

「兄ちゃん着たよ！ 『フェイス・アクト』から！」

「あ……」

それは面接結果通知。どうせ落選の知らせだろうと最初は思った。その封筒の大きさと厚みを見るまでは。

「え……？ え？」

僕は急いで封筒を開いた。それでも慎重に、破らないように開封した。ひよつとすると、これから大切にしておかねばならない知らせかもしれないからだ。

そして、僕がその結果を読みきるまでに、雪菜が嬉しそうに口にした。

「おめでとう、兄ちゃん」

「……ん、ありがとう」

「お母さんに知らせてくるね！」

雪菜はドタドタと二階に居る母さんの下へと階段を駆け上がった

いく。僕はその間、何度も何度もその合格通知を眺めていた。

この二週間、諦めようと必死だった新しい居場所への扉。今それがまさに開かれようとしている現実を静かにかみ締めていた。

「やったな、光弘」

その日の夕食、家族からの祝福に僕はただ苦笑いを浮かべた。今にしてもあのオーディションの内容で合格できるとは思えなかったからだ。

「でも、これからが本当の意味でのオーディションだからなあ。まあ頑張れよ」

励ましてくれた父さんの言葉で、ようやく僕はその世界を踏み出すスタートラインに立てた気がした。そうだ、まだ僕はスタートすら切っていないかったのだ。

「うん、頑張るよ」

華やかなる世界への第一歩が刻まれようとする。それは自分を変える為に求めてきた居場所。自分で行動に移し、切り拓いてゆく新しい世界。

ただ、自分一人の力だけで、居場所を作る事などできないのだと知ったのは、まだまだ先のことだった。

第一章 (15) - 合格通知 - (後書き)

第一章 「華やかなる世界へ」 ここまで

第二章 「別世界」 へ続く

## 第一章までのあらすじ・登場人物紹介

……第一章までのあらすじ……

平々凡々とした生活を送る中学二年生の奥村光弘は、自分らしく存在できる新しい居場所を求めている。

ある日、大手芸能プロダクション『フェイス・アクト』が催している、新人タレントオーディションの広告に目が留まった光弘は、いつもと違う自分を表現できる役者の世界こそ新しい居場所ではないかと感じた。

待ち受けていたオーディションではアドリブ責めの過酷な試練が続く。オーディションでの自分の不甲斐なさに、てっきり不合格だと諦めていた光弘。だが、彼に届けられた通知は合格だった。

……登場人物紹介……

年齢は登場時。紹介文の最後にある（ ）内の数字は初登場ページ。

奥村光弘（14）

（おくむら みつひろ）

主人公。大人しく目立たない人畜無害な中学二年生。たまに”笑いの神”が降臨するが、本人はそれをコントロールできない。（第一章-1）

坂野重雄（65）

（さかの しげお）

演技指導の先生。舞台俳優を続けるかたわら『フェイス・アクト』の客員指導者に。（第一章-8）

奥村雪菜(11)

(おくむら ゆきな)

光弘の妹で小学校五年生。夢はピアニスト。好奇心旺盛でハッキリモノを言う。光弘の受けた『フェイス・アクト』所属の俳優、飯田友宏のファン。(第一章・4)

奥村誠太郎(51)

(おくむら せいたろう)

光弘、雪菜の父親。口数少ないが温厚な性格。光弘、雪菜の夢を尊重している。(第一章・4)

奥村公子(46)

(おくむら きみこ)

光弘、雪菜の母親。少し神経質でお節介やき。光弘には厳しく雪菜には甘い?(第一章・4)

## 第二章 「別世界」(1) - 再会の入所式 -

この冬一番の寒波が押し寄せてきた一月の半ば。僕は『フェイス・アクト』の入所式に参加するため、あのオーディション会場となっていたビルへやってきた。

あの時とは違い、ビルにやって来る人はまばら。オーディションを受けに来ていた人の数を考えれば、狭き門をくぐり抜けてきたという表れか。僕の心に少しばかり自信が漲ってきた。

「一応、今日から芸能人の卵ってカンジかな」

我ながら自覚を持つということが、こんなに恥ずかしいものとは思わなかった。でも、それほどに気持ちは高ぶっていた。

ビルの階段を上り、三階の一室の前にやってきた。部屋の前に掲げられた据え置き黒板には『フェイス・アクト 第31期Aクラス研修生 入所式』と書かれている。まさにそこはあのオーディション会場が行われた大広間だ。僕は慎重にドアノブを握り、恐る恐るドアを開いた。

部屋の中は式の開始二十分前だというのに、すでに二十人近いオーディション合格者が入室しており、それぞれ緊張した面持ちで整然と並べられたパイプ椅子に着席していたのだった。

僕はドアを閉めると極力みんなと視線を合わせず、目立たないように後ろの方の席に座る。僕が着席してまもなくだ。部屋のドアが開き明るい女の子の音が響き渡った。

「おはようございます!」

その元気な声に返答したのは小声で数名。ハキハキとしたその声の主は、軽く部屋を見渡すと僕を発見した。すると小さく手を振り

ながら駆け寄ってくるではないか。

「オハヨー！ 君、受かったんだね！ おめでとう！」

「あ、いや、そっちこそ……おめでとう！」

そうだ、その子はオーディションの日、僕が演技に夢中になるあまり、誤って腕をぶつけてしまった演技の上手な女の子だった。驚いたことに彼女も合格していたのだ。いや、あの演技力ならむしろ当然だろう。僕が驚いたのはそうではなく、どこかで期待していた彼女との『再会』に対してなのかもしれない。

「私は中條瑞恵。あなたは？」

「ぼ……俺は、奥村光弘」

「奥村くん。これからよろしくね」

どうしたんだろう、こんな気持ちは初めてだった。新しい世界への不安が一掃され、心の底からますますやる気が湧いてくる。その心にある彼女への淡い想いに気付く事に、それから数秒も要さなかった。

## 第二章(2)・呼ばれぬ名前

僕は式が始まるまでの間、中條さんとはばらく会話した。どうやら僕と同じ中学二年生らしい。学校の事、住んでいる場所。他愛ない話に花を咲かせ、うかれ気分のまま時は過ぎ、やがて式が始まった。

部屋に居る三十名ほどの新入生を担当するという、三十代らしき男性社員の青柳さんが、自己紹介を交え色々説明を始めた。

『フェイス・アクト』の歴史、新入生としての心得、授業の進め方、僕は持ち込んだ手帳に彼の言葉をメモしていく。

一通り話を終えると青柳さんは唐突にそれを投げかけた。

「ではここで皆さん一人ずつ自己紹介してもらいましょうか。呼ばれたら前に出て、名前と簡単な自己PRをしてください」

淡々とした表情で彼は名簿に目をやると、「では、伊藤洋子さんからお願います」と新入生らに向かって声をかけた。呼ばれた伊藤さんが緊張した面持ちで皆の前に立つ。だが、名前を言った後しばらく押し黙ってしまふ。やはり何を喋ればいいのか分からず混乱しているようだ。

「何でも良いですよ。志望動機、やりたいこと、好きな役者。難しく考えず肩の力を抜いて話してください」

そんな青柳さんの助言もあり、ようやく伊藤さんは話し始めた。そうして新入生それぞれの自己紹介が進んでいく。

そんな中、一際存在感を示したのは中條さんだった。あのオーデ

イシヨンの日と同じように目を輝かせハキハキと話し始めた。でも、元気で明るく、誰からも好かれそうな彼女なのに、その目指すべきものはかけ離れたものだった。

「私は女優志望です。思い切り人に嫌われる女優になりたいです」

その発言に驚いたのは僕だけではない。それまで俯いていた数名が頭を上げて彼女を見つめるほどだった。

自己紹介を終えて席に戻ってきた彼女に僕が思わず声をかけた。

「今のって？」

「？ 何かマズイ事言った？」

「あ、いや」

どうやら僕は全速力で彼女の魅力に惹きこまれているようだ。だが、次の彼女の言葉で頭を冷やすことになる。

「それよりさ、奥村くんまだ名前呼ばれてないけど……これってたぶんアイウエオ順だよな？」

「あ………そういえば」

やがて青柳さんは僕の名前を呼ばないまま名簿を閉じたのだった。

第二章(3)・AとWA・

淡々と授業用のテキストを配布しようとした青柳さん。どうやら僕の存在が完全に忘れられている。何かの手違いだろうか。僕はとっさに手を挙げて問いかけた。

「あの………すみません。僕、まだ名前呼ばれていないんですが」

僕の申告に驚いた顔をした青柳さんは「これは失礼」と、改めて名簿をチェックするのだった。

「えと………君、名前は？」

「奥村です」

「おくむら………おくむら………うーん、おかしいな」

その青柳さんの最後の言葉に僕は背筋が凍った。

「ちょっと待っていてね」

名簿を手に慌てた感じで部屋を出る青柳さん。その途端、室内は先ほどまでの張り詰めた緊張の糸が切れ、みな安堵の表情を浮かべるのだった。

しかし僕はそんな余裕などない。もしかしたらこの場所から強制退去の可能性が出てきたのだ。隣の中條さんが気を使って話しかけてくる。

「ちゃんと合格証書届いたんだよね？」

「うん……」

「じゃあ心配いらないうって！」

彼女の励ましも空しく聞こえ、いたたまれぬ気持ちのまま待つこと数分後、ようやく青柳さんが部屋に戻ってきた。

「奥村君、違う違う、ここじゃない」

彼は何を言っているのか。理解できずに困惑していると、それを告げられるのだった。

「君は四階の入所式に行ってください」

「え？」

「ここはAクラス、俳優、女優クラスの入所式。君のクラスはお笑い芸人。バラエティ部門のWAクラスなんだ」

その時、僕の体に電気が走り、目の前が真っ白に輝いた。そして大きく上ずった声でそれを叫んだ。

「バツ、バラエティぶもん？」

その瞬間、室内が大爆笑に包まれてしまったのだった。

第二章(4) - 坂野重雄 -

青柳さんに連れられて、僕はW Aクラスの入所式が行われている部屋の前までやってきた。

僕に届いた合格証書や関連書類には、確かに『Aクラス』と表記がされていた。聞けば、どうやら事務局の手違いがあったようだ。合格証書などは改めて訂正したものを送ってくれるそうだが、今の僕にとってそんな事はもうどうでもいい。

「あ、坂野先生。彼が先ほどお話した奥村君です」

青柳さんが部屋のドアを開けると、中にいた初老の男性に話しかけた。その人を見て僕はようやく思い出すのだった。そうだ、オーディションを受けた時に演技を審査してくれたあの先生だ。

「……早く入りなさい」

「あ、はい」

坂野先生に促され、僕は足早に部屋に入ると一番手前の空いていた席に着いた。

僕は横目でチラリと坂野先生に視線を送る。バラエティ部門というクラスに似つかわしくない無愛想な坂野先生。僕はこの雰囲気の前で完全に萎縮してしまうのだった。

「じゃあ奥村君、こっちで頑張つて。……では、先生。あとよろしくお願いします」

そういつて青柳さんはドアを閉めた。すると坂野先生は青柳さん

を一瞥することも無く、静かに、しかし氷のように冷たい口調で皆の前で言い切った。

「余計な横槍が入りましたが、改めてあなた方に言うておく。辞めるなら今のうちです」

僕は自分の耳を疑った。一体この先生は何を言っているのだ。入所式当日に聞くような言葉ではない。だが、クラスの生徒たちは坂野先生の話をただ黙って聞いている。

「お笑いブームだか何だか知らないが、僕はそんなものを認めていません。そもそもお笑いなど『フェイス・アクト』に必要ないので」

無茶苦茶な話だ。だったら一体何のためにこのバラエティ部門のWAクラスは存在するのか。その僕の疑問をまるで見抜いたかのようには坂野先生は続けた。

「何度も言いますが、『お笑いなら楽に芸能人になれそうだ』そう思ってた来た人はさっさと帰りなさい。何故ならこのクラスは俳優、女優クラスにすら選ばれなかった、言わば補欠クラスなのですからね」

補欠クラス。叩きつけられた現実に、先ほどまで湧き出ていた僕のやる気は、風前の灯と化していたのだった。

第二章(5) - 暴君関西男再び -

坂野先生の厳しい発言に、静まり返っていた部屋。

今日から船出だというのに、まるで葬式のように重苦しい空気に包まれていた。

「さあ、帰るなら今ですよ」

追い討ちをかけるように坂野先生の低い声が響いた。

「先生、いいですか」

それは後方で座っていた二十代前半の男の人だった。

坂野先生が「どうぞ」と言うと、その人は顔を強張らせて問い始めた。

「これから頑張っていてこうって言うのに、ちょっと厳しすぎませんか。それに皆だつて中途半端な気持ちでここに来てはいないと思います」

「そうですね。それなら結構。ただし、覚悟しておいてくださいね。僕を笑わせられない限り、あなた方にチャンスは無いと思っただけです。下さい」

この坂野先生の言葉で、にわかに生徒たちがざわつき始めた。すると先ほどの男の人が再び尋ねたのだった。

「先生を笑わせたら、Aクラスへの転属もあるわけですね」

坂野先生は名簿に目をやりながら彼に返答する。

「君は……佐伯君だね。もちろん、僕だって後継者を育てたいことに変わりはない。公正に判断するから心配は要らない」

その時だった。部屋のドアが無造作に開かれ、一人の男が部屋に入ってきた。

「こんにちは」

その男は軽く坂野先生に会釈すると、僕の隣の椅子に大きく足を広げてどっかりと腰を据えた。

「あ……」

僕は頭が真っ白になった。その男はオーディションの日にぶつかったきた、あの忌々しい関西弁の男だったからだ。

「あれ？ マジで？ お前みたいなんも受かったんか？」

乱暴な言い方に僕はイライラしたが、ただただ作り笑顔を繰り返すばかりだった。

第二章(6)・そこは似て異なる別世界・

「まあ、初日からクラスは間違える。遅刻はする。そんな人間の集まりですからね。せいぜい頑張ってください」

坂野先生は呆れた顔で隣の関西男に目を送る。すると関西男は僕の左足を横から軽く蹴りながらブツブツとこぼしはじめた。

「なんやねんあのオッサン。あれ、演技指導のオッサンやん。あんな奴に笑いの何が分かるんや。迷惑な話やで。なあお前、そう思わへんか?」

「はは……」

関西男は坂野先生に聞こえてもいいとばかりの声で僕に愚痴をこぼす。しかも先ほどからしたたかに足を蹴られ続けている。こっちにとってはお前が迷惑な存在だ。

「来週からは発声、ダンス、日本舞踊、演技と、丸一日ハードなスケジュールになりますからそのつもりで。それらの授業が終わり次第、早速一回目の発表会を開きます」

すると、隣の関西男が手を挙げた。

「センサー、発表会ってネタのですかあ?」

「そうですね」

僕は驚いた。レッスン初日からネタの発表会。今まで人を笑わせ

ようなどと考えた事も無い僕が、何をどう発表しろというのか。すると、関西男が坂野先生に続けて問いかける。

「それって何やってもええんですかあ？」

「犯罪以外は何でも結構」

「よっしゃ。面白そうやんけ」

何を一人で息巻いているのか。関西男は腕組みするとやる気満々の顔を浮かべている。よほど笑わせられる自信があるようだ。だが、おかげでそれ以降は足を蹴られずに済むのだった。

「威勢の良い君は……浜谷君だね。楽しみにしているよ」

その後、一通りの説明を終えると、坂野先生は「では来週」と、さっさと部屋から引き上げてしまった。それと同時に生徒たちも足取り重く部屋を後にする。

それにしても感動も薄く、何とも味気の無い入所式。いや、毒気のあり過ぎる入所式だった。

僕が帰宅しようとして立ち上がると、左腕をグイッと引っ張られた。あの関西男だ。

「お前、来週ネタ書いて持って来いよ。ネタ次第ではコンビ組んでやってもええで」

自分の居場所を求めていた僕は、どうやらかなり別世界に辿り着いてしまったようだ。

第二章(7) - 嘆願 -

僕は事務室に向かって一直線に歩いていく。理由はもちろん、クラスを変更してもらうためだ。

何も始めからお笑い芸人を目指すためにこの養成所を選んだわけではない。僕は俳優、いつもと違う自分を表現できる役者になりたかったんだ。お笑い芸人になりたいのなら、それこそ関西の大きなお笑いタレント学校にでも行ったことだろう。

もちろん、そこが華やかな世界ならば、もう一つの自分を開花させられる場所ならば、正直言えば『お笑い芸人』という道も悪くないかもしれない。でも、そんなこと以前に僕は人を笑わせられる自信など無いし、才能も無い。漫才も、コントもテレビで見て笑う程度だ。もし、あの坂野先生を笑わせられなければ、いつまで経ってもAクラスになんて移れ無い。

「失礼します」

事務室の中を見渡し、Aクラスを担当する青柳さんを見つけると、僕は彼をめざし歩いていく。だが、そこには青柳さんに熱っぽく詰め寄る先客が居るではないか。それは先ほど教室で坂野先生に猛抗議していた佐伯さんだった。

「それでも、納得できません」

「まあ、落ち着いて……」

佐伯さんからかなり厳しく詰め寄られているのか、青柳さんも困りきった顔をしている。

すると、事務室に坂野先生が入ってきた。その姿が目に入ったの

か、佐伯さんは不満げな顔をしつつ、坂野先生には一言も声をかけずに事務室から出て行くのだった。

「……で、君も抗議？」

青柳さんが苦笑いしながら僕に声をかけた。

「え……いえ、こ、抗議というか……」

「実はね、さっきの佐伯君も君と同じなんだよ」

「はい？」

「Aクラスを志望していたのは」

「……！」

青柳さんはタバコに火をつけるとフーツとひとつ息を吐き出し語り始めた。

「『フェイス・アクト』が三十周年を迎えて、今回ウチでもお笑い芸人を育てようと、WAクラスの募集をかけたんだけどね、WA志望者とは別に、元々は役者部門のAクラスを志望していた子も何人かそちらに回したんだ」

啞然とした。「そんなの聞いてないよ」と、僕は心で思いつきり青柳さんに突っ込みまくった。でも、声に出すほどの勇気も無く……。

「実はね、佐伯君のお父さんも役者でね、だから彼も当然Aクラス

を志望していたんだけど……」

すると青柳さんは坂野先生の方を横目でチラリと気にしながら、  
小声で僕に打ち明けた。

「君と佐伯君をWAに回すことを強く推したのは、誰でもない坂野先生なんだよ」

意外な話を聞いて、僕はそれ以上クラス替えを訴えることはできなかった。

## 第二章(8) - 一粒の甘い蜜 -

結局、そんな裏話の中、青柳さんに体よくあしらわれ、僕は事務室を後にするのだった。

坂野先生が何故僕をお笑い芸人の部門に推したのか。その理由なんて知る由も無い。しかも、父親を役者に持つ佐伯さんまで、本人の志望は受け入れられずにクラスを替えられた。ますます謎だ。

僕はボーッとそんな風に考え込みながらビルを出る。すると、僕を待っていたようにその子は駆け寄ってきた。中條瑞恵だ。

「お疲れ様でしたっ」

「あ、中條……さん」

「呼び捨てで良いよ！ それより大変だねえ。ホントにWAに行っちゃうの？」

そういうことは、彼女は僕を心配して待っていてくれたのだろうか？ 単純な僕は嬉しさのあまり、先ほどの憂鬱があっさり吹き飛んでしまうのだった。

駅までの道中、僕は事の顛末を彼女に打ち明ける。事務所の手違い、志望した役者クラスとは全く異なるお笑い芸人クラスへの強制転入。そして、佐伯さんや坂野先生の意向まで全てを……。

「そうなんだ……ワケわかないねその先生」

「だろ？ それでさ……」

彼女は特に話の腰を折るわけではなく、親身になって最後まで僕  
のつまらない話を聞いてくれた。彼女にとってはホント、どうでも  
いい話なのに……。そんな彼女の優しい所に、その時の僕は、知ら  
ず知らずに甘えていたのかもしれない。

駅に着くと彼女は笑顔で僕を励ましてくれた。

「クラスは違うけど、目指しているものはきっと同じだと思うから  
さ、お互い頑張ろうよ」

「うん、そうだね」

「それに、人を笑わせられるって、私は凄いことだと思うよ」

「え……」

「じゃあ、私、反対方向だからここで。また来週ね」

「あ、うん」

軽く手を振って彼女は反対ホームに続く階段を駆け下りていく。

「人を……笑わせられることか……」

僕はその時、抱えていた大きな重荷が、少し軽くなったような気  
がしたんだ。

第二章(9) - ネット帳 -

僕が家に戻ると、雪菜がリビングから駆け寄ってきた。相変わらず騒々しい奴だ……。

「おかえり兄ちゃん、どうだったよ？ 入所式！」

「ああ……」

やっぱり、イチイチ説明するのは面倒くさかった。それどころか恥ずかしくて家族に伝えるわけが無い。役者のクラスではなく、お笑い芸人を目指すクラスに入ったなんて……。

僕が廊下を歩いていると、雪菜はしつこくつきまとって尋ねてくる。

「ね、ね、居た？」

「は？」

「だから、飯田友宏とか……」

またその名前か……。僕は振り返り呆れた口調で雪菜に言った。

「そんな奴居ねえって。あのさ、俺たち研修生。アイツはもう名前も売れてる役者だろ？ そんな売れっ子が研修場に居るわけねーじゃん」

「そっかあ……。あ！ じゃあさ、もし会えたらサイン貰ってきてよ！ あ、できたら写メとかも……。ね！ お願い！」

そんな雪菜の無茶苦茶なお願いに、僕のイライラは頂点に達した。

「ウザッ、ちよっと黙っとけよ！」

いきなり怒鳴った僕に驚いた顔をする雪菜を振り払い、そのまま階段を駆け上がると自室にこもった。

「あーあ」

机に座ると鞆から今日手渡された時間割やテキスト類を確認すると棚に並べていく。ふと、『フェイス・アクト』の研修生を証明する学生証が目にとまった。そこには明らかに『Aクラス』と書かれている。

「なんでこんなことになったんだよ……」

この学生証は、後日『WAクラス』を証明するものに換えられてしまう。僕は真正銘お笑い芸人の道を進むことを証明されてしまふのだ。

ため息をついた後、入所式に持って行ったものの、一度もペンを走らせなかった真新しいノートを開く。今日の入所式やこれから毎週通うレッスンで、気づいたことを常に書き記そうと思っていたのだ。

その時、不意にあの関西男の声が頭をよぎる。

『 来週、ネタ書いて持って来いよ。ネタ次第ではコンビ組んでやってもええで』

別にあの関西男とコンビを組む気など、僕にはサラサラないわけ。僕は二度三度首を横に振る。

「なーにが『組んでやってもえ・え・で』だよ！ 馬鹿にしゃがって。あー関西弁ウザッ！」

でも、駅で中條に言われた言葉が引つかかる。

『人を笑わせられるって、私は凄いことだと思っよ』

僕にもそんなもの書けるのだろうか？ 人を笑わせられるようなことができるのだろうか？ もしも僕がお笑い芸人の役をドラマや映画で演じることになるなら、きっとこんな風に役作りしなくちゃいけないのかもしれない……。

「そっか……役作りか……」

気づけば僕は、ノートの表紙にマジックペンで『ネタ帳』と書き込んでいた。そして、生まれて初めて漫才のネタを書き始めたのだった。

その真っ白なノートの一ページ目に。

## 第二章（10） - レッスン開始 1 -

翌週の日曜日。

いよいよ今日から本格的なレッスンが始まる。朝から夕方まで、食事休憩を除いてみっちり授業が組まれていた。

今日は午前中から発声、歌唱、日本舞踊、午後からはダンス、演技、そして最後に三時からフリータイムが設けられている。

基本的な授業内容は、役者部門のAクラスも、バラエティ部門のWAクラスも殆ど変わらず講師もほぼ同じ。ただ、最後に設けられているフリータイムだけは違っていた。中條から聞いた話では、Aクラスは現役の俳優や女優を招いて特別授業を行うらしい。一方、僕らWAクラスは坂野先生指導によるネタ見せ発表だ。この差は何なのだろう……。

「どうせなら……俳優や女優さんの話、聞いたほうがためになるのになぁ……」

手に持っていた時間割に向かってばやきながら、いつものあのビルへと向かう僕だった。

「おはようございます……」

一時限目は発声の授業。軽い運動をするらしく、土足厳禁のカーペット敷きの教室だ。

僕が教室に入ると、驚いたことにあの佐伯さん以外、まだ誰も来ていない。そんなに早く着いたわけでもない。みんなどうしたんだろ？ と、佐伯さんは僕を見かけるとにつこりと笑って迎えてくれた。

「おはよう、君は……奥村君だったっけ？」

「あ、ハイ。これからよろしくお願いします」

「俺は佐伯和彦。こっちこそよろしく。ところで、君もAクラス志望だったんだって？」

「え？ どうしてそれを……？」

「ああ、青柳さんから……。あの人って結構お喋りだからね」

佐伯さんは僕の事情をおおよそ聞いていたようだ。共にAクラスを志望していた二人。年の差は八つも違うが、僕らはあつという間に打ち解けられたのだった。

佐伯さんと話をしている間も、相変わらず閑散とする教室。それは授業時間が近づいても劇的に変化するわけではなく、担当の先生が入ってきた時でさえ、生徒数はわずか十人程度と入所式で見た半数以下だ。ただ、あの関西男も来ておらず、僕は少しばかり気が楽になったのだった。

発声を担当するのは島本という三十代くらいの女性の先生。少し目つきの悪い、ちょっと近寄りにくい雰囲気先生だ。

先生はわずか十人の生徒を見て静かに語る。

「少ないね、でも、みんなにとってはその方が都合いいでしょ」

何が都合いいのだろうか？ ライバルが減ったから？ それにしては減りすぎじゃないだろうか……。

「さ、では今から発声の授業をはじめます。まずは皆さん上着を脱いで床に仰向けになってください」

先生の指示を受け、ノソノソと床に腰をつける研修生たち。するといきなり先生は檄を飛ばした。

「さっさとしなさい！ ダラダラすんな！」

教室内に緊張感が一気に駆け抜けたのだった。

第二章（11） - レッスン開始 2 -

「いいですか、これは遊びではありません。遊びたい人は今すぐ出て行きなさい！」

これではまるで先週の坂野先生と同じ展開だ。どうやらこの研修所はよっぽど短気な先生が多いらしい。でも、先生の言う事は、何ら間違っではないいわけで……。

「今から発声の基礎、腹筋の運動や腹式呼吸の練習をします。声は、喉ではなくお腹から出すのです。それは、歌手はもちろん、役者だって同じです。特に、あなた方が目指すお笑い芸人の場合、大きな声が出なければ絶対にやっていけません。いいですね」

「はい！」

研修生は島本先生の鋭い目つきに恐れおののいたか、今日一番の声をそろえる。

「では、床に仰向けになったら両足を揃えて、つま先までまっすぐ伸ばしてー。そのまま九十度の角度になるように両足を持ち上げてください」

言われるがまま両足を天井に向かって持ち上げ、まっすぐに伸ばす。なんだ、そんなに難しい運動ではなさそうだ……。すると先生はこう続けた。

「はい、そのまま両足をゆっくり下げて行って、四十五度の所で止めるー！」

「うっ」

僕のお腹にグツと力が入る。両足がガクガク震え、思わずバランスを崩してしまいそうだ。これは意外とキツイ。だが、先生は非情な宣告をする。

「その姿勢で五分間我慢する！ 膝を曲げた人が一人でも出たらそこから五分やり直し！ 連帯責任ね！」

「うひい〜」

数人の生徒たちから生き地獄の悲鳴が聞こえてきた。

顔をゆがませ、足を痙攣させ、それから五分間、苦痛にもだえ続ける僕たちだった。

朝一番の発声練習から行われたハードなレッスンは、生徒たちは早くも疲れた顔を見せていた。でも、佐伯さんだけは違っていた。それは一時限目を終えたあと、十分間の休憩時間でのことだ。

「物足りないなあ。この程度じゃ」

「え？」

「これくらいは基本中の基本だから。俺としてはもうちょっと突っ込んだ授業を期待していたんだけどな」

「はは……」

あのキツイ運動の後に、そんな涼しい顔で言われると立場が無い。

「でもさ、初日でこれだけ脱落者が出ているんだ。研修生が減れば、俺と君がAクラスに転入できるのも時間の問題じゃないかな」

「え？」

激減した研修生の数。僕はてっきり休みや遅刻だとばかり思っていた。ところが佐伯さんは今日来ている生徒以外、先週のあの坂野先生の一喝で諦めてやめてしまったのだろうと推測していた。つまり、先週の坂野先生の厳しい発言は、結構的をえていたということなのか。

「さてよ。って事は……あの関西男とも顔を合わせなくて済むのか！」

僕はホッと胸をなでおろした。そして、途端に先ほどの運動による苦痛は清清しいものへと変化していたのだ。それが、再び苦痛に戻るとも知らずに……。

第二章（12） - 遅れてやってきた暴君 1 -

発声に始まり、日本舞踊、歌唱、ダンス、演技と、初日の授業が淡々と行われていった。その中でも抜群の才能を発揮していたのは佐伯さんだった。

日本舞踊では姿勢、動作から指の形まで、先生が指導する前に完璧にこなし、ダンスではバランス感覚の良さを見せつけた。指導する振付師、泉谷磯五郎先生も思わず唸ったほどだ。

そして何より圧巻だったのは演技の授業。このような世界を志すなら誰もが通るといふ発声の教材、あの「外郎売」（いろいろなうり）を、テキストに目を通すことなくスラスラと滑舌よく言つてのけた。

「この人について行けば……きつとAクラスも近い」

そうして、僕にとって佐伯さんという人は単なる同期生ではなく、研修生の中の先生、いや、『師匠』となつていったのだった。

午後三時を迎え、いよいよ初日のフリータイム。あの厳しい坂野先生と一週間ぶりの対面でもあり、初めてのネタ見せの時間だ。休憩からぞろぞろと教室に戻ってきた生徒たちは、少々緊張気味な顔色を浮かべ、並べられた椅子に座る。初めてのネタ見せへのものか、それとも……。

先生の登場まで今か今かと固唾を呑んで見守る僕。するとついにそのドアが勢いよく開くのがあった。そしてそこに現れたのは……。

「グッドモーニング！ 会いたかったよ、WAクラスの諸君！」

僕は目を疑った。いや、泣きそうになった。それはあの忌々しき関西男ではないか。

「おっ！ お前ちゃんと来てるやんけ！ 絶対尻尾巻いて逃げ出し  
とる思ってたわ！」

関西男がズカズカと僕の横にやってくると、近くにあつた椅子を  
持ち込みドカツと腰を下ろしたではないか。最悪だ……。

「ほら」

関西男が又ツと手を差し出し、『早く出せ』といったジエスチャ  
ーをする。それが何を指しているのか僕もすぐに察した。僕は鞆か  
らあのノートを取り出すと関西男に手渡すのだった。

「おっ、ちゃんと持ってきてるやんけ」

お前が持つてこいって言ったくせに……。本当に態度のでかい奴  
だ。すると、ノートの表紙を見ただけで、いきなり関西男はダメ出  
しをしてきた。

「なんやねんこれ……。『ネタ帳』てお前、今時こんな堂々と表紙  
に書くなや、その上名前まで書いてみつともないなあ」

「え？」

「こんなお前、誰から見てもお前のネタ帳やってバレルねんぞ？」

「でも、そうですし……何か不味いんですか？」

「はあ……。芸人つちゅーもんはやな、ネタ帳は日記見られるくら  
い恥ずかしいもんなんや！」

「あ……そうなんですか……」

「ええか？ こういう時はやな、『私のレ・シ・ピ』って書いて、おまけにハートマークでも付けとくねん！ ほんならバレへんやろが」

「は、はあ……」

ネタというものを初めて書いた僕にとって、それがそんなに恥ずかしいものとは思わなかった。そして関西男は面倒くさそうな顔でノートを開く。

ノートには僕が初めて書いた漫才のネタなどが五ページに渡って書き込まれている。初めて書いた割には上出来だと少しは自信もあった。でも、きつとこの男は面白いと思ってても何だかんだとケチをつけるのだろう。が、そんな風に思うまもなく、関西男はノートを閉じた。

「アカン、二行目でアウト」

「え？ は？」

戸惑う僕がその訳を聞こうとしたとき、坂野先生が教室に入ってきたのだった。

第二章(13) - 遅れてやってきた暴君 2 -

坂野先生は関西男に一つ視線を送りつつ生徒たちの前に立つ。先週同様、いつもながらの威圧感だ。先生はテキストを準備しながら開口一番にそれを問いかけたのだった。

「ネタ見せの前に……浜谷君。遅刻の理由を聞こうか」

そう言っただけ坂野先生は僕の隣の関西男に厳しい視線を送る。流石は坂野先生。そうそう簡単にはコイツに授業させないつもりらしい。僕は心で思わず絶叫する。

「ざまあみる！ このウザウザ関西男！」

すると、関西男は渋々ながら立ち上がる。寝坊だろうと何だろうと、どんな言い訳もこの先生に通用するはずがないはずだ。ところが、彼は少し考える素振りをしたかと思うと、悪びれることなくそれを言っただけだ。

「えっと、すみません。今日は信号ちゃんと守ってきたんで遅刻したっス」

「……」

その無茶苦茶な発言に坂野先生はもちろん、他の研修生たちも彼の言葉を聞いて呆気にとられた。

あまりにも馬鹿だ。関西男め、そんな遅刻の理由になるわけないだろ！ これできっと強制退去決定のはずだ……。ところが、眉間にしわを寄せながらも坂野先生は思いもしない返事をしたのだ。

「では、来週から早めに家を出るように」

「あ？ はい」

よもやの返答に、関西男も驚いている様子。すると関西男はネタ帳をくるくる丸め、僕の頭を二度、三度とポンポン叩きながら他人事のように言った。

「ま、そう言うことじゃ！ お前も気をつけるよ！」

情けない。こんな横暴な男にキチンと言いつ返しなさいチキンな自分が……。しかも関西男は、その乱雑に扱ったネタ帳を僕に放り返すと、小声でボソツと話しかけてきた。

「ま、ホンマはサボツただけやけどな。なんとか舞踊なんてやってみられるか。面倒くさい」

そう吐き捨てへらへらと笑う関西男。自分自身も情けないが、僕はそんな関西男の悪行を許してしまう坂野先生に不満爆発寸前だった。すると……。

「浜谷君。来週もその程度の言い訳なら、君はネタ見せできないと思っておきなさい」

「いー？」

しつかり釘をさしてくれた坂野先生。当然だ。こんな男に特別待遇なんて絶対あり得ない話だ。いや、もう即刻退場だろこんな奴。つてかクビ！ クビだあ！ ……まあ、かなり私的な感情が入り混

じってはいるが……。

「さて、早速ネタ見せをしてもらいますが、先週言い忘れていたことがある。あまりダラダラとつまらないものを見せられてもこちらも困る。そこで、ネタ見せは各自十秒までとする」

今までリアクションの薄かった研修生も、『十秒』という恐ろしく短い時間に動揺を隠せざわわつくのだった。

第二章(14)・コンビ結成? 1 -

「名前を呼んだら前に出て、皆の前でネタをやってください。では、誰から見せてもらいましょうか……」

いよいよネタ見せが始まる。再び緊張感に包まれる教室。

「えー……名簿順なら奥村君からだか……」

名前が出た瞬間一気に心臓が、いや、その他もろもろの臓器の類が爆音を発してしまう。まさか今まで人前に立ってネタなんて見せたことのない、この僕がトップバッターなんて……。僕は慌ててネタ帳に書き込んでいたネタをチェックする。

「ヤバイ! どれもこれも十秒じゃできないよ……」

混乱してしまい、僕は頭の中が真っ白になってしまう。すると、坂野先生はここでナイスアシストを決めてくれた。

「そうですね、先週からやる気に溢れていた人からやってもらいましょう。……浜谷勝也君、前に出てお願いします」

坂野先生はそう言うと、取り立てて関西男に見向きもせず、窓際に置かれたパイプ椅子にゆっくりと腰を下ろした。突然の坂野先生から受けた指名にも動じず、関西男は「よっしゃ」と気合いのようなものを吐き立ち上がる。

「センサー、その前にちょっとネタ合わせする時間くれますか?」

「ネタ合わせ？ コンビですか？ 本来は休憩時間に済ませてもらいたい所ですが……。いいでしょう、なるべく早くお願いします」

「ういつす、あざーっす！」

すると、関西男がいきなり僕の腕を掴んだではないか。

「ほら、後ろに來い。合わせるぞ」

「え？」

「『え？』 ちゃうつちゅーねん！ 早よ來い！」

拒否権も与えられる間もなく、僕は関西男に教室の後ろまで連れて行かされる。これってひょっとして……僕は念のため関西男に尋ねてみた。

「あのお……やっぱり僕とコンビ組むんですか？」

「はあ？ いまさら何を言つてんねん。そうやなかつたらお前みたいな奴を誰が好き好んで拉致るかあボケッ」

「で、ですよね……はは……」

やっぱり最悪の予感は的中した。諦めた僕は苦笑い浮かべ「それでは……」とネタ帳を関西男に差し出す。

「そんなもんいらん。俺が今考えたネタをやる」

「は？ へ？ 今？」

笑道 - わらいのみち -

僕の歯車が大きく狂い始めたのだった。

第二章（15）・コンビ結成？ 2 -

「ええか、俺が先にバシッと言うから、お前はそれを聞いて思ったことを素直に関西弁で言え！ ええな、素直な気持ちで何も考えんとやぞ！」

関西男の言うことが全く理解できなかった。関西男が『バシッ』と何を言うのかさえわからないのに、僕は何を言えばいいというのだ？ しかも、一度も喋ったことのない関西弁を要求するなんて……。大体、本当にそんなことでみんなが笑ってくれるのだろうか？ 僕の脳内で巻き起こっている大混乱を他所に、関西男はネタ打ち合わせを進める。でも、こんなものは打ち合わせではない。完全に指示じゃないか……。

「で、お前がその言葉を言い終わったら、わき目も振らず先生の前立って決めのポーズや……」

「き、決めポーズ？」

「そんな難しいことちゃう。ええかこつや……」

関西男がそのポーズを決めると、僕も言われるがままそれに合わせてマネをする。すると、後方から坂野先生の声が出た。

「そろそろいいですか」

「あ、わかりましたあ。ええか、お前。全部覚えたな？」

「は、はあ……」

覚えるも何も、何を言うかも分からないのに……。不安いっばいの僕を尻目に、関西男は自信たっぷりと肩をいからせ、教室の前へと歩いていく。僕も仕方なく重い足取りで後を追う。ついに発表の時を迎える。坂野先生を横に、残る生徒らの正面に並び立つた僕と関西男。

「お前、コッチ。立ち位置変えろ」

「え？」

関西男は僕の左手に立つと、「ああ、やっぱりこっちが落ち着くわあ」と独り言をつぶやいた。が、僕にとっては立ち位置なんてどうでもよかった。むしろ右側に立ったことで、その真横に陣取っている坂野先生の威圧感を、なおさらヒシヒシと感じてしまうわけで。

僕は横目で何気なく坂野先生の顔色を伺った。どうも虫の居所が悪いか、ムスツとした顔で俯き、コチラを見ようともしてくれない。こんな空気で本当に先生が笑ってくれるのだろうか。

ただでさえ坂野先生に目をつけられている関西男。そんな奴とコンビを組んでいる僕を見る目だって、当然同列に思われるに決まっている。もしここで非常識な奴だと坂野先生に思われたら、永遠にAクラスへの転属など夢に終わってしまう。しかし、今更後には引けない。

「もう滅茶苦茶だ……」

生徒全員が見つめる中、僕は不安を通り越して全身に鉛が押し掛かったような重圧を感じていた。

## 第二章（16） - 坂野が豆鉄砲 -

「……はい、では浜谷勝也君、それと……奥村光弘君。はじめてください」

ついに人生で初めてのネタ見せの瞬間がやってきた。台詞のある演技とは全く異なる緊張感が僕を支配する。上手い、下手で判断されても、長期的に期待をかけてくれる役者の世界と違って、面白いのか、面白くないのか、それだけを基準にバツサリと即座に将来性まで判定されるシビアな世界。それがお笑い芸人の世界だ。

僕らの前に居座る相手はわずか数人。にもかかわらず、心臓がバクバク高鳴ってきた。

坂野先生は場の空気を和ませようと、生徒たちに拍手を促す。自然とそれに応じてみんなが拍手をはじめ。 「注目されている！」 そんなプレッシャーの中、その拍手が鳴り止むか止まないかというタイミングで、関西男が電光石火のごとく腹を抱え大笑いを始める。呆気にとられて関西男を見る僕に対し、彼は指差しながら尋ねてきた。

「お、お前、フツ、は、ハトが……フフツ……ハトが豆鉄砲食らった顔させるて……そ、そんなんお前……！ それはアカンてお前」

何のことだかさっぱり分からず僕が戸惑っていると、関西男は厳しい顔で僕の左腕をピシッと叩きあげ、ツッコミを入れてくる。

「……って、なんでやねん！」

関西男の大声が響き渡ったその瞬間、僕の目の前は真っ白に光り

輝き、全身を電気が駆け抜けると自然とその言葉を発していた。

「なにがやあねん！」

すると、自然と体が動いたではないか。僕と関西男は申し合わせ通り、坂野先生の前に立ちはだかる。

「……………」

呆然と僕らを見る坂野先生を前に、両腕を組み、肩を斜め四十五度に構え、ヒップホップミュージシャンよろしく、「どうだ」と言わんばかりに、ポーズを決めた。

「イエー…………チエケラツチヨ！」

するとどうだ、坂野先生の顔はまさに八トが豆鉄砲を食らったような顔をしているではないか！ その瞬間、生徒たちから大爆笑が起こったのだった。

「え？ 何が？ 何がおかしいの？」

ウケている理由が僕には理解できなかった。一体今のネタのどこが面白かったのか。僕は腕組みを解くことなく、心の中で混乱していた。しかし、明らかにその笑い声は、僕の体に伝わってくる。カラオケボックスで大音量に包まれるかのように…………。すると、次第に妙な感覚を得たのだった。

「人を笑わせるって…………笑ってもらえるって…………こんなに気持ちのいいことなのか」

僕は、その笑い声を体でビシビシと受けながら、今まで味わったことのない感慨に浸っていた。時間にしてわずか数秒。僕の意識はどこかに飛んでいた気分だった。それは笑い声に包まれた、とても温かく穏やかな世界だった。

でも、僕はその時現実に降り立つ。そして、うれしいような悲しいような複雑な境地に立たされていた。それは、誰よりも笑って欲しい坂野先生が、まったく顔色変えずに……いや、それどころかとても冷たい目で僕を見ていたからだった。

「これって……確か……」

坂野先生の前で演技を披露した、あのオーディションでの気まづい空気が再び蘇ってきたのだった。

第二章（17） - 原点回帰 -

「終わりですか？」

坂野先生がとても冷たい口調で僕らに語りかける。それはとても居心地の悪い時間。それでも僕らはその決めポーズを解かなかった。いや、正確には解けなかったんだ。それは関西男から「ネタの後は黙って何も言わない。そのままの体勢とつとけ」と言われていたからだ。

一向にポーズを解かない二人に、坂野先生が怪訝な顔をして再び関西男に尋ねる。

「浜谷君？ 終わりですか？」

「はい！ チェケラッチョ？」

「……終わりだね。…… よろしい。席に戻って」

「ウイ、ムツシュ！」

すると関西男は僕の頭を軽くはたいて「ほら、いつまでやっとなん」と腕を強く引つ張った。僕はその引力に逆らうことなくそのまま自分の席まで連れて行かされたのだった。

席に着くや関西男は自分たちのネタなどもう過去のものと言いたいのか、腕組みをして言い放つ。

「さて、他の連中がどこまでやるかやな」

この男は審査員気取りか？ どこまで横暴で自己中な奴なんだ…

…。  
そうして余裕を見せる関西男とは違って、僕は先ほどのネタが坂野先生にどう評価されたのか、不安で仕方がなかったのだった。特に、ネタよりも心残りなのが、最後のあの挑発するかのような決めポーズ。最初は呆気にとられた顔をした先生だったが、結局最後までクスリとも笑わずに僕らを睨み付けた。その顔は誰が見ても「怒っている」顔だった。

「ヤバイよ……駄目だ……本当にこのままじゃ駄目だ」

悔やんだ。後悔の念にさいなまれた。どうしてあの男から「ネタ合わせをするぞ」と言われた時に、正直に断らなかつたのか。居場所を求めて『フェイス・アクト』にやってきた僕。自分の将来が懸かつたこの世界で、どうして逆らえなかつたのか。このままでは普段の自分と何も変わらないじゃないか。  
握りこぶしにグツと力を込め、この時、僕は決意する。

「この男とは二度とコンビなんて組まない」

僕は自問自答したのだ。自信たつぷりなこの男と組めば、先ほどのようにそれなりの笑いは得られるかもしれない。でも、考えても見る。どうせここでクラスメイトから笑いを得られても、役者を目指す僕には何のメリットも無いんだ……。僕は僕なりにこのWAKUラスで評価を得て、本来の居場所であるAクラスを目指さなくては。初心を忘れかけていた僕に、役者を志すプライドが再び湧き上がってくるのだった。望んでいた新しい世界のために。

第二章（18） - WAの卵芸人たち 1 -

危うくお笑い芸人の道を模索しようとしてしまった僕。でも、関西男とは組まないと決意しただけで、どこかスッキリした気持ちになる。それはすでに演技を終えた後ということもあつたわけで。その後はなんとなく気分が楽になったのだった。

「では、次。希望者が居れば挙手してください」

坂野先生の声に数人の手が挙がる。かなりのプレッシャーとなる一番手と違って、二番手や三番手は比較的楽に前に出ることが出来る。先に僕たちが演じたことで、皆も演じやすいと感じているのだろう。

そういえば、このWAクラスに来て佐伯さんとは話をしたが、他の人とは殆ど接触しなかったわけで……。わずか十人程度でも、まだみんなの顔も名前も覚えてはいない。このネタ発表の時間は、そんな他のクラスメートとの交流のきっかけになる良い機会でもあつたのだ。

「それでは君……木多勇君だね。よろしく」

「はい！」

その人が僕らの前に立つと関西男は身を乗り出し、今まで見せたことのない真剣な表情を見せた。なるほど、どうやら審査する気満々だ。やっぱりこの男は大きく、あからさまに、確実に勘違いしている。

「審査をするのは坂野先生だっつーの！」

コンビ解消を決心はした僕だったが、まだまだそんな言葉を関西男に投げかけることはできなかった。僕は何度も心でそれを思いつきり発言する。

「……………どうも、木多です。漫談します」

年齢は二十歳くらいだろうか？ 見た感じ普通の大学生っぽい感じの木多さん。でも、このWAの生徒は殆どが二十代前後のようだ。ハッキリ言って僕のような中学生は場違いに思えてしまう。Aクラスには同年代も多かったし、そして何より、あの中條瑞恵がいるというのに……………。

「はーあ」

僕が無意識にため息を漏らしたその瞬間、左頭部を強烈な痛みが襲った。

「ちゃんと見とけボケッ」

それは関西男の張り手ではないか。僕は瞬間ムカツときたが、関西男の鬼のような形相の前に反抗などできる余地も無く、僕は「すいません」と小声で謝ってしまうのだった。

第二章（19） - WAの卵芸人たち 2 -

そして、いよいよ木多さんのネタが始まったのだ。

「ぼくは愛に目覚めた戦士。今日もひとつの愛を見つけたのでここでお聞かせしよう。彼は言った『もしもし、お嬢さん、ハンカチーフ落としましたよ』。すると彼女は言った。『ありがとうございませす。お礼にお茶でもいかがでしょうか』。キタキタキタキターッ！昭和のラブファイアーッ！……どうもありがとう」

あつという間の出来事だった。いや、十秒だからそれも仕方ない。暴走気味で迫力ある木多さんのネタに、ちらほらと笑いが起こった。ふと見れば、関西男もなにやらニヤニヤとほくそえんでいるではないか。でも、僕には何が面白いのか全くわからない。ハンカチーフ？ お嬢さん？ 昭和？ ラブファイアー？ あ、なるほど、木多さんだからキタキタキタと語呂合わせ？ 考えれば考えるほど迷宮入りだ。

そしてその後も、僕には理解不能なネタが次々と飛び出したのだ。つた。

木多さんに続いて出てきたのは、同じく二十歳くらいの早沢雅之さんだった。黒の皮ジャン姿に威嚇するような目つき。ちよっと近寄りがたい人だ。すると関西男がボソツとつぶやく。

「こ、この時代にそれかよ……やられた」

「はい？」

「モミアゲ見てみる」

「あ？」

早沢さんのそのモミアゲは、まさかのテクノカットではないか。関西男がプルプルと肩を揺らしている。どうやら笑いをこらえているようだ。

僕らのそんな下世話なツッコミなどお構いなく、早沢さんのネタが始まったのだった。

「えーっと、とりあえずこのコーラ飲みます」

彼は鞆からペットボトルのコーラを取り出し、ゴクゴクと勢いよく飲むと、右手を高々と挙げて宣言した。

「国家斉唱。ゲップは早沢雅之さんです……。きくみくがあくあくよくおくわあ〜……ゲフツ！」

その瞬間、生徒たちが大爆笑し、教室が揺れた感覚を覚えたのだ。

「自分、卑怯やわあ！ それにどっかで見ただそそんなん」

ニヤつきながら大声を張り上げて指をさす関西男。しかし僕は何が卑怯なのか、なぜ国家斉唱の前にコーラを飲んでゲップなのか。もうわけがわからなくなったのだった。

第二章(20) - WAの卵芸人たち 3 -

浜谷さんのあの無茶苦茶なネタではじまり、木多さん、早沢さんと、出てくる生徒たちが発表するネタは、どれもこれも奇抜なものばかりだった。坂野先生もその表情から、その評価にかなり困っていると同えた。まあ、僕もそれに加担してしまったけど。

「はい、では次は……」

「はい！ あのおー、ウチらコンビですう」

「……そうですか、では前に」

続いて登場したのは同じセーラー服を着た、女子高生らしきコンビだった。ギャルっぽくもなく、一見、どこにでも歩いていそうな普通の女子高生。「やっとまともなネタを見られそうだなあ」と、……思った僕が浅はかだった。

「野田沙里です」

「川井実加です！」

「ウチら十九歳、なんちゃってJKやってま〜す」

思わぬ『なんちゃって』宣言に啞然とする教室内。すると二人はその場にいきなり座り込み、おもむろにネタを開始した。

「なんちゃって動物園シリーズ！ 改革派のコアラ〜」

そう川井さんがタイトルを宣言すると、野田さんがノソノソとユーカリの葉を食べるジェスチャーを始めたではないか。よく見かけるコアラらしくスローな動き。と、その横で川井さんは野田さんの食べているユーカリを奪い取り、猛烈な勢いでその葉を食べ始めたのだ！ 怒る野田コアラが手を出すのが全く遅い。その間にも川井コアラはユーカリを食べつくす勢いだ。しかも、その食事速度は徐々にスピードアップしていく！

その風貌とは似つかわしくない体を張ったコント。ユーカリの葉を食べ続けるほどに、生徒たちの笑いもどんどん加速して行くのだ。つた。

「さつき廊下で必死にネタ合わせしとつたんがこれか」

関西男が苦笑いしつつボソツと突っ込みを入れる。思えば僕は自分のことで夢中だったせい、他の生徒の動向なんて殆ど気にも留めていなかった。きっと僕だけじゃなく皆もそうではないのだろうか。そんな中で、この男はしつかりと周りの動きを見ていたようだ。これも、彼の自信から成せるものなのだろうか。

女性コンビがネタを済ませたことで気が楽になったのだろうか、数少ない女子生徒の最後の一人が手を挙げて前に出た。久山あきなさんだ。白いワンピース姿の上品で清楚な感じのその女性。歳は二十代半ばくらいだろうか。

久山さんは深々と皆の前でお辞儀をすると、隠し持っていたハンドマイクを握り締め静かに語り始めた。

「ワタクシ、生まれも育ちも葛飾柴又。帝釈天で産湯をつかい、姓は車、名はエビ。人呼んで車エビちゃんと発します」

すると、彼女は手に持っていたハンドマイクをゆっくりと床に置

き、再び僕らに向かつて深々とお辞儀をしたのだ。そして、そのまま背を向けると、廊下に出て行ってしまふのだった。一瞬の静寂のち、生徒たちがどよめく。流石にこのネタには難しい反応をする生徒たち。が、僕からすれば皆同類なのですが……。

「どうでもええけど、何で即引退やねん……」

廊下から久山さんが戻ってくると、関西男がまたしても突っ込みを入れる。それにしてもイチイチ首を突っ込む男だ……。ただ、僕にとってはもはや関西男など、この恐るべき異空間に潜り込んだことを知った今では、すでに特異な存在ですらなくなっていたのだ。

第二章(21) - WAの卵芸人たち 4 -

「はい、次は……パク・ジュンユン君」

その名前から彼が韓国人であろうと、僕が察するのに時間はかからなかった。それにしても驚いた。まさか外国人が日本のタレント養成所に来ているなんて……。彼も二十代前半のようだけど、一体どんなネタを披露するのだろうか。やはり、韓国のお笑いは日本とは一味違うのだろうか？

パクさんはネタを始める前に何やら坂野先生に相談を持ちかけた。そして、坂野先生が「いいですよ」と返事をすると、彼は大きなバツグを抱え教室を出て行く。

「おいおい、どこいくねんアイツ」

関西男が眉をしかめる。彼はどうしたのだろうか。さては、このわけのわからない日本人たちに愛想が尽きて、いたたまれなくなったのだろうか。「韓国に帰ります」なんて言い出さないだろうか。

「しばらく待つてあげてください」

僕の無意味な妄想を掻っ切るように、坂野先生が生徒たちに向かってそう伝えた。やっぱり帰ったわけではないらしい。

しばらく彼の準備を待っていると、数分後、ようやく教室のドアがノックされた。

「どうぞ」

教室に現れた彼は、足元にまで及ぶ黒の長いコートを身にまとい、

ぎこちない動きで中央に歩み寄る。そして、国籍の違いなどどこかへ吹っ飛んでしまうネタが始まるのだった。

「ボクは、日本の八十年代を愛してマース！」

高らかにそれを宣言した彼は、真つ黒なコートをオーバーアクションで脱ぎ捨て、その下からショッキングピンクの煌びやかなスーツ姿が露になった。驚くのはそれだけではない。両足には今時手に入れるのも難しいであろう、ローラースケートを履いているではないか。時代錯誤なその風貌に教室内がどよめく！ それと同時に関西男が頭を抱え込んだ！

「……ミナサン、ボクの事をこれから『パクリン』と呼んでください。ヨロシクお願いしマース！」

そう言ってあまりローラースケートに慣れていないのか、恐る恐るターンを決めたパクさんに、生徒から笑いではなく拍手が起こったのだった。

「パ……パクリンて……」

関西男がまたしても頭を抱え込む。この人もパクリンさんに負けず劣らず、結構なオーバーアクションだ。

「君、それだけの為に着替えに行ったの？」

坂野先生が不思議そうに尋ねると、パクさんはきっぱり言い切った。

「いえ！ 十秒と聞いたので、自己紹介だけにしましたー！ ホン

トは一曲歌いたかったのですがー」

「は？」

隠されていた真実にきよとんとした表情の坂野先生。その先生のリアクションに、ようやく生徒たちから笑いが起こる。

関西男は「歌うってあのオッサン何を勘違いしとんねん」とブツブツ文句を言っている。ただ、正直な所を言えば、僕ら日本人の方が、よほど勘違いしているのではないかと、僕は思わずにはいられなかった。

次いでネタ見せで前に出てきた高鍋さんという二十歳前後の生徒。彼は往年のものまね芸人がやってきた、演歌歌手のモノマネを披露してネタを終える。よくありがちなモノマネだけど、僕にとってはこの変な空間にあつて、凄く普通に楽しめるネタでもあつた。

高鍋さんが引き上げ、坂野先生は生徒らを見渡しつついった。

「……では、次で最後だね。佐伯君、お願いします」

「はい」

いよいよ佐伯さんのネタ発表がやってきた。僕と同じく役者を目指し、何故かこのWAというお笑い芸人クラスに配属させられた佐伯さん。きつと僕よりも、お笑いという世界とは無縁で育つて来たに違いない。どんなネタをやるのか僕は興味しんしんだつた。

佐伯さんはかなり緊張した面持ちで皆の前に立つ。今日一日、数々のレッスンを完璧にこなしてきた佐伯さんが、初めて見せる不安げな顔だ。

「師匠、頑張れ！」

そう、僕は心の中で必死に応援した。

「佐伯です。……せ、先日ですね……ニュージールランドに旅行に行ったのですね。で、現地で『遊園地に行こう』って話になりました……。それで丁度新しく出来たという遊園地があつたので、仲間で足を運んだのですが、そこがですね、店員さんからお客さんまで全部お年寄り。しかもお爺さんばかりだつたんですね……。変だなあ

と。それで現地の人に尋ねたんです。『どうしてお爺さんばかりなのですか?』って……。ははん、なるほど、ニュージーランドだけに、『ニュー爺ランド』ってことかと……」

佐伯さんの嘸が終わった瞬間、僕は思わず声をあげて大笑いした。

「に、ニュー爺ランド!」

その響きを頭の中で思い返すだけで、もう歯止めが利かないくらい、笑いの副作用がこれでもかこみ上げてくるのだった。

だが、そうして笑っているのが僕だけだと気づくのに、そう時間はかからなかった。真横に座っていた関西男が白い目つきで僕をジロリと見るとつぶやいた。

「ダジャレやん」

「え? 面白くないですか?」

関西男はため息をついて、話にならないとばかりにそっぽを向いた。

僕には分からなかった。確かにダジャレかもしれない。でも、ニュージーランドにお爺さんばかりの遊園地が実際にあったとしたら、それはそれでかなり面白いと思わないか。

想像してみればいい。右を見てもお爺さん、左を見てもお爺さん。入場券を買うのも、その入場券を受け取るのもお爺さん。たまにはバスで乗りつけ団体でやってくるお爺さん。眼下に広がる景色を見ようと、観覧車の全ての窓から覗き込むお爺さん。そんな無数のお爺さんたちが、メリーゴーランドやジェットコースターに乗り、入れ歯を押さえながら絶叫をあげているその光景……怖い! 怖すぎる! でも、怖くて面白すぎるじゃないか!

そんな妄想をするうちに、またしてもお腹から笑いがこみ上げてきたのだった。

「ジジイが萌える！ ニュージージーランド！」

いきなり関西男が僕にそう投げかけてきた。ネタ見せの最中だというのに、耐え切れず僕はまたしても大笑いしてしまう。すると関西男が諭すように言う。

「な？ そういうこっちゃ。そこまで行って初めて成立すんねん」

「え？」

「客にそこまで考えさせて笑わせるってのは分かるんや。でもな、あの喋くりでは客の頭に真っ先に『ダジャレやん』が先にきてまっせやからアカンねん。アレじゃ中途半端で弱いんや」

関西男が妙にテンション低く佐伯さんのネタを評価する。

「ああ……なるほど……」

この時初めて彼の言葉に妙な説得力を感じた僕だった。

第二章(23) - アメとムチ -

「それでは、今日はここまで。お疲れ様」

坂野先生が教室を出て行くと、生徒たちから安堵感たっぷりのため息がアチコチで漏れた。それも仕方がない。僕もちろん、皆にとっても今日が初めての授業。朝からハードなスケジュールをこなしてきた。その上、最後には緊張感たっぷりのネタ見せ。拳句、肝心の坂野先生は全てのネタ見せが終わっても、僕らへの評価も下さないまま、『来週の宿題』を言い残し教室を去っていったからだ。体力的にも精神的にも疲労困憊の僕は、うなだれるように深く息を吐き出した。すると、関西男が僕の肩を叩く。

「お疲れ」

「え？ あ、どうも……」

「ところで、どうでもええけどお前今日、ピンやったら何するつもりやったんや？」

「ピン？」

「そんなんも分からんのか……。一人やったらどんなネタしたんや？ っちゅーてんねん」

それくらい知っている。でも、正直言えば関わりあいたくなかったのだ。僕は坂野先生から『十秒間』と言われ、咄嗟にひらめいたネタを素直に打ち明けた。

「あ……モノマネでもやろうかなあ……なんて思っていました」

「モノマネ？ 何のや？」

「その……ニワトリの……モノマネでも」

「はあ？ ニ、ニワトリ！」

関西男は何とか笑いを堪えようと必死の様子。全く失礼な奴だ。僕が怪訝な顔で関西男を覗き込むと、関西男は仕切りなおすように言った。

「ま、ともかくお前は華が無いねん。地味すぎる、ああ、地味すぎる。そもそも奥村つちゅー名前からして地味すぎる」

「はあ……」

「お前、来週から『ジミー』でいくぞ」

「は？」

「芸名や。地味やからジミーな。ダジャレ好きなお前にはピッタリやろ？ ……じゃあな」

そう言い残し、関西男は他の生徒たちと軽く挨拶を交え教室を出て行った。

まさか関西男に芸名まで決め付けられるとは。いや、そんなものを素直に受け入れちゃ駄目なんだ。あんな奴とは絶対にコンビなんか組むものか。そう決意したじゃないか！ 来週きつぱりと言わなきゃ。「アンタとはコンビなんて組みません」と。

「忘れとった!」

ドタドタと慌てるように教室へと舞い戻ってきた関西男。来週にコンビ解消宣言するぞと考えていた僕は思わず身を引いてしまう。すると関西男が僕に向かってこう告げた。

「今日のお前の『間』。完璧やったぞ」

わざわざ戻ってきて何を言い出すのかと思えば、出会って初めて関西男が僕を褒めてくれたではないか。

「ど、どうも……」

憎らしい相手にいきなり褒められると、急に親近感がわく。まさにツンデレだ。僕が照れくさそうに謙遜すると、関西男は再び僕の肩をポンと叩く。

「んじゃ、来週用のネタ。ちゃんと書いてこいよ。ああ、それからあの表紙の『ネタ帳』。アレはアカン。書き直しとけよ。んじゃな」

ほんの一瞬、『また彼とコンビを組んでもいいかな』と思った自分を、思いつきり責め立てる僕だった。

## 第二章(24) - プラトニック -

生徒たちが談笑しながら次々と引き上げていく中、佐伯さんも一人帰ろうとしていた。自然と僕は佐伯さんに話しかけたのだった。

「お疲れ様でした」

「やあ……お疲れ」

「あの佐伯さんのネタ。めちゃくちゃ面白かったですよ」

「そう？ あまり受けなかったけどなあ」

「そんなことないですよ。正直、他の人たちのネタの方が良く分かりませんでした……あ、僕のネタも含めて」

佐伯さんは笑いながら「君って面白いね」と言ってくれた。何だか妙に嬉しい。今日一日、それも今朝初めて話しただけに、僕にとって佐伯さんは、凄く身近な兄貴のような存在になっていた。

「奥村君、これから予定あるの？」

「はい？ いえ、別にないですよ」

「じゃあ、ちょっとお茶でもして帰ろうか」

「あ！ 是非！」

やがてビルの玄関を抜けると、先週と同じように中條瑞恵が立っ

ていた。「お疲れ様」と僕が声をかけると、彼女も「お疲れ様！」と返してくれたが、お互いそれ以上特に何かを話しかけるわけでもなく、僕は彼女の前を通り過ぎていく。

それは駅に向かう道中だった。佐伯さんが不意に問いかけてきたのだ。

「さっきの彼女、君を待っていたんじゃないの？」

「え？」

「待ち合わせしていたのなら、遠慮しなくていいよ。今日はやめておこうか？」

「いや、そうじゃないですよ。きっとAクラスの誰かを待っているんですよ」

「……本当に？」

「はい……ん？ いや、はい」

僕はまだ気づいていなかった。いや、それを信じきれなかった。

本当は彼女が僕の帰りを待っていてくれたのだという事に……。何より、自分で言うのもなんだが、奥手な僕にとってそんな図々しい考えを持つことができなかった。

佐伯さんは何かを思い返すように、上の空で言った。

「……プラトニックかあ」

「え？」

「いや、何でもないよ」

「はあ」

あのビルを出た時、佐伯さんには分かっていたのだ。僕を見た彼女の笑顔が、何を示していたのかということ。

「あくまでも俺が受けた勝手な感覚だけだね」

「はは……そうですね。きっと……」

「なんだ。やっぱりプラトニックじゃん」

「ち、違いますって!」

「で、いつ告白すんの?」

佐伯さんはそう言って道中僕を冷やかし続けたのだった。それは案外、嫌でもないものだった。

一月も終わりを迎える寒空の中、僕は突然押し寄せた暖かな空気に包まれたような、そんな気分だった。

第二章(25) - 佐伯和彦 -

喫茶店で佐伯さんとの話も弾み、小一時間ほど過ごした後、僕らは佐伯さんがよく利用しているという居酒屋にやってきた。

「じゃあ今日はお疲れ様でした！」

佐伯さんはビール、僕はコーラで乾杯だ。佐伯さんが気を使つて「ビール飲む？」と言つてくれたが、未成年の僕は当然飲めないわけ。佐伯さんは「俺がそんなこと言つちや駄目だよなあ」と苦笑い。そしてグイツと美味しそうにビールを飲む。

「佐伯さんのお父さんつて……有名な役者さんなんですか？」

自分ではあまり深く考えずに尋ねた質問だった。でも、佐伯さんにとつてはかなり不意を突かれたらしい。動揺した顔つきで「誰に聞いたの？」と尋ね返してくる。

「青柳さんです。Aクラス担当の……」

「ああ、あの人か。やっぱりあの人つてお喋りだなあ」

佐伯さんは付け出しを口に運びながら「やっぱりあの人お喋りだなあ」と愚痴をこぼしたのだった。

「ちょっと気まずい空気だ。僕はマズイことを言つたと感じると、「すみません」と謝つてしまう。すると佐伯さんは「何で君が謝るの？」と笑つてくれた。そして……。」

「俺のオヤジはね……高蔵健三郎だよ」

その名前に僕は言葉を失った。『高蔵健三郎』は日本人なら殆どの人が知っているであろうベテランの名俳優。技術もあり味もある演技派の役者さんだったからだ。

佐伯さんは続けて僕に打ち明けてくれた。

「俺はね、親の七光りでデビューするのは絶対に嫌だったんだ。役者は小さい頃からの憧れだったけど、オヤジのおかげでデビューできたなんて思われたくない。だから『フェイス・アクト』というオヤジとは縁もゆかりもない事務所で、研修生としてスタートすることにしたんだよ」

佐伯さんの話に僕は胸を打たれた。あの『高蔵』の息子で、しかも当の本人が役者を目指している。それだけでも自然と表舞台への道は開けているはずなのに、この人はそれを拒んで自力で父親の後を歩んでいくつもりなのだ。

「じゃあ、なおさらAクラスに行きたいですよね」

僕の問いかけに佐伯さんは意外にも首を横に振った。

「先週末まではそんな気持ちだったけど、今日で考えが変わったよ。お笑い芸人の道も、役者と同じように厳しい世界だと痛感した。だから、このWAでまずは成功させたいと思う」

どこまでポジティブな人なのだろうか。いや、それはきっと自分に自信があるからこそ言い切れるのかもしれない。思えば僕は自分に自信が無かった。だからこそ新しい居場所を模索したのではないだろうか。

「佐伯さん。僕とコンビ組んでください」

「え？ でも君にはあの浜谷君が……」

「あんなのは要りません。僕には佐伯師匠が必要です」

「し、師匠？」

とても晴れ晴れとした気持ちだった。共に志す最終目標は違っても、お笑いの道をやってやるうじやないかという意欲が沸々と煮えたぎる。

ただ、この時の僕には、やがて二人に訪れる苦しみの日々まで、感じ取ることではできなかったのだった。

## 第二章までのあらすじ・登場人物紹介

……第二章までのあらすじ……

中学生の奥村光弘は、大手芸能プロダクション『フェイス・アクト』が催す、新人タレントオーディションに合格し、役者という新しい居場所へのスタートを切る。

ところが、彼が配属されたのは俳優志望のAクラスではなく、新たに創設されたお笑い芸人を育てるWAクラスだった。

お笑い芸人を目指す個性的な面々の中、彼と同じく役者を志し、WAに配属されてしまった佐伯と知り合った光弘は、Aクラス転属を目指しコンビを組もうと決意するのだった。

……登場人物紹介……

年齢は登場時。紹介文の最後にある（ ）内の数字は初登場ページ。

奥村光弘（14）

（おくむら みつひろ）

主人公。大人しく目立たない人畜無害な中学二年生。たまに”笑いの神”が降臨するが、本人はそれをコントロールできない。（第一章・1）

中條瑞恵（14）

（なかじょう みずえ）

『フェイス・アクト』Aクラス31期生。目指す女優像は「人に嫌われる女」。だが、人に感化しやすい性格。（第一章・9）

浜谷勝也(19)

(はまたに かつや)

言葉遣いの荒い関西男。笑いに対する自信と情熱は半端ではない。親の反対を押し切り上京して一人暮らし。(第一章・13)

佐伯和彦(22)

(さえき かずひこ)

正義感がめつぼう強いイケメン。光弘同様、役者を志望するがWAに。父親は超有名ベテラン俳優の高蔵健三郎。(第二章・5)

坂野重雄(65)

(さかの しげお)

演技指導の先生。舞台俳優を続けるかたわら『フェイス・アクト』の客員指導者に。(第一章・8)

奥村雪菜(11)

(おくむら ゆきな)

光弘の妹で小学校五年生。夢はピアニスト。好奇心旺盛でハッキリモノを言う。光弘の受けた『フェイス・アクト』所属の俳優、飯田友宏のファン。(第一章・4)

奥村誠太郎(51)

(おくむら せいたろう)

光弘、雪菜の父親。口数少ないが温厚な性格。光弘、雪菜の夢を尊重している。(第一章・4)

奥村公子(46)

(おくむら きみこ)

光弘、雪菜の母親。少し神経質でお節介やき。光弘には厳しく雪菜

には甘い？（第一章・4）

木多勇（21）

（きだ いさむ）

WAクラスの1期生。『愛の戦士』を謳い、さまざまな愛のある場面をネタにしている。（第二章・18）

早沢雅之（21）

（はやざわ まさゆき）

WAクラスの1期生。ゲップを操るフィーリング芸人。粋なテクノカットがポイント。（第二章・19）

野田沙里（19）

（のだ さり）

WAクラスの1期生。『なんちゃってJKコンビ』の一人。サバサバした性格。（第二章・20）

川井実加（19）

（かわい みか）

WAクラスの1期生。『なんちゃってJKコンビ』の一人。芸風と違って生真面目。（第二章・20）

久山あきな（25）

（くやま あきな）

WAクラスの1期生。大人の雰囲気醸し出すしたたかな女。愛称は『エビちゃん』を強要。（第二章・20）

パク・ジュンユン（24）

（ぱく じゅんゆん）

WAクラスの1期生。日本の80年代をこよなく愛する韓国人の会社員。芸名は『パクリン』。(第二章・21)

### 第三章「笑いの世界」(1)・雪菜のピアノ

タレント養成所『フェイス・アクト』での初日のレッスンを終え、佐伯さん行きつけの居酒屋にやってきた僕たち。佐伯さんとの話が思いのほか盛り上がり、店を出る頃にはすでに辺りは薄暗くなっていた。

役者への道が少し遠回りになってしまったWAクラスで、同じ境遇の佐伯さんと知り合い、コンビ結成を誓った僕ら。一度はお笑いの世界なんて僕には無理だと感じていたが、心強い佐伯さんの存在が、その不安を払拭させてくれたのだった。

「やってやる。まずはお笑い芸人でも何でも良い。自分の居場所はきっとその先にあるはずだ……」

自宅の近くまで戻ってくると、どこからかピアノの音が薄っすらと聞こえてくる。

「あれ……また始めたのか」

それが妹、雪菜の弾くピアノの音ではないかと感じつつ、玄関のドアを開ける。案の定、それは自宅の二階から大きな音となって聞こえてくるのだった。

すると、僕の帰宅に気づいた母さんがリビングから出てきた。

「お帰り、遅かったわね。ご飯、もうすぐ出来るよ」

「うん。……あのピアノ。雪菜また始めたの？」

「そうよ。『私も兄ちゃんに負けていられない』ってさ」

「何だよそれ」

母さんは「あんたも頑張つて」と僕にはっぱをかけ、再びリビングに戻っていった。

まだ指の運びもおぼつかない雪菜のピアノ。あいつの夢はピアノニストだった。

ピアノは小学校入学前から練習していた。だが、いつからかその練習もおろそかになって行き、暫くはその音を聴くこともなかったのだ。久しぶりに聴いたその音に、どこか懐かしさを感じた僕。芸能界を目指した僕に触発されたのか、雪菜もまた、諦めかけたその夢を叶えようとしているらしい。

「よし、俺もやらなきゃ」

別に雪菜から直接応援されたわけでもないのに、そのピアノの音は僕の心に痛いほどエールとなって響き渡るのだった。

僕は二階の自室に駆け上がると急いでネタ帳を取り出した。

「……『私のレ・シ・ピ』と」

表紙に書いてあった『ネタ帳』の文字を黒く塗りつぶした。あの関西男の言うことをそのまま真に受けるのもしゃくに障るが、そんなことは言っていられない。それよりも、僕の中であの関西男に対する印象が少し変わったことどこかにあった。

笑いの本場関西で育ってきたであろうあの男。『笑い』については少しばかりは一目置いておいても、別に悪くは無いだらうと感じ始めていたのだ。

もちろん、何も知らされていない僕を使って、形はどうであれ即興で笑いに繋げた僕らのネタや、佐伯さんのネタに対する筋の通った批評を聞かなければ、きっとそんな風には受け取らなかつたはず。ただの口の悪い鬱陶しい男に留まっていたら。関西というお笑いの本場ではなく、わざわざ東京のタレント養成所に応募してきたあの男に対して……。

「でも、あの人なんて関西の養成所に行かなかつたんだ？ 確か十九歳って言ってたよな……。大学がこつちなのかな？」

あれこれ考えているうちに「そんなことどうでもいい。まずはネタを作らなきゃ」と、新しいページにペンを走らせる。

来週に向けた坂野先生の宿題。それも今日とは全く違う『各自十分間のネタを用意してこい』という難題だったからだ。

### 第三章(2) - ム力つくほど大嫌いです -

翌週の朝。駅からビルへ向かう僕の気持ちは不安で揺れていた。それは十分間のネタ発表に対してではない。あの関西男に正面からキツパリとコンビの解消を告げなければならないからだ。僕はその切り出し方をあれこれと考え歩いていた。

「僕は佐伯さんと組みますから、他を当たってください」

これでは何だか僕が一方的に突き放したようでカンジが悪い。

「気持ちは嬉しいのですが、僕にはもう決めた人がいますので……」

駄目だ。これではまるで関西男から『付き合ってくれ』と告白された返事みたいだ。考えただけで気持ち悪い。

「あーもっ!」

よくよく考えれば、僕から進んであの男とコンビを組みたいと言ったわけではないのに、何でこんな気遣いをしなくちゃならないのか。いつその事本心をぶちまけてやるうか。

「僕はあなたの事がム力つくほど大嫌いです……ってな!」

「……え?」

「はい?」

僕は全身に寒気を感じた。真横から聞こえたその声は、中條瑞恵

だったからだ。

「いや、今のはその。別に中條に言ったわけじゃなくて」

「今日の演技の練習？ そんな台詞あつたっけ？」

「は？ いや、そうなんだ。WA用の特別授業で……。ははっ」

どう考えても強引な言い訳に終始する僕。顔は笑っても目が笑っていないことは自分でも気づいていた。でも、オロオロする僕に気を使ったのか、中條は取り立ててそれを深く追求することなく、上の空でつぶやいた。

「いいなあ……。WAって楽しそう。Aクラスって地味だからさ」

「え？ そうなの」

「まだあまり他の子と話もしてないんだよね。声かけても自分のことで精一杯みたいで……。まあ一日目じゃしょうがないか」

ふと、先週佐伯さんから言われた言葉が脳裏をよぎる。やっぱりあの時、彼女は僕を待ってくれていたのだろうか。僕は何とか彼女を励まそうと切り出した。

「あ、ほら、先週帰り際に僕と一緒に居た人、覚えてる？」

「うん、背も高くて結構カッコいい人だよね」

「そう、あの佐伯さんっていうんだけど、凄く頼りになる人なんだ」

「そうなんだ。羨ましいなあ」

「僕にだってそんなクラスメイトが出来たくらいだし……だから、大丈夫だって。明るい中條ならすぐに友達もできるって」

「……だといいんだけどね」

少し笑った彼女を見て、僕もどこか嬉しくなった。気づけば先ほどのまでのモヤモヤした気持ちも忘れ、彼女との話に夢中になっていた僕だった。

### 第三章(3) - なんちゃってJKコンビ -

教室に入ると、すでにあの『なんちゃって女子高生コンビ』が登校しており、片隅でネタ合わせに没頭していた。まだネタの発表まで時間もあるのに、真剣な顔で練習をしている。先週のネタ発表で見せた、あの軽い感じの雰囲気はそこになかった。

「関西男の言っていた通り、彼女たちって練習熱心なんだなあ」

僕は彼女らに「おはようございます」と声だけかけると、負けてはいられないと早速ネタ帳を開いて今日の発表に向けて予習する。とはいえ、まだ相方である佐伯さんには、自分の書いたネタを見せ ていなかった。休憩時間や昼休みに詰め込まなければならなかった。十分間という長いネタ見せ。「間に合わなければメモを見ながらでも構わない」と、坂野先生は先週付け加えていた。だが、そんな言葉に甘えられるわけがない。彼女らのように、時間を惜しんでも取り組まなければ、芸人どころか役者の道も閉ざされてしまう。笑いの評価をもらう前に、まずはその前向きな姿勢を坂野先生に見せなければ……。

すると、彼女らの一人、野田沙里さんが声をかけてきた。

「今日も彼とネタやるんでしょ？」

「え？」

「浜谷君だよ。自分ら先週面白かったよ」

「そ、そうですか……」

「だってさあ、あの厳しい先生の前で初日にあんなマネ、ネタでもできないよフツー」

確かに、僕らのやったネタは先生を小ばかにしたようなものだった。もつとも、アレは関西男が勝手に決めたものであり、それが彼とのコンビ解消を決めた理由のひとつでもあったわけで……。と、そこに相方の川井実加さんもやってきた。

「沙里、時間無いよ！」

「ハイハイ、アンタ真面目過ぎるって。……聞いてよ。今日だってもう一時間ネタ合わせしてんだよウチら」

「えー？ い、一時間ですか？」

聞けば、まだビルの玄関も開錠されていないうちからやって来て、寒空の玄関前でネタ合わせをしていたというではないか。それを聞いて彼女らの意気込みは半端ではないと思うと、僕はますます感心する。ただ、むしろそれを主導しているのは川井さんの方で、野田さんは少しばかりへきえきとしてしている様子。

「でもさあ、どんなに頑張ってもお笑いと関係ないあの先生に認めて貰わなきゃ駄目なんてさあ、ちよつとム力つくじゃん？ 文句の一つも言いたい時に自分らのアレでしょ？ だからちよつとスツキリしたよ」

野田さんがグッジョブとばかりに親指を突き出すと、川井さんのせかす声に応えるように、再び教室の隅でネタ合わせを始めた。

そうなんだ。役者とかAクラス以前に、坂野先生からそれなりに

評価をしてもらって始めて表舞台への道が開けるんだ。

僕は自分を責めた。心のどこかでは佐伯さんの父親という大きな存在に、役者への近道となる淡い期待を持っていた自分に。でも、それはきつと佐伯さん自身が納得しないはず。何が何でも佐伯さんとのコンビで坂野先生に認めさせるんだ。

僕は再びネタ帳に目をやると必死でネタの暗記を始めるのだった。

### 第三章(4) ・関西男の思わぬ一面・

先週と同じく、午前中から発声、ダンス、日本舞踊、演技指導とこなしていく。そんなハードスケジュールの中、WAの生徒にとって一番重要なのは、やはり最後のネタ発表の時間なのだ。

昼休みも食事の合間を縫って、僕と佐伯さんはネタ合わせに取り組む。

そのネタは中学生の僕が、佐伯さんよりもオヤジくさいボケをするという設定だった。必然的に僕がボケ、佐伯さんがツツコミになる。もつとも、僕がボケ役に適しているかどうかは分からないけど……。

「十分間」というネタを当日になって打ち合わせる僕ら。ネタ合わせを進めるうちに、その無謀さを僕は痛感するのだった。自分で書いてきたネタなのに、全く頭に入ってこない。佐伯さんがツツコミを入れる所で僕がボケを被せてしまったり、次の言葉が出てこなかったりと、佐伯さんの足を引っ張り続けてしまう。一方で佐伯さんの記憶力は凄かった。今朝初めて手渡したネタ帳のコピー。それを昼休みには完全に覚えきっていたのだから……。

「奥村君、これ一人で書き上げたんだろ？ 凄いなあ……感心するよ」

「いや、とんでもないです」

今にして思えば先週「ネタは僕が作ります」と、言っておいて良かった。きつと佐伯さんが作ってきていたら、僕はそれを覚えきることができたかどうか……。

「そついえば……彼、今日もまだ来てないね」

不意に尋ねてきた佐伯さん。その『彼』が誰を指すのかが、スグに分かってしまう。

「ああ、浜谷さんですか？ そうみたいですなえ」

先週の坂野先生から受けた注意も、あの男にとっては蚊ほどでもないようだ。きっと今日も『面倒くさい』と、他の授業を受けず、ネタ発表の直前にやってきて先生につまらない言い訳をするつもりだろう。ただ、そんな彼のいい加減さは、コンビ解消を打ち明ける理由の一つとして願ったり叶ったりなわけで。すると佐伯さんが関西男について話し始めた。

「さっき聞いたんだけど、彼さ、休みなしで毎日仕事しているらしいよ。きっと今日も仕事じゃないかな」

「……え？」

「なんでも、大阪の高校を出てから、親の反対を押し切ってすぐここへやって来たらしいよ」

「……そうなんですか」

思ってもみなかった関西男の素性。僕はあまりにも彼に対して感情的過ぎだった自分を少しばかり恥じた。

「全部自分の決めた事だからって、仕送りもしてもらわずに自分で働いて生活しているってさ」

僕はまだ中学二年生。当然親の存在が無くてはこの養成所にも通えないのだ。夢を追うのは自分の勝手。だからこそ、中途半端に夢を追ってはいけないのかもしれない。

「年下だけどそういう所は見習わなくちゃいけないと思う。立派な根性の持ち主だよ」

佐伯さんがそう言うのも我が身を振り返っていたからだろう。彼もまた家を出て一人暮らしをしているらしいが、経済的にはそこまですぐ切羽詰るほどでもないからだそう。やっぱり、あの『高蔵健三郎』の息子。貧乏人の僕らとは生活観も違うのだろう。

「まあ、その前に彼の場合は言葉遣いに難点があるけどねえ」

ネタ帳を読みながら、笑って苦言を呈す佐伯さん。

「そ、そうですね……」

僕はこの時から、『関西男』という表現を使わなくなったのだ。た。

### 第三章(5) - 解消そして誕生 -

午後二時五十分。歌唱指導のレッスンが終わる。休憩が済めばいよいよ二回目となるネタ発表の時間だ。

今日一日、僕と佐伯さんはそれらレッスンが終わると同時に、休み時間返上でネタ合わせに専念していた。そして、その進行と同時に僕が書いてきたネタはどんどん変化していった。佐伯さんのツツコミに対し、自分で考えてきた言葉が合わないなと感じることもあれば、思わぬアドリブから話が広がったりもした。

「これがネタ合わせというものなのか」

僕はそう実感せずにはいらなかった。

粗を見つけては何度もネタ帳に修正を入れる作業の繰り返し。このままでは本番までに間に合わない。そんな焦る気持ちは他の生徒も同じようで、教室や廊下といったあちこちで、皆真剣な顔でネタ合わせに取り組んでいる。先週とは明らかに違った雰囲気があった。

「流石に『十分間』のネタ見せとあってみんな緊張感あるね」

佐伯さんも一日目とは違う彼らの気迫を感じたのだろう。

「僕らも負けてられないですね」

「そうだね」

僕らが再び細かい言葉回しを入念に打ち合わせていこうとしたその時だ。

「グッモーニン！ WAの諸君」

もうすぐ坂野先生がやってくるというこの時間に、案の定その声が教室に轟いた。

僕は不意を突かれとたんに萎縮してしまう。今日のネタ発表の前に、僕には重要な大仕事があったからだ。彼にコンビ解消を告げるという大仕事だ。でも、恐れていられない。すでに僕は佐伯さんと船出したんだ。

「……佐伯さん、ちょっとすみません」

僕は意を決し、佐伯さんとのネタ合わせを中断して彼に近づいていく。ウジウジしていられない。キツパリと彼に言わなければ。

「おっジミー！ 今日もちゃんと来てるやんけ！」

『ジミー』は先週彼から無理やり名づけられた僕のあだ名だ。正直なところそんなことすっかり忘れていた。

相変わらず皮肉っぽく浜谷さんに挨拶されながら、僕は苦笑い浮かべ切り出した。

「すみません、あー、コンビの話なんですけど、実は……浜谷さんとは……」

「スマン！ 悪いけど、お前とはコンビ組まれへんわ。他あたってくれるか」

「は？」

浜谷さんはそう言うと、ツカツカと久山あきなさんに近寄っていた。そして二人は何やら小声でボソボソと、事前に申し合わせていたかのようにネタ合わせを始めたではないか。

「ふーん。異色コンビ誕生だね。あの二人、何やらかすんだらうね」

佐伯さんが興味深そうに浜谷、久山ペアを見つめる。だが、僕にとって彼らの電撃結成など問題ではなかった。こちらからコンビ解消を打ち明けるどころか、コンビを組もうと言ってきた相手に、先にお払い箱にされてしまった僕の立場。こんな惨めな思いをして正気でいられるだろうか。その瞬間、燃えるように怒りがこみ上げてきた。

「は・ま・た・に……お前には……お前だけには絶対負けてなるものか……！」

僕は今一度気合いを入れなおし、佐伯さんとのネタ合わせを始めた。

第三章(6) - クビ切り宣言 1 -

しばらくして坂野先生が教室に入ってきて、ネタ合わせを中断する者は誰一人としていなかったのだった。みんなネタ見せをなんとしても成功させたかったのだろう。

坂野先生はそんな僕らを遮ることもなく、窓際の椅子に座ると何やらテキストに目を通している。僕は「いいのかな」と思いつつも、そのまま佐伯さんとネタ合わせを続けるのだった。

「……では、そろそろはじめましょうか」

十分くらい経っただろうか。ようやく坂野先生が生徒らに声をかけた。思い思いの場所で練習していた皆が、ソロソロと集まってきた。中央に並べられた椅子に腰をかけていく。

「よお、ジミー。そっちはどうや？」

「あ、まあ……」

浜谷さんはまたしても僕の横に座った。正直言えばコンビ解消したんだから、もう僕には構わないでほしかった。まったく、どこまで面倒くさい人なんだ……。

「今日のネタは十分間と申し上げた。恐らく素人のあなた方はその十分間という時間を持て余すことでしょう」

坂野先生は淡々と口にした。それは確かにその通りだった。佐伯さんとのネタ合わせ中、十分間というものが、こんなに永いとは思ってもいなかったからだ。

十分もの間、自分たちの話に客をひきつけ、しかも笑わせなければならぬ。聞けば関西の漫才師はさらに長い十五分ものネタを、舞台上で披露することもあるという。それも、ショートコントを組み合わせたつぎはぎのネタではなく、一本の筋が通った、ネタ振りとおチまでの起承転結が仕上がっているネタらしい。

「板の上でそれをやり切れてこそ漫才師、いや、芸人と呼ぶにふさわしいと僕は思います。テレビなどでショートコント全盛の今だからこそね」

坂野先生はそう切々と訴えたあと、続けてこの十分間のネタ発表についての真意を話し始めた。

「あなた方に先週、わずか十秒というネタを発表してもらったのも、今日のこの十分間も、いずれも大きな意味を含んでいます。無論、あなた方のネタが世間に通用するのかという目的もあるが、それと共に早いうちに知っておかなければならないことがある」

僕らは困惑した様子で坂野先生の意味の答えを待つ。すると、坂野先生は静かにそれを語り始めた。

「あなた方もお気づきだと思うが、先週でまた一人、このWAから脱落者が出ました」

途端にざわついた教室内、僕は教室の生徒の顔を見渡す。そうだが、ネタ合わせに没頭していて気づかなかつたが、先週演歌歌手のモノマネを演じたあの人が居ないではないか。

「彼は、僕が落としました」

よもやの発言で教室内に緊張が走る。坂野先生は、そんな生徒らの反応を見て、どことなく笑みを浮かべたような、そんな気がした僕だった。

### 第三章（7） - クビ切り宣言 2 -

突然切り出された坂野先生の衝撃的なクビ切り宣言に、ザワザワと動揺する生徒たち。その強引なやり方に、浜谷さんもギツと坂野先生を睨み付ける。

そんな中ただ一人、坂野先生に食って掛かる人がいた。佐伯さんだ。

「納得できません。彼自身が望んだならそれも仕方ないですが、どうして無理矢理辞めさせられなきゃいけないのですか！ 大体、先生にそこまでの権限があるのでしょうか」

その姿に、入所式で見た熱い佐伯さんを思い出した。親に頼らず自分の手で芸能の世界を志している佐伯さんにとって、この話は容易に受け流せないのだろうと僕は感じるのだった。

「説明をお願いします。何故、彼を落としたのか」

「……『何故、彼を落としたのか』……ですか。いいでしょう。その理由は簡単です。彼はモノマネをしたからだ」

予想外だった。そんな坂野先生の言葉に生徒たちは怪訝な顔で互いを伺う。

「それでは答えになってないです。モノマネなら他の人だってやっただじゃないですか。それに十秒ですよ？ しかも事前に知らせてくれてなかった。あの状況でモノマネを選択することも不自然ではないはずですよ！」

佐伯さんが猛然と坂野先生に問う。でも、坂野先生は顔色ひとつ変えずに冷静に答えたのだ。

「十秒という短い時間……、ここにいるあなた方は、あの短期間に形こそどうあれオリジナルを表現した。だが、彼は今まで多くのモノマネ師がやってきたものを、安易に模写したに過ぎない。よくある『モノマネのモノマネ』だ。僕はそこが気に入らなかった」

「そんな……。それだけで強引に辞めさせたのですか？」

「強引ではない。後日、僕は彼を呼び出し直接尋ねた。『本気でこの世界でやっていく気があるのか？』と。……残念ながらそうではなかった。彼は『遊び感覚だ』と言った。だからこそ辞めていただきました。彼も納得の上で」

「……………」

それ以上何も言えず、佐伯さんは静かに身を引いたのだった。シヨックだった。まさかモノマネしただけで辞めさせられるなんて。この先生はどこまで厳しい人なんだ。すると浜谷さんが小声で僕に声をかけてくる。

「ジミー。よかったなあお前。先週ニワトリやっとなら多分クビやっただぞ」

「えっ？」

そうだった。もし浜谷さんにコンビを誘われていなければ、僕はニワトリのモノマネを演じるつもりだった。

それは先生から『十秒』という時間を宣告された時だった。十秒

間のできる短いネタなどネタ帳に書いておらず、僕が混乱していたときだった。突然全身を電気が走りぬけ、目の前が真っ白になった瞬間、脳裏に駆け巡ったのがニワトリだったのだ。その昔、小学校で飼っていたニワトリ。飼育委員だった僕があ当時のニワトリの生態を体で表現し、『コケコケ』と鳴いてみたらどうかと思う付いたのだった。

「ヤバかった……。もしニワトリをやっていたら……」

そう考えただけでも、背筋がゾーンとしてきた僕だった。

### 第三章（8） - 芸能人は未熟な社会人 -

「あなた方の中には、まだまだこの世界を甘く見ている者がいる。確かに、芸能界を見渡せば、中には人間としてどうしようもない芸能人もいることは確かだ。だが、僕は今まで一度もそんな下らない芸能人を世に送り出したつもりはない。それだけの信念を持ってここに立っている。……役者もお笑いも関係はないのです」

お笑い芸人の世界。そう聞いただけならば、俳優や女優、ひよつとしたらアイドルよりも、どこか軽い感覚を受けるかもしれない。でも、それはとんでもない誤解なのだろうか。

坂野先生は演技指導の先生。お笑いの世界とは住む世界が違う人だどこかで思っていた。だが、実は芸能界と呼ばれる世界で生きようとする者にとって、先生は当たり前のことを教えてくれているのかもしれない。社会を知らない僕らのために。

「そこで、浜谷君に聞きたい」

「へっ？」

唐突に名前を出されて、先ほどまで先生を睨み付けていた浜谷さんも、流石に動揺した様子で立ち上がる。そんな彼に坂野先生は冷たく言い放った。

「今日の遅刻の理由を聞きましょうか」

「え？ あ、はいはい……えーつつとつすね……」

この重苦しいムードの流れに、歯切れも悪く苦しんでしまう浜谷

さん。

「どうしました？」

坂野先生の問いかけに、浜谷さんも即答できない。ざまあみる。今まで僕を散々馬鹿にしたからだ。でも、よくよく考えれば、先週彼に誘われなかったら、ひよっとしたら僕はここにいなかったのかもしれない。そう考えると命の恩人になるわけで……。なんだか複雑だ。

すると、浜谷さんは思い出したように話し始めた。

「そうそう、今朝起きたらですね、このジミー奥村君が、俺ん家に電話してきたんすよ。んで、『浜谷さん、今日は臨時休校だそうですねよ』って言うもんで……。いやあ、ついうっかり……。」

事実無根のとんでもない話だ！ 僕は思わず飛び上がって「違いますっ」と声を荒げた。坂野先生の前でなんていうことを言い出すんだこの命の恩……。いや、この殺人鬼！

するとどうだ、あるうことが正当な反論にも呆れ顔で「お前なあ……。」「と、浜谷さんが僕を見るではないか。あり得ない！ このまま自分が辞めさせられるなら、いっそ僕まで道連れにしてやろうというのかこの男は！

そんなやりとりの中、割って入るように坂野先生が浜谷さんに尋ねるのだった。

「君は『休み』と聞いたと言うが、その割にはちゃんとここに来ているね。その辺の理由も聞かせてもらおう」

「あ……。それはっすね。その……。臨時休校だけに、『臨時急行』なっんつって」

「だっ……ダジャレじゃないかあ！」

僕は大声で浜谷さんにツッコミを入れた。もちろん、心の中で。

### 第三章(9) - 十分間の意味 -

「もうよろしい、席に着いて。とにかく、遅れるならもっと早く事務所に連絡をよこさない」

「ハイ。すいませんでしたあゝ！」

坂野先生に促され、浜谷さんはフーツと息を漏らしどっかりと椅子に座る。そして僕に向かって再び呆れ顔で言うのだった。

「それにしてもお前、ホンマにボケ殺しやなあ」

それが何を意味しているのか。その時の僕には全くわからなかった。僕はムキになって反論する。

「じよ、冗談じゃないですよ。僕はそんな電話かけてませんし、第

一、浜谷さんの家の電話番号も知らないんですよ！」

「はあ……。もうええわ」

何故か頭を抱え込んでしまう浜谷さん。すると坂野先生は生徒達に声をかけた。いよいよ今日のネタ見せの時間だ。

「とにかく、別にネタが面白くなくても、笑いを得られなくても構いません。元々十分間も人を惹きつけ、笑わせられる腕があなた方にあるとは思っていません。だから、僕は僕なりに評価します。十分間という意味に基づいて」

その意味が何なのかは、ついに坂野先生の口から発せられること

はなかつた。クビ切りの選定のほかに、何か意図するものがあるのだろうか。

モノマネという誰もが考えそうなネタをやっただけで、あっさりと辞めさせてしまう先生だ。僕らがいまさらその意味を気にしても仕方ないのかもしれない。ただ、だからといって僕がこれから演じるネタで本当に大丈夫なのか分かるはずも無いわけで……。僕の心に不安が押し寄せてくる。

「さて、では最初は誰にやってもらいましょうか」

挙手を求める坂野先生に、その瞬間は生徒の反応も薄かった。それもそうだ。トップバッターという重責以前に、ついさっきそのネタ次第ではクビになると言われて、誰が喜んで手を挙げるだろうか。そんな猛者がいるならきつと将来プロに……。

「ハイッ！ ハイッ！ センサー俺ら行きます」

真横から拡声器でも使ったかのような大声が響く。それはつい先ほど先生から注意を受けた浜谷さんだ。この人はどうしてここまで強気なのだろうか。

「では、浜谷君前へ」

すると浜谷さんは僕をチラリと見た。まさか、今日もいきなりコンビを組もうと連れ出されるのだろうか。だが、ニヤリと笑みを浮かべると、浜谷さんは席を立ちあがり、テンション高く一人で前に出て行く。

「ハイッ！ ハイッ！ ハイッ！ 公園に〜行きましょう」

よく分からない歌を口ずさみ、やけに上機嫌な浜谷さん。ともかく、どうやら今日はお呼びもかかりそうに無いようだ。僕は次々と押し寄せたプレッシャーから少し解放され、全身の力が抜けてホッとすするのだった。

「確か……浜谷さんは久山さんとコンビ組むんじゃないっけ」

見ると久山さんはまだ席に着いたままだ。なるほど、きつとあの強引な浜谷さんのことだ。彼女もそんな彼に嫌気がさし、このわずかな時間でコンビ解消を決断したに違いない。「やっぱりあなたとは組みません」と。きつとそうだ。ざまあみる！ この……命の恩人！

僕のそんな妄想をよそに、浜谷さんは落ち着いた口調でネタを始めたのだった。

「えーっ、ども。もうさあ、俺さあ、なーんかここんとこかなーり欲求たまってるんわあ。……ってことで風俗レポーターの浜谷です。今日も飛び切りのフーズクをご紹介します。……さ、ここがああサービス満点で有名な、札幌はすすきの風俗店、『ペディグリー男爵』です。いやあ名前からして、いかがわしさ満点っすねえ〜早速中に入っちゃいましょう。え？ 中に入る？ 自分らアカンで早まつたら。さ、では行きましょう。え？ イク？ ホンマ自分ら呆れるわあ……俺より欲求不満かつ！」

浜谷さんのレポーターコント。しかも、あるうことが坂野先生の前で下ネタを始めたではないか。一人でまくし立てる浜谷さんの横で、坂野先生がああ顔で彼を凝視している。全く顔色も変えず、まるで鉄仮面のような。浜谷さん、ヤバイんじゃないだろうか。

「はいはい、何これ？ あ、カタログ？ なるほど、店の女の子の写真ね。ん？ この子新人？ ふーん、あつそ。……お、この『あきな』って子可愛いやん。うん、この子でええわ。早速呼んできて」

繰り広げられるフーズクレポート。教室内からクスクスと笑いが漏れる中、いきなり一人の女性が立ち上がった。僕らがきよとんとする中、彼女はツカツカと浜谷さんのそばへと歩み寄ると、深々と頭を下げる。久山あきなさんだ！

「いらっしやいませ。……ようこそペディグリー男爵へ」

この思わぬ時間差迷コンビ誕生にドツと笑いが起こる。久山さんは先週と同じく隠し持っていたハンドマイクを握り締め、僕らに向かって語り始めた。

「ワタクシ、生まれも育ちも札幌すすきの。さっぼる雪まつりで産湯をつかい、姓はペディグリー、名は男爵……。人呼んで車のエビちゃんと発します」

「はあっ？ ペディグリー男爵ちゃんかいっ！」

「いえ、私の名は『エビちゃん』と申します」

「え？ 何で？ 自分『あきな』って源氏名ちゃん？」

「それは本名で、源氏名が『エビちゃん』です」

「そんなん知るかい！ ややこしい店やなあ……」

浜谷さんのツツコミが、その後も切れ味よくガンガン久山さんにヒットする。マイペースで少々おとぼけた雰囲気を発する久山さんに、浜谷さんの攻撃的なツツコミが炸裂する。それは時間を追うごとに持ち味を発揮し、絶妙な組み合わせとなっていた。自然と教

室に笑いが包まれていく。

「なんか……悔しいな……」

僕は自分でも驚いた。ウケている彼らに対して少しばかり嫉妬したことに。

第三章（11） - ペディグリー男爵 2 -

その後も浜谷さんと久山さんのフーズクコントは続く。

「で、ここではどんなサービスが人気あんの？ もうさあ、俺こくるまでに欲求不満でタマランねんわあ。何でもええから早くしてーな」

「そうですね、まずはマッシュポテトなどがでしうか？」

「マッシュポテト？ 何やそれ」

「スグ作れます」

「あ、なるほど、通常のサービスとは別に、そういうおつまみ的なモンがあるわけやね。中々商売上手な店やなあ。で、他には？」

「はい、フライドポテト、じゃがバター、煮つ転がし、ご予約を入れていただければ特製店長のこだわり肉じゃがもご用意できます…」

「おいおい、なんやねんさつきから！ サービスってイモだらけやんけ。違うがな、そうやのうて、俺が言うてるサービスはやな、もつとこ男と女がもつれ乱れる格闘技みたいな……そういうサービスやんけっ！」

「お客様、失礼ですが当店の名前の意味をお分かりでしうか？」

「はあ？」

「当店の名、『ペディグリー男爵』とは血統高い高貴なる男爵のことです」

「それが？」

「つまり、血統高く新鮮な男爵イモを提供する店。要約しますと『じゃがいもの店』ということでございます」

「イツ！ イモツ？」

そして、風俗コントは、じゃがいもの話へと進み、二人は十分間芋にまつわる話でエロを絡めつつネタを終えたのだった。

最後にしっかりとオチを決めると、二人は僕らに向かってポーズを決めて締めくくった。

「ドS浜谷と！」

「ドM久山の！」

「SM探検隊でしたあゝ」

十分間、笑いを提供してくれた彼らに、生徒たちから大きな拍手が送られる。そんな中引き上げていく二人の表情も充実感をにじませる。すると坂野先生が立ち上がり生徒らに向かって言い放った。

「えー、下ネタは今後一切禁止します」

瞬間、教室が再び「クビ切り宣言」の後のように、ピンと張り詰めた雰囲気になった。坂野先生はその表情は特別怒りを露にする

わけではなく、いつもと同じ鉄仮面のように冷たい表情。ただ、それだけに余計その怒りが伝わってくるではないか。やはり、坂野先生は下ネタが許せなかったらしい。

浜谷さんもいきなりのダメ出しには堪えたようで、苦い表情を浮かべて席に着く。そりゃそうだ。あの先生が下ネタなんて認めるわけがないのに……。

「言うっておきますが、僕はね、下ネタをすべて否定はしません。ですが、テクニクを持ち合わせていない今のあなた方がやったところで、所詮下品以外の何物でもない。よろしいですね」

意外だった。坂野先生の下ネタ容認発言。もちろん、そんなテクニクがあることなど僕は当然知らないわけで。それを身につければ下ネタも上品な笑いへと変化させられると言っただろうか。

思えばこの時だった、本当の意味で「人を笑わせることとは何なのか」という疑問を持ったのは。

### 第三章（12） - 愛なるゲップの伝道師 -

「はい、では次」

張り詰めた緊張感の中で発せられた坂野先生の声。二番手に名乗りをあげたのは、先週と同じく木多勇さんだった。すると、彼とともに早沢雅之さんも前に出て行くではないか。どうやらこの二人もコンビを組んだようだ。

「僕は愛の戦士、木多勇」

「そしてオレはゲップの伝道師、早沢雅之。よろしくイエエー」

先週、ゲップで国家斉唱をやつてのけた早沢さん。そのインパクトあるゲップという週末のネタ振りには、教室の僕らの心を出足から掴むには申し分なかった。彼が登場しただけで自然と笑いが起こる。その反応を受け木多さんが先週同様落ち着いた口調で話し始めた。

「ゲップを伝道する彼に愛を感じた僕は、共に歩む道を模索した。すると早速彼の行動にひとつの愛を見つけたので、ここで皆さんにお聞かせしよう。彼はとある繁華街を歩いていた。すると前方から麗しき可憐な女性が歩いてくるではないか。一期一会かもしれない。彼の心に愛の炎が燃えたぎる」

「その道行くお姉さん。お暇ですか？」

「彼の心に燃え始めた炎は、転じて彼女の瞳に注がれる。それは火傷するほどのセクシービームだ」

「……マジで？ 丁度オレも歌いたかったんだよね。じゃあそのカラオケでフィーリングしようぜ」

「ついに飛び出した『フィーリング』の言葉。彼の全身にあるフィーリングアンテナが、彼女から発せられる何かを捉えたのだ」

「飲み物どうする？ じゃあオレはモスコミュールをロックでガンガンにストレートだぜ」

「自分でも気づかない自らの首を絞めるわけの分からない言葉。燃えたぎる炎は彼女だけでなく自分へも向けられていたのだ。これぞ彼の十八番、『フィーリングの夜明け』なのだ！」

「お姉さん歌上手い！ サイコーだぜ！ んじゃあオレも早速モスコを一気つぶっ飛ばすぜ」

「彼はモスコミュールを一気に飲み干し、おもむろにリモコンのボタンをオン！ するとどうだ。流れてきたその曲は、甘いメロディに乗ってやってきたアニソンではないか！ ついに時は来た！ 彼は立ち上がると万点の星空を模った低いカラオケボックスの天井を見上げ、ロマンよろしくふっと思を整える。そして全ての愛を全身全霊で受け止めた、彼女に伝えるその第一声は！」

「……ゲフツ」

「キタキタキタキタキター！ これぞゲツプのフィーリンラブファイアー！」

まさに、彼らにしか作り出せない空間がそこにあった。先ほどま

で坂野先生の厳しい忠告から、少しばかり沈んでいた教室の雰囲気。それが一転、彼らのネタから発せられた笑いによって大きく変わっていくのだった。

### 第三章（13） - 八十年代を愛してマース！ -

「アイツらホンマズルイわあ。あんな予定調和されたら誰でも笑ってしまつやんけ……」

浜谷さんが先週と同じようにブツブツとツツコミを入れる。そんな木多・早沢ワールドが十分間にわたって繰り広げられたのだった。

「ここまで彼の愛をお伝えしてきたわけだが、それでは最後に早沢くんに見せよう。君にとってフィーリングとは？」

「もちろん、自分の中でのカップル成立です」

「おやおや、奇想天外な一方通行。まだまだ修行が足りないようだ。われわれはまた愛を求め旅に出るとしよう。ではここで」

「さらばじゃ。オウイエー」

二人がネタを終える頃、教室に居心地の悪かった雰囲気は消えていた。坂野先生からも特に彼らに対する注文は無いようだ。笑いによつて、殺伐とした雰囲気も解消される。笑いの力は凄いものだと感心した僕だった。

拍手の中彼らが引き上げていく。この雰囲気ならネタもしやすいのではないか。僕は後方に座る佐伯さんに目を送る。どうやら佐伯さんもチャンスだと感じているようだ。佐伯さんは軽く頷いて『次に行こう』と目配せした。

「では、次」

僕が手を挙げようと思った瞬間、威勢良く『ハイ！』という声がこたました。韓国人のパクさんだ！

彼は坂野先生から指名されてもいないのに、すでに皆の前へと歩を進めていた。見れば全身を黒のコートで覆っているではないか。どうやら今週は休憩中に着替えも済ませ、準備万端といった感じだ。

「どうも！ パクリンです。先週も言いましたが、ボクは日本の八十年代を……愛してマース！」

パクリンさんがコートを脱ぎ捨てると、先週同様派手な衣装が露になる。すると浜谷さんが「ええぞ！ パクリン！」とはやし立てた。そんな浜谷さんを見て、調子に乗ったのかパクリンさんは、まるで来日した韓国スターを思わせるかのように、にこやかな笑顔で手を振り返す。

「勘違いすんなポケツ！」

浜谷さんの痛烈なツッコミもあって、さらに教室も温まるのだった。パクリンさんは早速持ち込んだテープレコーダーのスイッチを入れた。そこから流れてきた曲は八十年代にヒットしたアイドルの歌だ。

「ヘイヘイヘイ」

教室に設けられた架空の舞台を、慣れないローラースケートを駆使し、歌い踊るパクリンさん。それはまさにアイドルコンサートさながらだ。しかし、十分間はあまりにも長すぎた。その後も大きな展開も無く、歌い踊り続けるパクリンさんに、次第に尻すぼみになつていく笑いの数。

「ミナサン、今日は本当にアリガトウゴザイマース！」

ネタを終えて生徒たちに手を振るパクリンさん。パラパラと拍手が起こる中、パクリンさんが脱ぎ捨てたコートを拾い上げようとしたその時だ、足元を滑らせ豪快に転倒してしまったではないか。すると下火だった教室にようやくドツと笑いが起こる。

「……笑わせ方も八十年代やな」

浜谷さんが頭を抱えてボソツとツツコミを入れたのだった。

パクリンさんのステージは、『愛の伝道師コンビ』で盛り上がりつつあった雰囲気から一転、教室に落ち着きを取り戻してしまふ。流石に十分間も偽者八十年代アイドルのステージを見せられ続けるのは酷な話だった。パクリンさんは少々バツが悪そうにコートを抱えて後ろの席へと引っ込んでしまふ。

この状況でネタをするのは少しばかり気が引ける。かといって残っているのはあの『なんちゃってJKコンビ』と僕らだけだ。僕は後方の佐伯さんに再び目配せをする。しかし、佐伯さんも流石にこのタイミングには迷っている様子。確かにこの雰囲気も辛いけど、最後に出るといふのもそれはそれでハードルが高くなって辛い。

「ジミー、次行けよ。まさかお前に『トリ』が務まるとは思えんからなあ」

嫌味っぽく浜谷さんが笑った。最後に僕が出て行くのは役不足だと言いたいのだろう。「ははは」と、愛想笑いをした僕だが、それと同時に反骨心がわいてくる。浜谷さんが悔しくなるくらいのネタを最後に見せてやるうじゃないかと。もちろん、それほどのネタかどうかは僕自身にもわからないけど。

「次お願いします!」

あれこれ考えている間に手を挙げたのは『なんちゃってJKコンビ』だった。必然的に僕らは最後の出番となる。浜谷さんが呆れた顔をして「あーあ」と僕に声をかけた。そんなこと言われても……。

「野田沙里です」

「川井実加です！」

「なんちゃってJKです」

いつものように軽いノリでネタを始める彼女たち。だが、朝早くから熱心に練習していた彼女たちを知っているだけに、僕は少しばかり好感を持っていたのだった。

「なんちゃって動物園シリーズ！ 改革派のパンダ」

そのタイトルで、彼女らが何をしようというのか、先週の流れで何となく分かってしまった。そしてそれは期待通りだった。野田さんがノソノソと笹の葉を食べる横で、川井さんが笹の葉を猛然と食べまくり、右往左往と動きまわるパンダを披露するではないか。その光景を微笑ましく見る僕たち。まさにそこは『なんちゃって動物園』だった。

「このネタの為に必死にネタ合わせしとんのかこいつら……」

浜谷さんがまたしてもツッコミを入れる。僕はそのツッコミに思わず噴出した。確かにそのネタは台詞も殆ど無く、朝も早くからやってきて、入念なネタ合わせをするほどのものではない。でも、そんな彼女らのキャラクターを知ってしまうと、余計に面白さがこみ上げてきてしまう。生真面目な川井さんがボケ役というのも、微妙なエッセンスとなっていた。

「やっぱり、キャラクターって大事なのかなあ……」

僕はふとそんな風感じていた。ところが浜谷さんはそんな僕の

心を見透かすように言った。

「ま、でもこれではアカンな。あの子ら知らん奴にとってはワケわからん。キャラクターなんてモンに頼っとつたらアカンねん」

特に目を向けることなく、でも、僕に聞えるくらいの小さな声で。それは多分、僕に対して言った言葉なんだと察したのだった。

第三章(15) -そこはなんちゃって動物園-

浜谷さんのそんなダメ出しも他所に、彼女たちはそんな動物園シ  
ョートコントを連発していく。

「なんちゃって動物園シリーズ！ フラミンゴの憂鬱！」

「ってかさあ、最近ウチらちょっと扱い酷くない？」

「だよなー、ウチらって動物園の入り口付近に居るからさあ、みん  
な横目で見るだけで殆ど素通りするもんねー」

「どうせ入り口付近にするならさあ、いつそ入場ゲートの前で放し  
飼いにしたいよね」

「その方が客も喜ぶよね」

「ついでに『フラミンゴと鬼ごっこ』みたいなゲームもやっちゃっ  
てさあ」

「それはどうかな」

「それはそうと聞いてよ！ こないだなんかさあ、久しぶりに私の  
前で客が立ち止まったと思ったら、これがまたとんだバカップル  
でさあ！」

「へえ、ナニナニ？ どんな客？」

「男の方はさあ、見るからにだらしない格好でさあ、アレきつと」

これがイケてる着こなしだぜ』って勘違いしてるね。ウチから言わせれば『これがイケてる見殺しだぜ』ってとこだね」

「フーン、で、ナニがあつたのよ？」

「女の方なんてさ、『あばたもエクボ』って感じの子なんだけどさく。でも、アレきつとネットでも『アバターもエクボかよっ』ってツッコミ入れられてるだろうね」

「いや、そんなことどうでもいいからさ。ナニがあつたのよー！」

「ま、そんな『イケてるエクボ』なカップルの前で、最初はウチも張り切ってあげたんだよ？ 近寄ったりウイंकしたりしてやったりさ、ケツコー頑張っただけどお、帰り際に『アバター女』、なんて言ったと思う？」

「何？」

「『ここクサーい。早く次行こっ』なーんて言うんだよね。あー思い出しただけで超ム力つくー！」

「それは無いよね。嫌なら来るなっつーの」

「そうそう、クセエならエイトフォーでも撒き散らして行けっつーの」

「は？」

「なんでもない。でもさ、『アバター女』の言うことも一理あるんだよね。臭くなるのも仕方ないっつーか」

「どづいづいと?」

「だってウチらこんな狭い場所に何羽もウジャウジャ集められてんだよ? ふざけんなってんの!」

「そう! 言えてる! 正直、人口密度高すぎだっつーの」

「もつとさあ、フラミンゴの個性を引き出す努力をしてほしいと思わない? 園長にはさあ! ったく若手の伸ばし方が分かってないんだよねーあの園長!」

「だよねー」

「こんなことならいつそ脱走しちゃってさあ、メジャーな旭山動物園に行っちゃおっか?」

「いいねそれ! …… あつ、客だよ!」

すると二人はそれまでのダラけた素振りから一転、ピンと背筋を伸ばし、僕らに向かって満面の笑みを浮かべると、その脚をすっと持ち上げ、フラミンゴよろしく片足立ちをしたではないか! フラミンゴの憂鬱。実際の所はフラミンゴもそう感じているのかもしれない。

緩急をつけた彼女らのネタは、僕らがまさに動物園で動物を見ていくように繰り広げられ、その緩急をつけたネタは間延びせずに分間繰り広げられていくのだった。

僕はそのネタに笑いながらも、やがて来る自分の出番を前に次第に胸の鼓動が高鳴っていく。そして、その時間はやってくる。

「はい、お疲れ様。では次は……」

「あ、はい!!」

僕と佐伯さんが椅子から立ち上がる。佐伯さんとコンビを組んでの初の漫才がいよいよ始まるうとしていた。

第三章(16) - 屈辱のネタ見せ -

「奥村です……」

「佐伯です」

「あ、そういえば佐伯さん、最近寒いですよねー」

「うん、寒いよね」

「ほら、夜中とか足元冷えませんか？」

「ああ、そうだね。ウチは床がフローリングだからさ、なおさら冷えるんだよね」

「そりゃ丁度良かったです。そんな時はハイ、富士山マークのレッグウォーマー」

「いらねーよ！ 君は通販ショップの回し者か！」

無我夢中だった。とにかく覚えたネタを必死で喋るだけの僕だった。それで精一杯だった。そんな中で聞こえてきた笑い声。どうやら『なんちゃってJK』の二人にはウケているようだ。それは奇抜なテレビCMから巷で話題になっている『レッグウォーマー』のくだりだった。やっぱり分かりやすい方がウケるんだ。僕の選択は間違っではないなかった。

その後も所々詰まる部分もあった僕と佐伯さんだったけど、何とか台詞を間違えることなく掛け合いを続けていく。出だしは良さそうに思えた……でも、そこからは地獄のような十分間だった。

「こんなに寒いときは、やっぱり日本酒ですよー。アツカンでクイツと！」

「おいおい、君は中学生だろ」

「中学生が飲んで何がいけないんですか！」

「逆切れかよ！ 大体、『クイツと』なんて表現するなよ。オヤジ臭い」

「そいつは失敬！」

「それがオヤジだつて！」

ネタを続ける間、皆の反応の薄さに気づいてはいた。自分では「ここで笑ってもらえる」と思っていたオチが、ことごとく受け流されていく。

唯一、僕らのネタがウケていると思えた、あの『なんちゃって』K』の笑い声も、時間と共に聞こえてこなくなる。だからと言って、素人の僕らが軌道修正なんて出来るはずも無く……。僕らはとにかく、予め決めていた覚えたてのネタを喋り続けた。

それからどれくらい経っただろう。最後のオチとツツコミを言い切ると、針のむしろに晒された時間がようやく幕を引いたのだった。

「ありがとうございました」

ペコリとこうべを垂れた僕らに、パラパラと同情のような拍手が聞こえてくる。僕が苦笑いを浮かべ席に戻ろうとすると、浜谷さん

の顔が目に入る。予想通り白い目を僕に浴びせ拍手すらしようとしない。

「くそっ……」

悔しさが頂点に達した。自分の不甲斐なさに僕は力いっぱい拳を握り締める。

「もっとウケると思っていたのに……」

やり場の無い想いを胸に秘め、うなだれて席につくのだった。

第三章（17） - 浜谷のダメ出し -

「まあ、こんなもんでしょうかね」

坂野先生はそう呟きながら皆の前に立つと、いつものように冷たく言い放つ。

「では、来週の課題を伝えます。そうですね、モノマネの話が出ましたからこうしましょう。来週は今まで誰もやったことの無い。また、誰も見たことの無いモノマネをやってもらいましょう」

ざわつく生徒たちに目もくれず、坂野先生は「では、ここまで」と言つと教室を出て行くのだった。

「なんやねん。『誰も見たことないモノマネ』で。そんなもん誰が見てもわからんやんけ……」

浜谷さんがブツブツと僕に向かって文句を言う。僕に言われても困る話だ。

「そんなことよりジミー、お前さっきのネタ。アレはお前が考えたんやろ？」

「はい？　そうですけど……」

「頭の部分、先週見たネタ帳のままやんけ。俺ちゃんと言つたやろ？　二行目でアウトやって」

すると浜谷さんはネタ帳をよこせとばかりに手のひらを突き出す。

僕が渋々手渡すと、ノートの表紙を見た途端、またしても呆れた顔をして僕に苦言を呈す。

「お前なあ、なんやねんコレ……。『私のレ・シ・ピ』て」

「え？ そんなあ……。そうしろって先週浜谷さんが言ったんじゃないですか！」

「はあ？ アホかお前は！ 誰がそのまま書け言ってる。しかもご丁寧にハートマークまで書きやがって……。情けなくて涙も出てこんわ！」

すると浜谷さんはネタ帳を広げて僕の目の前に突き出した。

「一行目『寒いですね』、二行目『寒いよね』。こんなアホみたいな会話いらんのじゃ！」

「えー？ だって実際寒いじゃないですか。おとといなんか今年一番の冷え込みだって……」

「アホか！ 『寒い』って思ってるのはお前ら二人だけの話やんけ。中には暖かいと感じてるもんもおるかも知れんやろが！ あんな、漫才は冒頭から客を惹きつけて感情移入させんとアカンねん。こんなしょうもない無駄話をいきなり舞台でやられて『おお、そうだよな！ 寒い！ 寒いよ！ それで？ ウハッ！ やっぱ寒いッス！』なーんて思う客がおると思うんか！」

「う……。そうかもしれないんですけど、でもそれはその後の『レッグウオーマー』に繋がっているんです。その為に寒いって話題が必要で……。あ、ひょっとして浜谷さん知らないんですか？ 今CMで話

題のテレビショッピングのこと」

「知つとるわボケ！ 知ってるから禁じ手なんや！ よう考える。その商品やCMを知らん奴が聞いてそのネタの何がおもしろいんじや！ その時点でお前らは漫才を聞こうとする客を逃がしてんねん！ まだ分からんか！」

そう言われて、確かに浜谷さんの言うとおりだと感じた。もしそのCMが流れなくなれば、僕らのネタは「何それ？」という話になつてしまう。今は通用しても、先には通用しないんだ……。どんなに伝えたくても、分かりやすくなくては伝わらない。それは漫才でも、人とのコミュニケーションでも同じだろう。でも、分かりやすければ良いということの本質を、僕はどこかで履き違えていたのかもしれない。

第三章（18） - 久山あきなの本性 -

「まあ、ガキのお前がオヤジくさいキャラで進めるって設定はええけどな。それなら初めからそういうキャラを押し通せや。それでも十分おもしろいねん。へんな小細工するから聞いてるこつちが見失うんや。それになあ、なんかお前ら真面目過ぎんねん。もっと肩の力抜け！ せつかくおもしろいこと言うてもな、『台本読んでます』って感じてしらせるんや」

「はあ……」

「それと、これが一番アカン。漫才の最中にヘラヘラ薄ら笑み浮かべるな！」

「わ……わかりました」

矢継ぎ早に繰り出される浜谷さんのダメ出し。その言葉には説得力があった。でも、その時の僕にはそれを受け入れようとする器量なんてなかった。それ以前に「どうしてお前なんかそこまで言われなきゃいけないんだ」という気持ちが強かったのだ。僕は言われっぱなしでは立つ瀬がないと、浜谷さんのネタに対する疑問を突きつけた。

「……でも、浜谷さんだって……下ネタやったじゃないですか」

「はあ？ 何がやねん」

「僕らの漫才以前に、浜谷さんのネタこそお客さんに不快感を与えませんか？」

すると、浜谷さんは頭を掻きながら呆れ口調で言った。

「やっぱりお前分かってへんなあ。アレは俺やのうて、『エビちゃん』のネタや」

「え？ エビちゃん？」

「久山さんや。あの姉ちゃん、一見清楚でお嬢さんっぽく見えるやろ？ とんでもない。アレは世を忍ぶ飯の姿。ああ見えて中身はドSや」

「いつ？」

その後、浜谷さんはケラケラ笑いながら、あれやこれやと久山さんのドSな振る舞いを暴露する。そもそも『エビちゃん』というニックネームも、彼女が「そう呼びなさい」と命じたと言っではないか。

「それもやな、『エビちゃん』って聞いたら、どこのモデルかアイドルのニックネームを拝借してると思うやろ？ 何を勘違いしてるんやコイツはって思うやんけ？ そこで聞いたんや『何でエビちゃんやねん』ってな。そしたら……」

「そしたら？」

「エビフライが好きやかららしいわ」

「は？ エビ……フライ？ ですか？」

「それ聞いたとき、流石の俺もやられたって思ったわ。エビフライ好きやからって『エビちゃん』はないやろって。そんなもん今時小学生でも考え付かんあだ名やぞ」

その時だった、彼の背後に忍び寄り、恐るべきエビフライの怨霊の右手が、天空高く振りかぶるのを僕が見たのは。

「まあ、そういうワケや。ジミーも気をつけるよ。二十五歳の年増女のしたたかさにはな！」

バシッ

見事なフルスイングが浜谷さんの脳天を直撃した。

「誰が年増女だって……？ んー浜谷クーン？」

「す……すんません……」

泣きそうな浜谷さんを見て、「アンタこそめちゃくちやドMじゃないか！」と、僕は心で叫ぶのだった。

「つまらない話してないで、二人ともこっちに来て！」

年増女……もとい、エビちゃんこと久山さんに言われるまま席を立つ。見ると生徒たちは誰一人帰っておらず、何やら輪を作って話し込んでいるじゃないか。それも皆真剣な顔をして。

「おつ、なんやねん。皆で飲み会の話でもやってんのか？」

「そんな話じゃないっつーの。みんな、奥村くとアホ一人連れてきたよ」

「ア、アホて……」

どうやら浜谷さんは相当久山さんに頭が上がらないらしい。かなりキツイ言い方されても妙に嬉しそうだ。やっぱりこの人、隠れDMじゃないかつ！ と、そんなアホな妄想をする僕に向かって佐伯さんが話しかけてきた。

「実はね、皆で来週の課題についてちょっと話していたんだ」

佐伯さんの話によれば、あの坂野先生の『無茶振り』を、いつまでも大人しく聞いていられないというものだった。来週クラス全員で反撃よろしく、先生に一泡吹かせてやろうというのだ。

「先生の言う『誰も見たことの無いモノマネ』ってことはさ、『誰も見たことの無いモノマネのモノマネ』は問題ないんじゃないかって結論なんだ」

僕にはその意味が今ひとつ理解できなかった。すると浜谷さんが割って入ってくる。

「ああ、なるほどな。誰かがネタをやって、そのネタをモノマネすれば、それは誰も見たことの無いモノマネになるってことか」

何だか余計に頭の中が混乱した。そして、そんなこと以前に、坂野先生が問題視した一点が気にかかる。僕は思い切ってそれを問いかけた。

「あのお……何より『モノマネのモノマネ』はやっぱりマズインじゃ」

「そこだよ。先生はモノマネでも自分なりのアレンジは認めたくないか。先週の久山さんだって、基本的には映画の名台詞のパロディだったわけだし。それが許されるならあとは自分なりに手前で披露されたモノマネをアレンジすればいいのさ」

佐伯さんの話で何となく理解できた気がした。でも、そんな簡単に言うけど、本当に上手くいくのだろうか？　そして何よりも一番肝心な部分を忘れていている気がしてならない。すると、パクリンさんがここぞとばかりに口を開く。

「では、一番手にボクが八十年代のアイドルのモノマネをやりマース！」

「アホか！　もうお前のネタは皆見たから知ってるやんけ。『誰も見たことないモノマネ』って言うてるやろ」

「おっと！ そーでしたでゴザイマース」

そうなのだ。何より一番の問題は、誰がトップバッターで『誰も見たことの無いモノマネ』を披露するのか。後から出る者はアレンジすればお咎め無いかもれないが、一番手のネタ次第では、その時点でクビを宣告されるようなものだ。

「そや、ジミー。お前ええネタあるやんけ！ アレやれや！」

「え？」

「……ニワトリや」

想像もしなかった浜谷さんの強引な決め打ち。すると、他の生徒も皆興味深そうに「ニワトリ？ どんなモノマネ？」と相次いで尋ねてくる。もうこの時点で、僕がトップバッターに選出される土壌は整っていたのだった。

### 第三章(20) - 街路灯 -

僕たちはネタの順番やその内容を打ち合わせた。結局、僕のモノマネは「誰も見ない方が新鮮で面白い」という話でまつまり、その場でやらされるといふ目には遭わなかった。でも、僕にとってはなおさら不安で一杯だ。

満場一致でトップバッターのネタに指名されたニワトリのモノマネ。とは言うものの、本当に誰もやったことないのだろうか？ 僕らが知らないだけで、有名な声帯模写の先人がやっていたとすれば、そんなモノマネなどあの坂野先生が認めるわけがない。そして、仮に一番手の僕が失敗すれば、後続のクラス全員が辞めさせられることになるかもしれないのに……。

「ま、こんなこと決めても、来週にはジミーもここに居らんかもしれんけどなあ」

薄ら笑み浮かべ何気なく悪い冗談を口にする浜谷さん。でも、その一言にみんなが思い出したように凍りつく。確かにそうだ。今日のネタを見た坂野先生の評価次第では、僕や佐伯さんはもちろん、ここに居る誰かが辞めていても不思議ではないわけで……。

「やめなよ浜谷くん、水を差すようなこと言うのは」

佐伯さんがたしなめると、浜谷さんも流石にばつが悪そうにする。それにしてもなんだこの態度の変わりよう。僕に対してと全然違うじゃないかあ……。この隠れDM！

「はいはい、WAのみんな。そろそろ教室閉めますよ」

その声は事務局の人だった。とつくにレッスンは終わっているというのに、教室から出ようとしないうちに僕らに少々立腹のようだ。

「はい、すいませーん。スグ帰りまーす」

打ち合わせに納得がいったのか、浜谷さんのそんな声と共に、浮かれた様子でWAの生徒がゾロゾロと引き上げていく。僕もその後を足取り重くついていくのだった。

「心配しなくていいって。君だけに責任は押し付けられないから。もし君が辞めさせられることになっても、俺たちが絶対に阻止するから」

佐伯さんだけは僕の心境を理解してくれていた。心強い言葉に少しばかり安堵する僕。

ビルを出ると二月初めの冷たい空気が体に突き刺さる。皆口々に「寒い、寒い」と体を揺らす。と、不意に僕の腕を引っ張る佐伯さん。

「奥村くん、彼女？」

「え？ …… あっ」

ビルの玄関の片隅で、寒空の中立っていたのは中條だった。ポンと背中を押されてよろける僕。

「じゃあ奥村くん、また来週」

佐伯さんは気を使ってくれたのか、僕を置いて皆の後を追いかけていく。僕は少しばかり照れくさそうに中條に駆け寄った。僕の姿

を見て彼女はニツコリと微笑む。

「お、お疲れ……」

「お疲れ様でした！ もう終わった？」

「うん、中條は？」

「こつちも！ さっき終わったんだ」

ネタ見せ後に長時間話し込んでいた僕たち。いくら何でもAクラ  
スはとづくに終わっていたはず。彼女の言葉。それは僕にとってこ  
れ以上無い嬉しい嘘だった。

「じゃあ、帰ろうか」

「そうだね」

駅までの彼女と話すこの数分の道のり。僕にとってこのひと時が、  
迷い込んでしまった笑いの道に灯された、唯一安らげる街路灯だっ  
た。

### 第三章（21）・バレンタインデーの朝

二月十四日バレンタインデー。『それ』を貰えないと分かっている。でも、男子諸君の多くが密かにわくわくして登校する日。だのに今日は学校の無い日曜日。しかも、朝から雪が降る寒い日だった。

空気中の重い荷物を背負い込み、僕は電車に揺られている。郊外の自宅から乗換えを経て都心の駅。その近くに『フェイス・アクト』のビルがある。時間にして四十分ほどだろうか。ただ、その日はやけに時間が早く感じた。

最寄り駅に着くと、僕を呼び止める元気な声がする。中條瑞恵だ。

「オハヨー！ 奥村くん」

「あ……おはよう」

「そうだ！ 今日ってさ……」

「えっ……」

ついにキター。きつとあの『愛の戦士』を謳う木多さんなら、その言葉を連呼していることだろう。でも、その期待は見事に裏切られ……。

「確かさ……ネタの発表だったんだよね？ 頑張ってたね」

「あー、う……ん」

中條は「私もWAに移ろうかなあ」と冗談交じりにおどける。その理由は僕のネタを見たいからだそう。いやいや、正直嬉しいけれど……。

ど、やっぱり嬉しくない。どちらかといえば恥ずかしい。お笑いを演じている姿を見られるより、しっかりとした芝居を演じる姿を見てもらいたい。特に、これから披露するであろう『ニワトリ』なんて見せられたものじゃない。

「……………じゃあ、またね！」

ビルの三階に着くと中條は笑顔でAクラスの教室に駆けていく。

「ふっ……………期待した俺が馬鹿だった……………」

結局、彼女から甘い贈り物は戴けなかった。……………義理でもいい。最低でも中條からはチョコを貰えると思っていたのに……………。それはどうやら僕の呆れる大きな勘違いだった。

「ははっ、ですよー！。どうせ俺なんかにねーっ！」

思い上がりの恥ずかしさからくるモヤモヤを振り払うように、声に出してブツブツと呟く僕だった。はたから見ればそれはとても滑稽な姿だろう。

教室に入ると先週と同じように『なんちゃってJK』の二人がネタ合わせに没頭していた。

「あ、奥村くん。ハイ」

何と、僕の姿を見かけるや、二人してチョコを手渡してくれたではないか。もちろん、コンビニで売っている二十円のチョコレートだけ……………。

「……………どうもありがとう」

「ゴメンねーそんなので。あ、トップバッター、頼むよ！」

そう言っつて野田さんが僕を励ましてくれた。

この二つのチヨコレート。これは紛れも無くクラスメイトのよしみで貰えた義理チヨコなんだろう。でも、それと同時にトップバッターを務める僕へ、労いを意味するチヨコレートなのかもしれない。それにしては……ちょっと安くないっすか……？

そうしているうちに他の生徒もやって来た。皆口々に僕に向かって励ましの声をかけてくれる。その時、ようやく僕は気がついた。みんな本当は心の底で、重責を押し付けた僕に対して申し訳ないと思っているんだと。

「なら、頑張らなきゃ……」

皆の分も、トップの僕がミスするわけにはいかない。せつかくW Aのクラスメイトが一つになるうとしていたのだから……。もつとも、この日も案の定浜谷さんは、発表のその時間まで現れることはなかったけど。

### 第三章(22)・ニワトリ参上1・

坂野先生を待ち受ける生徒たち。先週と変わらない顔ぶれを見る限り、二週続けての脱落者は居ないようだ。

先週、僕たちが演じた十分間というネタに対する、それなりの評価を坂野先生はしたということなのか。それとも、これは嵐の前の静けさか……。もしも、その嵐のきっかけが僕の『ニワトリ』だとしたら……。

ガチャツというドアの開く音と共に、教室がにわかに緊張を帯びる。現れた坂野先生の表情は変わりなく、いつものように鋭つい鉄仮面がそこにあった。

「おはようございます!」

坂野先生の登場に張りのある声を揃え挨拶をする生徒たち。「おはよう」と、いつものように低い声で返答する坂野先生に、僕の心臓が一層高鳴るのだった。

気を紛らわそうと、皆の顔に目を配る僕。どうやら緊張しているのは僕だけではないようだ。彼らの目には、いつもと違った坂野先生に向ける視線があった。それもそのはず、これから目の前に立つ坂野先生に、僕たちはクラス全員で宣戦布告するのだから……。先生という大きな壁への挑戦を前に、おのずと緊張せずにはいられなかったのだ。

「今日は先週言った通り、誰も見たことの無いモノマネをやってもらいます。よろしいね」

「ハイッ! ハイッ! やったるでー!」

緊張する生徒たち……。と言っても、僕の横に今日も陣取る彼だけは、いつもと変わらず張り切っていた。どうやら浜谷さんは緊張という言葉とは無縁のようだ。それともこれは、空元気か？

ネタ見せの前に、あいも変わらず遅刻してきた浜谷さんに、坂野先生が問い詰める。浜谷さんはいつものように飄々とそれに答えた。

「いや、それが急に祖父が倒れまして……。心配で心配で……。うつつ……。」

誰が聞いても嘘と分かる作り話を始めたではないか。遅刻の理由で親類に手を出し始めたということは、ついに浜谷さんも言い訳が尽きたのか。

「はい？ 倒れた理由つすか？ いや、テレビの漫才を見て笑い転げたみたいなんすわ……。もう心配で心配で……。」

呆れたものだ。おそらくこの調子で行けば、そのうち何十人と遅刻を理由にあの世へ逝かされるのだろう。そんな一問答も今日はこれから始まる戦いへの前座みたいなもの、僕らにとってこのネタ見せが、遅刻以前の問題なのだから。

「では、まずは誰からやってみてもらおうかな」

先生の言葉が放たれたその時。違和感を体中に受ける僕。見るまでも無い。それはWAの生徒全員の視線なのだ。僕はゆっくりと手を挙げて立ち上がる。

「はい」

すると、坂野先生の顔色が少し変化した気がした。先生にとっては予想外の立候補者だったのか。

「……ではよろしく」

いつものように窓際の椅子に腰をかける先生。入れ替わるように僕は皆の前に立った。

「よろしくお願ひします……」

軽く頭を下げたあと、チラリと皆の様子を見てみた。どうやら僕のやる『ニワトリ』が、どんなモノマネなのか興味津々のようだ。

「もう、やるしかない！」

自分を奮い立たせた瞬間、真っ白な空間の中で僕は泳いでいた。ふと、気づいたとき、うずくまり体を丸め、天高く届くような鳴き声を放つ僕がそこにいた。

「コケーッ！ コッコッコ！」

首を幾度となく前に突き出し、しゃがんだ姿勢のままその場をジタバタとろつづく僕。するとクスクスと笑い声が聞こえてきた。人間の前で動物を演じる僕の姿。これではまるで『なんちゃってJKコンビ』の動物園ネタみたいだ。僕は彼女の気持ちが何となく分かった気がした。

「あつ」

声にならない絶叫が僕の心に響いた。そうだ、彼女らのようにネタの前に今から何をやるのか、タイトルを言うのを忘れていたのだ。皆が僕がニワトリのモノマネをやるのと知っているが、肝心の坂野先生は知らないわけで……。このままではマズイ。かといって、ここで「ニワトリのモノマネです」などと改めて言うのはますます中途半端だ。

すると、再び真っ白な光に包まれた中、僕は無我夢中で声を出していた。

「おっ！ タマゴが産まれるー！」

あろうことがニワトリが喋った。いや、喋ってしまった。喋ってそれを知らせるしかなかった。左前方から「喋りよった！」とツツコミを入れる浜谷さんの声が出た。もうこうなればヤケだ。

「よしっ！ 頑張れ！ もうすぐ産まれる！ ウン！ ウン！ コケーッ！」

はつきり言って、その場で何を喋ったのかは明確には覚えていな

い。とにかく僕はその後もニワトリの気持ちを代弁し続けた。あの日、飼育小屋の前で見た光景を思い出しながら……。そんな産卵との格闘の末、僕はその産まれたてのタマゴを持つ振りをして、大切そうに手のひらに乗せたまま立ち上がる。

「よし、今日の給食はコレで玉子焼きだ！」

皆が笑っている。何が何だか分からないけど、皆は笑ってくれている。すかさず浜谷さんのツツコミが入った。

「自虐的なニワトリやなあ……」

僕はタマゴを抱えたまま「ありがとうございます」と一礼する。すると皆から大きな拍手が沸き起こる。

「終わった……」

この一週間背負っていた大きな重荷からすつと解放され、僕は足取り軽く席へと戻ろうと歩き始めた。

「はい、奥村くんちよつと」

僕を呼び止めたそれは坂野先生だった。

「今のモノマネは……何？」

急転直下。僕はまたも背筋が凍りついた。やっぱり、先生には伝わっていなかったのだろうか。誤魔化しても仕方がない。僕は素直に返答する。

「ニワトリです……」

「いや、そんなことはわかってる。そうではなく、それは本当に誰も見たことの無いモノマネですか？」

「えっ……」

顔色一つ変えずに尋ねてくる坂野先生に、僕は言葉を詰まらせてしまうのだった。

第三章(24) - 坂野 VS WAクラス 1 -

「センサー、分かってないなあ、これは『自虐的なニワトリ』のモ  
ノマネですよん」

この窮地に助け舟を出してくれたのは、誰でもない浜谷さんだっ  
た。だが、坂野先生は「奥村さんに訊いている」と一蹴し、再び僕  
に向かって静かに話しかけてきた。

「単に『ニワトリの真似だ』と言うのなら、きっと誰かやったこと  
があると思うんだけどな……。どうかな？」

いきなりそんなことを言われても困ってしまう。それに、僕が率  
先してやりたいと思ったネタじゃない。

椅子に座ることもできず、暫くその場で立ちすくむ僕。すると、  
浜谷さんがボソッと呟いた。

「お前、そのニワトリどこで見てん」

「え？」

「それを言えや！」

「あ……」

怪訝な顔で僕を伺う坂野先生に、僕はそれを打ち明けたのだ。

「し、小学校の飼育小屋で飼っていた、ニワトリのピースケのモノ  
マネです」

「ピースケ？」

この事実には他の生徒からまたも笑いが起こる。すると、坂野先生の口元が少し和らいだではないか。「なるほど、そうですね」と、坂野先生はポツリと漏らし、それ以上僕に何かを問いかけようとはしなかった。

「あ、センサー！ ハイハイ！ 次、俺らが行きます」

浜谷さんが席を立ち上がると、ポンツと僕の肩を叩いてくる。

「切り込み隊長、お疲れさん」

威勢良く浜谷さんが飛び出していく。すると『エビちゃん』こと久山さんもその後を追うように前に出て行く。そして彼らは坂野先生に挑む第一声を宣言した。

「ジミー奥村に乗っちゃって、誰も見たことの無いニワトリのモノマネのモノマネやりまーす！」

浜谷さんのその言葉に、いつも以上の大きな拍手で浜谷さんと久山さんを送り出すWAの面々。坂野先生に挑むネタに対し、少しばかり不安を感じていた生徒たちだったが、浜谷さんの号令は全員が目指す方向が定まった瞬間だった。そして、どうやら僕はその切り込み隊長の役目を果たせたらしい。

「いけっ！ 浜谷さん！」

僕は心の中でそんなエールを送り、力強く拍手をするのだった。

笑道 - わらいのみち -

そして、坂野先生に挑戦する彼らのネタが始まった。

「コケーツ！」

「コケーツ！」

「それはそうと、アンタ、あたし卵産むわ！」

「はあ？ んなもん勝手に産んだらええやんけ」

「勝手にい？ アンタ、卵を産むことがどんなに大変か分かってるの？」

「知らんがなそんなん！ どないしたらええねん」

「朝も早くからコケコケ鳴いてばかりいないで、傍にいるならちよつとくらい応援してよ」

「わかった、えーっと、ラマーズ法って奴やな。任せとけ！ えーっと、確か……ヒーツ、フーツ、ミーツ、ヨーツ」

「数えてどうするのよ！ バカ！」

「す、すみません」

そして彼らはタマゴを産む、産まないで何やら喧嘩を始めたではないか。夫婦ニワトリコントだ。タマゴを産むという僕のニワトリを、彼らは即興でアレンジして見せたのだ。

WAの生徒が笑いに包まれる中、二人のコントを呆気に取られた

顔で見ている坂野先生。そして、彼らのネタを皮切りに、僕の演じたニワトリは順を追ってアレンジされていき、巨大な壁となった坂野先生の前で次々と披露される。

木多・早沢さんの『愛の伝道師コンビ』は、浜谷・久山さんコンビの演じた愛のあるニワトリの場面を、木多さんが説明し、早沢さんが卵を産まずにゲップする。

野田・川井さんの『なんちゃってJKコンビ』は愛のあるニワトリに扮して、飼育小屋の狭さと臭さに対する不満を口々にぶちまけた。

パクリンさんはローラースケートを履いたニワトリが、「こんな小屋を出たいでゴザイマス！」と不満を口にしながら何度も滑ってはその場で転がる。

そして最後に佐伯さんは、パクリンさんのローラースケートを模写するかのようになり、意外な特技のムーンウォークを繰り返しつつ、「ニワトリだけに、二羽のニワトリでトリを努めました」と、お得意のダジャレオチ漫談で締めくくったのだ。

「ありがとうございました」

佐伯さんのネタが終わると同時に、再び大きな拍手が送られる。

そして、生徒らの視線は即座に坂野先生に向けられた。僕らの挑戦を受け、坂野先生の出す反応に一斉に注目が集まったのだ。

「ふ……」

坂野先生の苦笑い。今まで一度も頬を吊り上げたことの無かった、あの鉄仮面が綻んだ瞬間だ。

「やった！」

僕は心で小躍りする。確かにその先生の表情は、言葉で言えば『苦笑い』かもしれない。それでも『笑い』に違いは無いのだ。この時、「僕たちの勝利だ」と感じたのは、きっと僕だけではなかったはずだ。

第三章(26) - 討入り後 -

坂野先生が教室から立ち去った後、僕たちは互いに『してやった』といった顔で健闘を称えあつた。

「それにしてもまさかニワトリが喋り出すとはな！。ま、おかげでこっちもネタの幅が広がったけどなあ」

浜谷さんが苦々しく僕に言う。もう少し素直に褒められないのだろうか。この浜谷という男は……。すると久山さんが口を挟んできた。

「浜谷！ アンタ偉そうなと言えないでしょ！ さっき二回も噛んだじゃん！」

「ひい！ すいませ〜ん」

一体何なんだこの男の豹変振りは……。もう完璧に隠れDMじゃないか。すると久山さんがすつと僕に寄り添い、おもむろに片腕を組んで来たではないか。

「こんなことなら私、奥村さんとコンビ組めば良かったあ〜」

僕はドキツとしてしまった。寄り添う久山さんの長くて艶のある髪が僕の頬に触れる。そしてホワンとほのかな香水の香り。これはまさに大人の女性の香りだ！ と、危うく久山さんの魔性に吸い寄せられるところだった。僕はそつとその腕を振り解きつつ謙遜する。

「いやいや、僕なんて……お二人の方が息びつたりでお似合いです

よ

「えー、嫌だよ誰がこんな関西人と……」

「うひっ、そんなぁ……。そこまで言わんでもいいっすやんエビ様」

「やめな！ 『エビ様』じゃどこかの歌舞伎役者になるじゃん！」

「あ、確かに……」

何だ、結局この二人気が合うんじゃないか。放課後にも関わらず浜谷・久山コンビの夫婦漫才を見せ付けられ、自然と笑顔が溢れるWAクラスの面々。

思えばこの『フェイス・アクト』WAクラスに通うようになって三週目。そう、たった三日だ。最初はどうかと不安で一杯だった僕。でも、どうやらこのクラス……結構居心地いい。

意気揚々と教室を出るみんな。やり遂げた想いはみな同じだ。僕は何となく、「忠臣蔵の討入りの後ってこんな気分だったのだろうか」などと、変な考えを起こしたくらいだ。危ない、危ない。彼らはその後自決したんだ……。

玄関までやってくると、外がやけに明るく感じた。見れば朝から降っていた雪が積もって、道路は薄っすらと雪化粧されている。

「おーっ、雪やんけ！ 大阪は滅多に降らんからなあ」

浜谷さんが妙にはしゃいでいる。それを制止するように「みつともない」と久山さんが頭を小突く。木多さんは「キタキタキタ！ 愛のある風景！」とはやし立てる。そうして和気あいあいと盛り上

がるWAの生徒たち。僕たちはこの日ひとつになった。

たった三日。だけどその三日で僕らの距離は縮まった。暗中模索の笑いの世界だけど、僕はこのクラスで何となくやっていけそうなそんな気分だった。

「よっしゃ、今から飲むぞ！ おいジミー。この辺でええ店知らんか！」

「どうやら祝勝会よろしく、クラス全員で飲み会をやる勢いのようだ。」

浜谷さんの問いかけに僕と佐伯さんは顔を見合わせる。「じゃあ、この間のあの店行こうか？」と言う佐伯さんの提案に「ハイ！」と頷く僕だった。

ビルの玄関を出ると僕はいつもの場所に目を送る。思った通り今日も彼女はそこに居た。

「店、知ってるだろ？ 後から来ればいいよ」

佐伯さんは突然僕に声をかけ、足早にクラスの輪の中へ入っていく。佐伯さん……何て気の利くいイ人なんだ……。

「あれっ？ ジミー！ 何してんねん！ 早よ来いや」

「あー、浜谷くん。彼は後から来るから。それよりいい店あるよ」

佐伯さんの言葉の突っ張りに「あらららら？」と押し戻される浜谷さん。浜谷さん……、何て空気の読めない人なんだ……。と、そんなやり取りを見ていた中條が、僕に申し訳なさそうな顔をして尋ねてきた。

「みんなでどこか行くの？」

「うん、ちょっと……『打ち上げ』みたいな」

彼女は「羨ましいいな」と連発する。どうやらAクラスはWAほどの連帯感はまだないようだ。

僕は冗談交じりに「WAに来る？」などと口走ってしまう。すると彼女は真剣な顔をして「ホントにそうしようかなあ」と答えるから困ったもので……。

「……中條にはお笑いなんで向いてないよ。女優がいいって」

「ふーん。じゃあさつき腕組んでたあの人なら、女優よりお笑いに向いているんだ？」

「はい？」

いつの間に……教室で久山さんがふざけて僕に寄り添ってきたあの場面を彼女は見ていたんだ。

彼女は僕を置いてスタスタと駅に向かって歩き始めた。何だか分からないけど、とにかく怒ってるみたいだ。その後を追って「誤解だって！」と何度も何度も釈明する僕。

「あ、あの人は浜谷さんの相方で、僕とはカンケーないから」

「あつそ。……ってか、それにしても綺麗な人だよねえ。あの人」

「え？ まあ確かに……」

「へえー。奥村くん年上が好みなんだ？」

「ち、違つって」

「じゃあ年下？」

「はあ？」

なんとも意地の悪い質問を繰り返す子だ。すると彼女は少しばかりすねた顔をして立ち止まると、バッグからひとつの小さい箱を取り出した。

「これあげる」

それが何なのか。鈍感な僕にもすぐに分かった。

中條の差し出した赤い紙で包まれたその小箱。紛れも無くそれはバレンタインのチョコレート。

「あ……ども、ありがとう」

僕がその小箱を受け取ると、彼女はいつものあの元気で突き抜ける声色はかげを潜め、低く澄んだ声で尋ねてきた。

「あのさ、ホワイトデーのお返しは別に要らないからさ……。その代わり……そのー……ケータイの番号教えてよ」

思わぬ言葉に驚いた僕。だが、そんな感慨に浸るまもなく、申し訳ない気持ちで事実を打ち明ける。

「……ごめん。俺、ケータイ持ってない」

「え?」

「あ、親から特に『持つな』とは言われてないけど、別に今は持つてなくてもいいかなあーって……」

「そうなんだ」

すると先ほどまですねていた彼女が、少し安心したような表情を見せ、またいつものように笑顔で話しかけてきた。

「奥村くんのそういう所、なーんか良いよね」

何が良いのか。僕にはよく分からない。逆に今時携帯電話も持っていないなんて、かなり時代遅れだと薄々感じていたくらいだ。

「私ってさ、ダメなんだ。すごく流されやすくてさ」

「え？」

「学校でもいつも誰かに同調しちゃうんだ。自分が共感できなくても話を合わせちゃう」

「ん、そんなの俺だってあるよ」

「うん、でもたまに夜一人になって考えるんだ。結局……一人ぼっちだなあって」

明らかにいつもと違う中條瑞恵がそこにいた。思えば初めて見た彼女の心の影だったのかもしれない。

「せめてこの世界なら、私らしく表現できるかなって。それで『フェイス・アクト』に来たんだ」

同じだった。彼女は僕と同じことを考えていた。数ヶ月前、オーディションを知ったあの頃の僕がそこにいた。

「人に嫌われる女優を目指しているのも、きっと自分自身が嫌いだからじゃないかな」

「……」

このとき僕は悟った。彼女は僕と同一年なのに、とんでもなく大人なんだと。「暗くしてゴメンね」と笑う中條。僕は「いや……」と言う以上、言葉が見つからなかった。

駅に着くと中條は改めて交換条件を出してきた。

「ケータイ持っていないならさあ……、これからも一緒に帰ってくれるかなあ？」

「も、もちろん」

手を振って改札口に向かう彼女の後姿に、僕は春の訪れを重ね合わせていた。

### 第三章(29) - 笑わせること -

佐伯さんの行きつけの居酒屋。僕の来店を待っていたかのように、店内に浜谷さんのドスの効いた声が響く。

「おいっ！ ジミー！ こっちや」

まだ夕方。それほど客は居ないけど、せめて教室の外でくらいそのあだ名はやめて欲しいものだ。「遅れてすいません」と苦笑いしながらテーブルに近づくと、浜谷さんに命じられるまま彼の横の席に着く。すると佐伯さんが乾杯の音頭をとった。

「じゃあ奥村くんも揃ったところで、皆で今日の勝利を祝おう」

「カンパニー！」

そうしてWAクラスの飲み会が始まった。もつとも、飲み会といつても僕はコーラで乾杯だが……。

それぞれに今日の坂野先生の態度や、最後の苦笑いをつまみに、飲んで食べて大笑いしている……。不思議だった。年齢も、話題もバラバラなこのクラス。三週間前までその顔も、その存在も知らなかったこの面々。だのに、みんなもつと昔から知っているような、そんな感覚だ。

「ジミー、ほら、もつと飲め！」

「いや、僕コーラですから」

「ゲップ職人の前にゲップしておけ！ おもしろいから！」

ゲップ職人……。ふと見ると早沢さんが不適な笑みを浮かべて僕を伺う。この人は別にコーラを飲まなくても、いつでもゲップを繰り出せる自信があるのだろう。なんともわけの分らない余裕の笑みだ。

「浜谷くん？ めっちゃ意外。ビール飲まないんだ？」

浜谷さんと同い年の野田さんが不意に尋ねた。そう言う彼女は十九歳で未成年なのにガンガンビールを飲んでいる。いいのだろうか？ 対照的に相方の川井さんはそんな野田さんを注意しつつ、自分はウーロン茶を飲んでいる。性格が真逆なのにコンビを組むこの二人もよくわからないものだ。

「彼はね……これから仕事なんだよ」

佐伯さんが浜谷さんの内情をポツリと漏らす。

「え、マジ？ これから？」

驚いた野田さんが尋ねると、「もうええっちゅーねん」と、不満そうにから揚げをパクつく浜谷さん。どうやら私生活には触れられたくない様子だ。

ふと、先ほどの中條との会話が脳裏をよぎる。ひよっとするとここに居る皆もきつと、この笑顔の裏に色んな影を秘めているんだ。そしてそれをひた隠しにして毎週あのネタ見せに挑み、人を笑わせようと努力している。

人を笑わせている人は、自分が楽しいから人も笑わせようとしているとは限らない。もしかすると中條のように、自分が笑いたいくらい苦しいから、人を笑わせようとしているのかもしれない。

「僕は……どうして人を笑わせようとしているんだろう。役者を目指していたはずなのに」

そんな風に考え込む僕。坂野先生に認めてもらってAクラスに移るため？ 今となっては何だかそれも違うような気がしてきた。

飲み会の喧騒の中で、その答えを探していた僕。ただ、その答えが見つかったのは、僕がこの世界から身を引いたときだったんだ。

第三章(29) - 笑わせること - (後書き)

第三章「笑いの世界」ここまで

第四章「動きはじめた世界」に続く

### 第三章までのあらすじ・登場人物紹介

……第三章までのあらすじ……

中学生の奥村光弘は、大手芸能プロダクション『フェイス・アクト』が催す、新人タレントオーディションに合格し、役者という新しい居場所へのスタートを切る。

ところが、彼が配属されたのは俳優志望のAクラスではなく、新たに創設されたお笑い芸人を育てるWAクラスだった。

Aクラス転属を目指し、冷たく厳しい担任の坂野に何とか認めてもらおうとネタを披露する光弘だったが、WAの個性派クラスメイタたちとの友情の末、いつしか心の変化が訪れて。

……登場人物紹介……

年齢は登場時。紹介文の最後にある（ ）内の数字は初登場ページ。

奥村光弘（14）

（おくむら みつひろ）

主人公。大人しく目立たない人畜無害な中学二年生。たまに”笑いの神”が降臨するが、本人はそれをコントロールできない。（第一章・1）

中條瑞恵（14）

（なかじょう みずえ）

『フェイス・アクト』Aクラス31期生。目指す女優像は「人に嫌われる女」。だが、人に感化しやすい性格。（第一章・9）

浜谷勝也(19)

(はまたに かつや)

言葉遣いの荒い関西男。笑いに対する自信と情熱は半端ではない。親の反対を押し切り上京して一人暮らし。(第一章・13)

佐伯和彦(22)

(さえき かずひこ)

正義感がめつぼう強いイケメン。光弘同様、役者を志望するがWAに。父親は超有名ベテラン俳優の高蔵健三郎。(第二章・5)

坂野重雄(65)

(さかの しげお)

演技指導の先生。舞台俳優を続けるかたわら『フェイス・アクト』の客員指導者に。(第一章・8)

奥村雪菜(11)

(おくむら ゆきな)

光弘の妹で小学校五年生。夢はピアニスト。好奇心旺盛でハッキリモノを言う。光弘の受けた『フェイス・アクト』所属の俳優、飯田友宏のファン。(第一章・4)

奥村誠太郎(51)

(おくむら せいたろう)

光弘、雪菜の父親。口数少ないが温厚な性格。光弘、雪菜の夢を尊重している。(第一章・4)

奥村公子(46)

(おくむら きみこ)

光弘、雪菜の母親。少し神経質でお節介やき。光弘には厳しく雪菜

には甘い？（第一章・4）

木多勇（21）

（きだ いさむ）

WAクラスの1期生。『愛の戦士』を謳い、さまざまな愛のある場面をネタにしている。（第二章・18）

早沢雅之（21）

（はやざわ まさゆき）

WAクラスの1期生。ゲップを操るフィーリング芸人。粋なテクノカットがポイント。（第二章・19）

野田沙里（19）

（のだ さり）

WAクラスの1期生。『なんちゃってJKコンビ』の一人。サバサバした性格。（第二章・20）

川井実加（19）

（かわい みか）

WAクラスの1期生。『なんちゃってJKコンビ』の一人。芸風と違って生真面目。（第二章・20）

久山あきな（25）

（くやま あきな）

WAクラスの1期生。大人の雰囲気醸し出すしたたかな女。愛称は『エビちゃん』を強要。（第二章・20）

パク・ジュンユン（24）

（ぱく じゅんゆん）

WAクラスの1期生。日本の80年代をこよなく愛する韓国人の会社員。芸名は『パクリン』。(第二章・21)

青柳啓太(35)

(あおやぎ けいた)

元フェイスアクトの研修生で現在は事務局職員。Aクラス担当だが直接的な指導はしない。口が軽い。(第二章・2)

#### 第四章「動きはじめた世界」(1) - サクラ散りゆく先 -

四月上旬。

中学三年生になった僕にとって、今年は高校受験の年だ。何に対しても無力感をどこかで抱いていた僕の中学生活もあと一年。でも、中学に入学した頃と確実に気持ちが変わるのは、僕に新しい居場所ができたからかもしれない。

研修生として所属する芸能プロダクション『フェイス・アクト』。お笑い芸人を育てる目的で新たに設けられた『WAクラス』が僕の新しい居場所になった。もちろん、役者志望の僕にとって初めは望んでいた居場所では無かったけど……。

記念すべきWA一期生の入所当日は、三十人ほど参加していた。そんなクラスも今では僕も含め在籍者はわずか九人。だが、厳しき担当者の坂野先生から『苦笑い』を勝ち取ったあの日から、残った一期生は誰一人脱落者を出さずことなく、毎週レッスンに明け暮れていたのだった。

ひよんなことからコンビを組み始めた僕と佐伯さんの漫才も、ようやく地に足がついてきた感じだ。ネタ見せでは坂野先生から繰り出される無理難題を何とかこなし、その都度毎週のように浜谷さんからダメ出しを食らった。でも、そのおかげでネタの組み立て方やリズムというものが、何となく分かってきた気がした。それらは僕にとって新鮮な世界で、自然と有意義なものとして受け入れられるようになっていった。

そんな日曜日の朝が今日も訪れた。

「行つてきます」

僕が玄関で靴をはいていると母さんが近寄ってくる。

「あまり遅くならないで」

クラス全員で行った飲み会以来、僕らの仲間意識はより結束力を高めていた。毎週メンツは変われども、レッスンは終われば喫茶店や公園に繰り出し、他愛ない話で盛り上がっていたのだ。そのせいで酷いときは夕食の時間を過ぎて帰宅することも。

「分かってるって……」

僕自身は別に悪いことはしていないと胸を張って言える。それだけに無愛想な返事をしてしまう僕。ただ、母さんが心配になってその声をかけるのも無理は無い。帰宅の遅い息子に対して「変な人間と絡んでいないだろうか」という親心なのだろう。もともと、そう一歩身を引いて考えられるようになったのは、それからまだまだ先のことだったけど……。

「それと、今晚のこと、ちゃんと覚えてる？」

それは雪菜のことだった。一ヶ月前から雪菜は再び自分の夢を叶えようと、ピアノのレッスンに通い始めたのだ。今晚、その音楽教室で雪菜も出演する発表会が催される。僕もその晴れ舞台に応援に駆けつける予定だった。

「大丈夫、今日は早く帰るからさ」

僕はそついい残し玄関を出た。レッスンの後、クラスで集うのはもちろん義務ではない。誘いを断れば何も問題ない話。むしろそれよりもレッスンの行きと帰りに在る、彼女との大切な時間さえ確保できればいいわけで……。寄り道せずそのまままっすぐ家に帰れ

ば、発表会までには十分間に合う時間だ。

駅に向かう一本道。近所に咲いている桜も散り始め、淡いピンクの花びらが舞っている。

中学三年生という新しい生活、『W A クラス』という新しい居場所。僕はそんな桜並木を歩いていく。ただ、散った桜の花びらが一面に広がるその道は、これから始まる未来への、自分に向けられたメッセージだったのかもしれない。

#### 第四章(2) - 友達以上恋人? -

『フェイス・アクト』が入っているビル。その最寄の駅に着くと、僕は真つ先に近くのファーストフード店に駆け込む。

「オハヨー！」

窓際の席で中條瑞恵が声をかけてきた。

彼女と僕はあのバレンタインデー以来、朝はこのファーストフード店、レッスンの後はビルの玄関で待ち合わせ、駅とビルまでのわずかな時間を共にしていたのだ。僕がクラスの仲間と合流するのはその後だった。

彼女との関係はチヨコレートを受け取ったというだけで、どちらかが告白したわけでもなく、正式に付き合い始めたわけではない。俗に言う友達以上、恋人未満といったところだろうか。

「おはよう瑞恵ちゃん。あ、髪切ったんだ？」

「うん！ 春だから思い切ってたねー。似合う？」

「似合う似合う！」

「よかったー」

肩まで伸びていた彼女の綺麗な黒髪は、耳を隠す程度にすっきりとしていた。ビフォーもアフターも、僕にとって彼女に対する気持ちに変わりはない。もっとも、彼女と会うのはレッスンのある日曜日だけ。恋人未満と言っても『都合良く言えば』という前提つきだ……。それだけに照れくさくて告白まではできなかったのだ。

ただ、あの日から二人の間にあつた、ちょっとした壁が取り払われていたことは事実だった。彼女に対していつしか『中條』から『瑞恵ちゃん』に呼び方が変わっていたことが何よりの証明だ。

「光弘くん……ダンス覚えてきた？」

「何？　ダンスって？」

「そつちも今日から新しい振り付けでしょ？」

「え？　そうだったっけ？」

「えー忘れたの？　ダメじゃん。ひよつとして来週のアльバム撮影も忘れてない？」

「あ……しまった。親にお金借りなきゃ」

「おいおい！　しっかりしろ奥村！」

陽気のせいで春休みボケなのか何なのか。そんな僕の気の緩みを示すように、窓の外にひらひらと一枚の花びらが舞っていた。ただ、今の僕にとって、レッスンもちろんだ切ただけ、何よりこうして朝と夕方、彼女と話をする時間が、何よりかけがえない時間になっていたのだ。

朝食を済ませ店を出た僕ら。すると、瑞恵ちゃんがいきなり僕の腕を持って引き止める。

「ね、先生だよ」

「え？」

見ると前方を歩いている男性が目飛び込む。その後姿は紛れもなく坂野先生だった。

「挨拶しておいた方がいいよね」

「うーん？」

「ほら、早く」

朝からあの鉄仮面と体面するのは少々気が引けたけど、僕は瑞恵ちゃんに促されるまま、坂野先生に近づいていく。

#### 第四章(3) - 近くて遠い春 -

「おはようございます」

僕と瑞恵ちゃんが声をかけると、坂野先生は表情も変えずに「おはよう」と返事をする。ただ、それ以上会話が続くわけではない。妙に重たい雰囲気の中、三人は『フェイス・アクト』に向かう。

「先生、アルバム撮影ってやっぱり重要なんですか？」

瑞恵ちゃんがこの空気を嫌ったのか、それを切り出した。すると、坂野先生は静かに話し始める。

「重要ですね。なぜならそのアルバムに君たちが載ってない以上、仕事は来ないと思っておいた方がいい」

「えー、やっぱりそうなんだ！」

彼女もそうだが僕も驚いた。何故ならそんなこと今の今まで知らされていなかったからだ。

数週間前に知らされたアルバム撮影。それも坂野先生ではなく何かAクラス担当の青柳さんがWAのクラスに訪れ、「『フェイス・アクト』の春季アルバム撮影をします」と、簡単なプリントを手渡しただけだった。

撮影の費用はもちろん生徒負担で、一人当たり二万五千円と少々高い。撮影は任意だったため、WAの中には「見送ろうかな」と口にする者だつて居たくらいだ。仕事が貰えないかもしれないそんな重要なことを、なぜ責任者の坂野先生は僕らに言わなかったのだろうか。

「撮影はAとWA合同でするんですか？」

僕の困惑をよそに瑞恵ちゃんが続けて質問すると、先生は「そのようです」とだけ答える。

「良かった。じゃあ撮影の時会えるかもね」

ふいに話を振られて「え？」と答える僕に、「また！ しっかりしろお！」と背中を押す瑞恵ちゃん。やっぱり僕は陽気にやられているようだ。

「……君達は、クラスが違いますが、仲がいいようですね」

「はい？」

唐突にそんなことを言われてたじろぐ僕。一方で瑞恵ちゃんは「そうなんです！」と元気良く即答する。するとどうだ、あの鉄仮面が少し和らぎ「そうですか」と微笑んだではないか。僕らWAが坂野先生を笑わせようと必死なのに、彼女はあっさりとそれを乗り越えてしまった。坂野先生そりゃないよ……。

その後、取り立てて話も盛り上がらないまま、僕らはビルに到着した。先生は二階に設けられている事務室へと向かう。

「……では、ここで」

「はい、失礼します！」

妙な緊張感から解放され、僕らはお互いの教室があるそれぞれの

フロアを目指し階段を上る。

「じゃあまたレッスン後にね！」

階段を上がって三階の踊り場。彼女はそう言ってAクラスの教室に入っていく。そして僕はもう一階上のWAの教室へ向かう。

たったワンフロア違うだけなのに、彼女との距離はここで大きく引き離される。休憩時間も昼休みも、接触を拒むかのようにAとWAで時間割は異なっていた。僕の中で彼女と接するわずかな時間が、より意味を成していったことも、この近くて遠い教室が示していたのだった。

#### 第四章(4) - いつもと違う朝 -

教室に入ると佐伯さんの姿が。そして『なんちゃってJK』の一人、川井さんもすでに入室していた。ふと、妙な違和感がした。いつもなら片隅で熱のこもったネタ合わせをしているはずの、あの二人が揃っていない風景が珍しかったのだ。

「おはよう奥村くん」

「おはようございます。あれ？ 野田さんは」

「ん、今日は休みみたいだよ」

「なーんだ。でも、やっぱり二人揃ってないと変な感じですねー」

僕が笑うと佐伯さんも同調するように笑う。でも、どうもそれは何かを隠しているような笑い方だ。すると、珍しい現象は重なったりするもので……。

「グッドモーニング！ WAの諸君」

「あれっ？ どうしたんですか浜谷さん？」

「はあ？ なんやねんジミー。俺が朝から来たらアカンのかい！」

「いや、何もそんなこと言っていないじゃないですか……」

相変わらず浜谷さんは絡みづらい。それでも、この『フェイス・アクト』にやってきた頃に比べれば、彼に抱いていた嫌悪感もかな

り薄れていた。嫌味を言われてもサラリと受け流せる余裕もできたほどだ。

「たまには朝からレッスン受けるのもええもんやで」

「『たまには』じゃダメですよ……。あ、今やってるダンスの振り付けとか知らないんじゃないですか？」

「まあな」

「『まあな』って……」

そうして浜谷さんを皮切りにいつものWAの面々がやってくる。浜谷さんが居ることに皆一様に驚き、その都度浜谷さんは面倒くさそうに返事をしてはプンプン怒っている。あんたが撒いたタネだったの。

でも、そうして盛り上がる生徒の輪に入ってこなかったのは川井さんだった。いつも常に一緒に野田さんが居ないことで、よほど寂しいのだろうと僕は思っていた。その話を聞くまでは……。

「実はね、野田さんここを辞めたがっているみたいなんだ」

「えっ！」

それは昼休みにコンビニの弁当を買いに行った時のことだ。一人で昼食を買う川井さんを見て、佐伯さんがボソツと呟いたのだ。

「ほら、俺たちって未だにあまり先が見えてこないだろ？ お笑いのライブに出演できるわけでもないし、出ないとしてもオーディションの話すらない。その割にいつまで経っても坂野先生は毎週無茶

な課題を押し付ける。そりゃ『何でここにいないくちやならないの』  
って思うのも無理はないよ」

「あ……」

「俺たちみたいに役者を目指すならこの事務所も悪くはないけどね。  
お笑いについてはまだ新参者だからな……この事務所」

芸能界で仕事を請ける仕組み。僕にはよくわからなかった。そして仕事を請けるためには、個人よりも事務所の力が時として大きく作用するんだと、僕は佐伯さんから教えられたのだった。

#### 第四章(5) - 坂野の思惑 -

教室に戻り昼食をとる僕と佐伯さん。

「でも、俺と君にとって来週のアルバム撮影は願ってもないチャンスだよ」

「あ、佐伯さんはやっぱり知っていたんですね。アルバムの撮影をしておかないと仕事が貰えないって」

「まあ、それくらいはね」

来週予定されているアルバム撮影。それは『フェイス・アクト』が年二回、各番組制作会社やテレビ局に配布する、所属タレント名鑑のものだった。例えばテレビドラマなどでエキストラが必要な場合、臨時に一般公募でアルバイトを雇うこともあるが、多くはこのようなタレント事務所から送られてくる新人のタレント名鑑を見て、キヤスティングに合う人物を選出しているのだという。つまり、ここに載っていない以上、僕らは存在しないことになってしまうのだ。

「特に俺たちのようなこの馬の骨とも分かんない奴、簡単には事務所もプッシュしないからね。とにかく仕事を手に入れるには手っ取り早い方法だよ」

「なるほど……、でも佐伯さんは僕らと違ってお父さんが……」

言いかけた僕はそれを躊躇した。佐伯さんにお父さんの話は僕の中で禁句にしていたからだ。有名ベテラン俳優、高蔵健三郎のことは。

「……俺も一緒だよ。特別待遇はしないでくれって頼んでいるから」  
「そうなんですか……」

そう言っ言葉を濁す僕。やっぱり佐伯さんは父親の存在を白紙に戻し、僕ら研修生と同じ立場から、這い上がって勝ち取りたいのだろう。役者という道を。

「ま、俺たちにとってはアルバム撮影がデビューへの第一歩ってわけ。でも、それなのに坂野先生は何も言わないだろ？」

「え？ あ、そうですね。仕事を獲られるチャンスなのに」

「そこだよ。つまりWAにとって意味のないものだからさ」

「どついうことですか？」

「お笑いやるのに役者の仕事貰っても仕方ないだろ？」

「ああ……まあ」

「そんなチャンスも貰えない以上、野田さんが呆れて来なくなるのも無理はないさ。……坂野先生の言うように、WAはやっぱりお荷物クラスってことかもね」

「いつ……？」

「坂野先生が何故俺たちにアルバムの重要性を話さないのか。単なる嫌がらせか、それとも……」

「それとも？」

「俺たちに自ら進んで辞めてもらうのを待っているのかもな」

「そんなぁ……」

坂野先生は本当に僕らを辞めさせようと、毎週無理難題を突きつけているのだろうか。W Aクラス。僕はとんでもない船に乗り込んでしまったようだ。

第四章（6）・授業変更・

「でも、あの先生がその気なら、俺は最後まで歯向かうつもりだぞね。お笑いだろつとお荷物だろつと。中途半端なマネしやがったら事務所ごと訴えてやるよ。『この月謝ドロボー！』ってさ」

何とも心強い佐伯さんの言葉に、やっぱり今の僕にはこの人が一番頼れる存在だと改めて確信した。

「……ぼ、僕も師匠についていきますよ！」

「だからやめろつてその『師匠』ってのは……」

すると佐伯さんは小声で「これは余談だけど……」と前置きして言った。

「どうやら坂野先生は『フェイス・アクト』そのものからも、煙たがられている存在らしい」

何ということか。WAの責任者である坂野先生が、当の事務所から嫌われているなんて。ではWAの生徒の立場なんてますます厳しいものになるじゃないか。

「俺が思うに事務所的にはWAと共に、坂野先生にも去ってもらいたいのかな」

何だかきな臭い話になってきた。それにしても佐伯さん、どうしてそこまで内部事情を知っているのだろう。僕は不意に尋ねてみた。

「あのー、そんな話って一体どこから仕入れてくるんですか？」

「ん？ 青柳さんだよ。あの人ホント口軽いからねえ」

いやいや、それはお互い様ではないだろうか……。この人と知り合って三ヶ月。何となく佐伯さんの性格も掴めてきた気がしたのだ。った。

午後三時。坂野先生が教室に現れた。今日の課題は「あいうえお作文」。しかも先生がその場でお題を決めるといふものだ。当然予習なんてできるはずもない。アドリブセンスだけが頼りとなる。

「……浜谷君はどこに行きました？」

その先生の問いかけでようやく僕は気づく。ついさっきまで姿を見かけた浜谷さんが居ない。ネタ見せの時間は必ず出席する彼なのに……。すると川井さんが手を挙げた。

「先生、浜谷君は早退しました」

「早退？ 彼が？」

坂野先生は「遅刻ばかりと思えば今度は早退ですか」と、呆れた口調でこぼす。確かに浜谷さんは出入りの激しい人だ。

「今日は『あいうえお作文』をやってもらった予定でしたが、少々変更して、ある場所に行こうと思います」

にわかにはわづく教室。一体どこに連れて行こうというのだろうか。坂野先生は教室のホワイトボードにマーカーを走らせる。そこ

には『アクトブリッジホール』と書き出された。

「駅前にあるビルの一角に、ゴールデンウィークの五月三日、『フ  
エイス・アクト』直営の小劇場がオープンします。そこで& a m p ;  
# 2 6 4 7 8 ・落として上演される芝居があるのですが、その  
舞台稽古を今から見に行きたいと思う」

僕と佐伯さんは顔を見合わせると笑みを浮かべた。新しい劇場、  
しかも舞台稽古が見られる。僕らにとってそれは願ってもない授業  
の変更だった。

#### 第四章（7）・アクトビレッジホール1 -

坂野先生を先頭に、WAの生徒たちはその劇場に向かって歩いていく。

『フェイス・アクト』直営の小劇場。そんな建物が出来ることなど、情報通の佐伯さんも知らなかったらしい。どんな劇場なのか興味津々のようだ。

もちろん、今まで劇場という場所に出向いたことのない僕にとってもそれは同じだった。ライブで演劇を見たのは学校の文化祭か、近所のスーパーでやっていたヒーローショー程度だったわけで。それゆえに自然と期待に胸を躍らせる。

「ここになります」

坂野先生が立ち止まったそこは、駅の通りに面したアーケードの一角にある雑居ビル。横二メートル程度のガラス張りのドアには、まだ工事の途中らしく、「危険」といった張り紙がなされていた。数週間後にはオープンするというのに、目ぼしい看板や告知も掲げられておらず、一見、劇場の入り口とは思えない。

「では、入りましょう」

坂野先生が中に入っていくと、僕らもゾロゾロと後をついていく。中に入ると鼻につくニオイ。塗りたてのペンキがまだ乾いていないのか。きつと浜谷さんが居たら「クツサイのお！」とデリカシーなく声を荒げていたことだろう。

玄関を入れて左手にあるロビーは、入り口とは違って変わってとても広くゆったりしている。白を基調にした壁面がそれをより際立たせていた。その正面に受付と思しきカウンターが備え付けられて

いる。すると、坂野先生がカウンターの前で僕らに向かって告げた。

「研修生の君たちは、この劇場の入場に関してはフリーパスです。この受付で学生証を提示して『勉強に来ました』と言えば、中に通してもらえることになっています」

「えっ！」

WAの生徒たちが大いに沸き立つ。タダで劇場に入れるとなればなおさらだ。

「言っておきますが、勘違いしないように。あくまで勉強のためです。君たち以外の同伴者が居る場合は、ちゃんと支払っていただきます」

冷たく言い放つ坂野先生に、僕らはクールダウンしてしまう。いや、僕たち以外が有料になるのは当たり前のことなんだけど、坂野先生が言つと、何だか物凄く現実に戻された気持ちになるんだよね……。

「で、このロビーから奥の通路に面した四つのドアが客席側への入り口。通路横の階段を上っていくと、二階から四階が楽屋や衣裳部屋になっています」

坂野先生はそう言つと腕時計に目をやる。

「まだ稽古中ですね……。今度オープンの際に上演する芝居は、あなた方の二年先輩に当たる、二十九期生が中心となって行います。丁度稽古の真つ最中ですから、我々は客席で見学するとしましょ」

二年先輩の人たちによる芝居。少なくとも僕みたいな素人とはレベルも違うのだろう。僕はワクワクしながら先生の後についていく。通路を歩いていくと、扉の向こうからハキハキとした声が耳に届く。見るからに分厚いドアで閉め切られているというのに、まるで近くで話しているように聞こえてくるその声。これが芸歴二年の差がもたらす声の違いなのかと僕は感じるのだった。

## 第四章(8)・アクトビレッジホール 2

坂野先生がグツとドアを押し開けた瞬間、その怒号が僕の全身に響き渡った。

「バカヤロー！ テメーら何度言わせんだよ！ そうじゃねーだろ！ カス！ 辞めちまえ！」

怒鳴り声と共に舞台に向かって投げ飛ばされる台本。その緊張感に一気に萎縮してしまう僕らWAの生徒たち。

「すみません！」

舞台上の先輩たちが頭を下げる。そんな彼らに睨みを利かせ、客席側で仁王立ちしている口ヒゲを生やした中年男性。坂野先生は「彼がこの演劇の監督で甲斐先生です」と説明してくれたのだった。

僕らは練習の邪魔にならないよう静かに座席に座る。でも、僕らが入ってきたことなどまるで眼中にないかのように、甲斐先生と先輩方による舞台稽古は続けられたのだった。

先輩たちが演じるその芝居は、どうやら甲斐先生による創作時代劇らしい。現代で吹奏楽の演奏中に江戸時代へタイムスリップしてしまった学生服の繁太郎が、卑劣な悪党どもと対決。第二ボタンを投げ飛ばし、トランペットで立ち回るといふ、涙あり、笑いあり、ダンスあり、生演奏ありの何でも時代劇だ。

ひとたびそう聞くと、どこか軽い内容という印象を受けるが、殺陣のシーンはその練習量を感じさせるほどの圧巻ぶりだった。決めるところは決める、緩めるところは緩める。「演劇にもリズムがあるのです」と、坂野先生は僕らに指導するのだった。

「ありがとうございます！」

監督に元気よく一礼すると、キビキビとした動きで舞台袖へと捌けていく先輩たち。どうやら稽古はひと段落ついたようだ。僕らW Aの生徒たちは熱のこもった舞台稽古を見せてくれた先輩たちに、自然と拍手を送るのだった。

坂野先生は甲斐先生に呼びかけ談笑を始めた。しばらくすると甲斐先生は「いいですよ。どうぞ、どうぞ」と、自身も舞台袖へと引き上げていく。坂野先生は甲斐先生を見送ると、僕らに向かって問いかけた。

「どうですか？ 舞台上上がってみますか？」

僕らは口々に「ハイ！」と声を揃え、一斉に舞台へと駆け上がる。まだピカピカの床、眩しいほどの照明の光。そして目前に広がる真っ赤な客席。キャパシティは三百人ほどだという。僕もいつかこの舞台で演じる日が来るかもしれない。そう思うと胸が躍る。

ふと、舞台袖を見ると、ゴソゴソと動く物陰。あの八十年代アイドル大好き芸人のパクリンが、ローラースケートを履こうとしているのではないか！ どさくさ紛れにこの舞台で一曲踊ろうと言っのかこの人は……。だが、パクリンのそんな企みも、『エビちゃん』こと久山さんの「やめな！ 床に傷がつくでしょ！」という一喝によって阻止される。「残念デース」と悔しがるパクリンさんに、皆が笑いに包まれたその時だった。

「残念がることはない。あなた方も、& a m p ; # 2 6 4 7 8 ; 落としに出演してネタをやってもらおう予定です」

つい今しがたまで、舞台上で笑っていた生徒たちが、ピンと引きつった表情で坂野先生に目を向けた。

「つまり、あなた方の初舞台はここ、ということになりますね」

瞬間、僕と佐伯さんは互いの顔を見合わせると息を呑んだ。そして僕は今一度、誰も座っていないその赤いシートの客席を、ただただ見渡すのだった。

第四章(9)・動きはじめた世界・

「どう思う?」

劇場からの帰り際、佐伯さんが僕に話しかける。目標となる初舞台がついに決まったというのに、佐伯さんの表情は冴えない。

「何か気になりますか?」

「うーん、なんかね。今まで青柳さんからあんな劇場の話聞いてなかったし、何より俺たちが舞台に立てるなら、なおさら一言くらいあってもいいのに、公演まで一ヶ月を切った今になってだろ?」

「ええ、でも工事が遅れていたとか……」

「でもなあ……公演日が決まったってのに、あの劇場、見るからに宣伝もしてないみたいだし」

佐伯さんは「考えすぎかもしれないけど」と苦笑いする。きっと僕なんかよりこの業界の事情を良く知る佐伯さんのことだ。腑に落ちない点が幾つもあるのだろう。

「光弘くん?」

ビルに戻ってくると、瑞恵ちゃんがいつものように待っていてくれた。舞台稽古を見学して二時間近く。とっくに帰っていたと思っただのに……。悪いことをしちゃったなと思う反面、何だか妙に嬉しい気分。

「ゴメン、急に新しくできる劇場を見学することになって……」

「わあ、羨ましいな。Aクラスはまだ行ってないんだよ」

「あれ？ 瑞恵ちゃんは劇場のこと知ってたの？」

「うん。 え？ 知らなかったの？」

僕が「聞かされてないよ」と手を横に振ると、佐伯さんが声をかけてきた。

「奥村くん、戻るよ！」

「あ、はい！ ……ゴメン、まだ授業中だから。今日は先に帰ってて」

「ん……分かった。じゃあ来週の朝ごはん光弘くんのオゴリで」

「えー？」

「ウソウソ、じゃあね」

貴重な彼女との時間が潰されてしまい、ちよつと残念な僕。ただ、それと同時に瑞恵ちゃんのAクラスは、当たり前のように劇場の話を知らされていたことが気になった。

階段を上る佐伯さんに追いつくと、僕は真つ先にそれを報告した。

「佐伯さん、Aクラスは劇場のこと知っていたみたいですよ」

「へえ……。ますますワケが分からないねえ」

先ほどと同じく、困惑した表情を浮かべる佐伯さんは、「先生に直接聞いてみるよ」と、教室に入っていく。  
劇場、アルバム、AとWA、そして初舞台。僕の知らない所で色んな何かが動き始めていたのだった。

第四章（10） - 約束 -

椅子に座ったW Aクラスの面々に、坂野先生が問いかける。

「どうでしたか。劇場を見た感想は」

「素晴らしいデス！ ボクの初舞台にピッタリデス！」

声弾ませ興奮気味のパクリン。すると、坂野先生は冷たくその言葉を一蹴する。

「まだ、君がああ舞台に立てるとは決まっています。出演者は追って僕が発表します」

「オフツ？ 結局残念デース！」

落胆したのはパクリンだけではなく、途端に雰囲気落ち込む教室。やっぱり一癖あるこの先生のこと、そんなにうまい話は無かったわけで……。どうやら公演までの数週間、僕たちのネタ次第で坂野先生が出演者を選抜するようだ。

「では、今日は長くなりましたがここまで。お疲れ様」

教室を出ようとする坂野先生。すると佐伯さんが呼び止めた。

「先生、よろしいですか」

「……はい？」

「ひとつ約束してください」

「何でしょうか」

「最低でも一人、若しくは一組。誰かは必ずあの舞台に立てると約束してください」

僕には佐伯さんのその質問の意図が、すぐには分からなかった。坂野先生は少しばかり瞼を閉じて考えると、静かに返答する。

「……いいでしょう。約束します」

「ありがとうございます」

佐伯さんが頭を下げると、坂野先生は「では」と、教室を出て行った。すると開口一番、「佐伯くん、やるね」とエビちゃんがそれを称えたのだった。

「どういふことですか？」

僕が佐伯さんに問いかけるとニヤリと笑みを浮かべる。

「君のさっきの話だと、やっぱりWAはお荷物って意味だろう。なら、あの先生きつと全員に対して『出演を見送った』とか言いかねないだろ？ 最終的に、俺たちを辞めさせるためにさ」

「あ……」

「俺たちに希望を持たせつつ、ギリギリまで引っ張って、一気に落胆させる。全員落選でも『実力が無い』と言われれば俺たちは言い

返せない。そうして引つ張れば引つ張るほど、月謝が入ってウハウハ。そんな手に誰が乗るかっつーの」

すると傍らに居たエビちゃんも大きく頷き合いの手を入れる。

「最低でも誰かは出られる。ってことは、私たちは今から完全にライバル同士になるってわけね」

皆が互いの顔を見渡す。初舞台を懸けて、僕らは彼らとしのぎを削ることになるわけで……。するとエビちゃんは難しい顔をする僕を見てクスツと笑う。

「……ま、その手にも乗らないけどね」

彼女は不敵な笑みを浮かべ言ったのだった。

第四章（11）・エビちゃんの狙い 1 -

「坂野先生はそれもお見通ししてことだよ。競争心を煽って俺たちの結束力を切り崩そうって魂胆さ」

佐伯さんは落ち着いた口調でエビちゃんの思惑を代弁してくれる。なるほど、先生は僕らのチームワークの良さを逆手に取るうとしているのか。

「でもさ、坂野先生が本気で俺らを辞めさせるつもりなら、WAって一体何のために創ったんだ？俺ら馬鹿みたいじゃん……」

普段は無口な木多さんが、ボソツと愚痴をこぼす。僕や佐伯さんと違って、彼らは純粹にお笑い芸人の道を歩もうと、この『フェイス・アクト』の門を叩いた。確かにそう言いたくなるのも無理も無い気がした。

「ほら、あの先生言ってたじゃん、入所式で。『フェイス・アクトにお笑いは必要ない』って。つまり、そういうこと」

エビちゃんが呆れ口調で吐き捨てた。すると、それに乗じて佐伯さんが何かひらめいた様に話し始める。

「そうだよ、これで繋がったよ。どうして坂野先生が『フェイス・アクト』から煙たがられているか」

そんな事実は僕以外の生徒はやはり知らなかったらしく、皆一同に佐伯さんの次の言葉を待つ。

「わざわざ新設したWAなんだし、『フェイス・アクト』自体はWAを盛り立てて、お笑いブームに乗っかるうとしていることは間違いないと思うんだ。ただ、古参の坂野先生が介入してそれを拒んでいる。そりゃ事務所にとっちゃ目の上のたんこぶってことさ」

その言葉で僕は以前青柳さんから聞いた話もあって、一連の疑問が解けたのだった。ただ、それが本当ならば、坂野先生が存在する限り、僕らは何時までも毎週難題を突きつけられ、デビューどころか辞めさせられるかもしれない。

「なんかムカつくな。いつそ今から事務室に殴りこみかけようか？ クーデターやってやろうぜ」

目をギラつかせた早沢さんが意気揚々とまくしたてる。きつこの場に浜谷さんが居たら、その言葉を言う前に、二階の事務室に怒鳴り込んでいたことだろう。僕としてはそんなトラブルは御免なわけ。浜谷さん……居なければそれはそれで空気読める人じゃないか。

「やめな。それじゃああつちの思う壺。私たちは出演できるのが一人とか一組なんてことに捉われないで、全員である舞台に立つ。その気持ちで行かなきゃ。そうだよね川井ちゃん？」

いきなりエビちゃんは川井さんに話を振った。今日一日あまり元気の無かった川井さんも、その投げかけを受けてゆっくりと無言で頷く。

「よし、そうと決まれば今から皆で行くよ」

エビちゃんの号令にクエスチョンマークが僕らの頭上を飛び交う。

「浜谷が説得しに行ってる野田ちゃんの下口にだよ」

「ええっ?」

皆が驚きのあまり上ずった声を発した。その浜谷さんの早退の理由を知らされたことで……。

第四章（12）・エビちゃんの狙い 2 -

僕らはエビちゃんの先導で、野田さんの自宅へと向かう。

聞けばあの舞台稽古の見学中、エビちゃんは浜谷さんとケータイのメールで連絡を取り合っていたらしい。どうやら野田さんの欠席理由を知った時から、今日の放課後に皆で説得に向かうことを画策していたようだ。

「はあ……久山さんには参るな。ある意味、俺たちの結束が高まるのは彼女のおかげかもね」

道中、佐伯さんがポツリと僕に漏らした。

「どういことですか？」

「ほら、こうして皆が『野田さんを励ましに行かなきゃ』って思うように、上手く誘導したわけじゃないか。……なかなかの策士だね  
ありゃ」

この佐伯さんをもってしてもそう言わしめる、エビちゃんこと久山あきな。まさに魔性の女だ。

「あ、でも今思ったんですが、ああして無茶苦茶やってくれる坂野先生のおかげで、僕らかえってチームワークが良くなったりしてますよね……？」

それは、言った僕自身思ってもみなかった言葉だった。なぜかスラスラとそんな風を感じたまま声を出していた。すると、佐伯さんがびっくりした表情で僕を見る。

「……君って、やっぱり面白いなあ」

「え？」

少しばかりでしゃばり過ぎたのだろうか。笑う佐伯さんを横目に、僕は何だか照れくさくなるのだった。

やがて野田さんの住むマンションにやってきた。

野田さんの自宅といっても、高校卒業後から川井さんと共同生活しているらしい。言わば『なんちゃってJKコンビ』の拠点だ。僕が知らなかっただけで、浜谷さんやエビちゃん、あの飲み会の日以来二人と意気投合し、たまにこの家に訪れていたようだ。

川井さんが鍵を開けて中に入ると僕らもドヤドヤと玄関に押し入る。

「沙里、みんな心配して来てくれたよ」

「えーっ、マジでえ？」

川井さんの呼びかけに、部屋の奥からあの野田さんの声が響いてくる。川井さんと違って結構元気そうだ。廊下を抜けてリビングに入る。そこは女の子二人で住むには勿体無いくらい、意外にも広い部屋だった。

「なによ皆して……大げさだよ。ウチ別に病んでねーよ！」

野田さんがやれやれといった顔で僕らを迎える。ふと部屋の脇を見ると、僕らがやって来たことなど意に介さず、背を向けてテレビゲームに興じる浜谷さんの姿が……。

「アンタ……何してんの」

エビちゃん呼びかけも聞こえているのか聞こえていないのか、ゲームに夢中の浜谷さん。

「よっしゃ！ 謎はすべて解けた！ このオッサンが上野からカシオペアに乗り換えよつたんやな！ やるやんけこの詐欺師っ！ クーッ！ 野田ちゃんおもしろいなあこのゲーム！」

案の定、そのわずか数秒後、エビちゃんの右手が浜谷さんの頭を、鋭く打ち抜いたのは言うまでも無かった。

#### 第四章（13） - 浜谷の親孝行 -

浜谷さんが渋々ゲームを止め、皆は思い思いに座り込む。そして、先ほどまであった出来事、先生のこと、劇場のこと、そして初舞台の話、佐伯さんとエビちゃんが交互に説明する。最初は皆で押しかけてきたことに困惑していた野田さんだったが、その話を聞いてようやく笑みも見られるようになった。

「沙里、頑張ろうよ。辞めるのはそれからでも遅くないじゃん」

川井さんがそう言うと、WAの皆も口々に「やってやろうぜ」「頑張ろう！」「と野田さんを励ます。彼女はそんな皆の気持ちが嬉しかったようで、少し涙声交えて「みんなありがとう」と小さな声で感謝した。野田さんの改心に川井さんもようやく笑顔を取り戻した。

「よっしゃ、そうと決まれば今からそれぞれネタ合わせしよか！ ついでに皆で批評しあってネタを練ろうやんけ。坂野がぐうの音も出せんようなネタをな！」

不意に立ち上がった浜谷さんが皆を鼓舞する。すると野田さんは「ダメだってここは！」とそれを制した。

ネタ合わせというものは、自分でも分からないうちに結構気が張ってしまつので、自然と声も大きくなつてしまふ。彼女たちのネタは動きも激しいので、近所迷惑を考えてこの部屋では極力ネタ合わせをやらならないらしい。毎朝早めに教室に来てネタ合わせをするのも頷ける話だった。

「しゃーないな。ほんなら……皆でゲームでも……」

ジロリと睨み付けるエビちゃんの視線を感じたのか、浜谷さんは「えーっと、やっぱりここで帰るとするか」と、すすすすと身支度を始めた。

「浜谷くん、本当は今日もこれから仕事でしょ？ わざわざゴメンね」

野田さんが申し訳なさげに声をかけると、「もつええ言うてるやんけ」と、ブツブツぼやきながら浜谷さんが帰っていく。すると木多さんや早沢さんも「俺たちも帰るよ」と部屋を後にした。残ったメンバーはいつものようにそのまま談笑を続けるのだった。

「それにしても浜谷くん、よくやるね。殆ど休み無しだろ？」

それは浜谷さんらが帰って一時間ほどしてからだろうか。野田さんが出してくれたコーヒーを口に運びつつ、佐伯さんが感心する。

「結構生活大変みたいだよ。バイトで稼いだお金、殆ど大阪の親に振り込んでいるらしいから。今時珍しい孝行息子だよな」

どうやらエビちゃんも、厳しく当たっているように見えて、その実、彼に一目置いていらしい。浜谷さんのそんな親孝行な一面を知っているからこそ、あの横暴な振る舞いも、彼らは許せているのかなと感じた僕。

「今日は急な配達依頼があったんだろ？ それなのに時間割いて励ましに来る所が、彼の良い所だよな」

「何でも『発表会の差し入れや』って言ってたよ。結構数があるから儲かりそうだって。あ、奥村くん、彼のトコで売ってるメロンパ

ン食べる？」

「……しまった」

「奥村くん？」

野田さんの声も僕には届かなかった。僕はすっかり忘れてしまっていたんだ。今晚、雪菜がピアノの発表会に出演することを。

第四章（14） - 家族の損失 1 -

すでに陽も落ちて真っ暗になった帰り道。結局、僕は雪菜の発表会に間に合わず自宅に戻ることにした。

野田さんの家を飛び出し、音楽教室まで急いで向かったものの、すでに発表会は終わっており、スタッフらしき人たちが後片付けに追われていたのだった。

家に着くとその雰囲気はまだ三人は帰ってきていないと分かった。リビングも、二階の部屋も、照明が灯されていなかったからだ。今日は発表会の後、家族で外食する予定だった。きっと今頃はどこかのレストランで食事をしているはず。

「ただいま」

誰も居ないことは分かっているのに、玄関に入ると部屋の奥に声をかけてみる。もちろん返事は無い。いや、返事をされてもそれはそれで怖すぎるが……。

靴を脱ぎ、玄関の明かりを点けようとしたその時だった。

ガチャッ

「わっ!」

「ひゃっ!」

思わず腰が抜けそうなほど驚いた。見るとそれは母さんだった。

「あんた帰ってたの? もう! 脅かさないでよ!」

「こつちもだよ！」

と、その後ろに居る雪菜の顔が目飛び込む。そして、少々疲れ  
た顔の父さん。僕は雪菜に向かって真つ先に謝った。

「雪菜……悪い！ 今日行けなくて」

「いいよお！ どうせ失敗しちゃったし」

「失敗？」

「うん、だからいいって！」

そう言葉少なく二階へと上がる雪菜。母さんが心配そうに雪菜に  
目を配る。

「失敗したって？」

「……ああ見えてね、結構落ち込んでるのよ。母さんたちにはそれ  
程たいした失敗には思えなかったけどね、何度も練習していた部分  
だからあの子にとっては悔しいんだろうね」

一度は諦めたピアノの夢のため、雪菜は毎日必死になって練  
習していた。雪菜にとっては父さんや母さんにお披露目する晴れの  
舞台だ。失敗は流石に堪えただろう。

「光弘、何か食べてきたの？」

僕は「何も」と答えると、「じゃあ簡単なものでいいね」とキッ  
チンへ向かう母さん。すると父さんが僕に声をかけた。

「どうして来れなかったんだ？」

僕は「すっかり忘れて皆と話し込んでいた」なんて言えるはずもなく、押し黙ってしまふのだった。

母さんが作ってくれたラーメンをすする僕。リビングでは父さんと母さんが発表会での雪菜の姿勢を褒めている。失敗しても最後まで演奏しきった雪菜が誇らしかったようだ。僕はますます立場が悪い。

聞けば雪菜が演奏したのはショパンの代表作の一つ『別れの曲』だそうだ。あんな美しくも難しい曲、ブランク明けでそんな簡単に弾かれたらたまったもんじゃないって。

「ごちそうさま」

そのまま二階の自室に駆け上がりたい気分だったが、僕は覚えてるうちにどうしてもそれを言わなくてはならなかった。

「ちょっと、お願いがあるんだ」

母さんが「何？」と尋ねると僕はアルバム撮影のお金が必要だと打ち明けたのだった。

「ええ？ 撮影するだけで二万五千円もかかるの？」

「いや、その撮影をしなくちゃ仕事が貰えないかもしれないんだ。だから、どうしても必要なんだよ」

撮影費用を何とか理解してもらおうと母さんに説明する僕。と、そこに父さんが口を挟む。

「光弘、お前は簡単に二万五千円と言うけど、それは簡単な額じゃ

「あないぞ。分かっているのか？」

「う……分かってるよ」

「分かっているなら何故『今日は行けそうに無い』と連絡のひとつも出来なかった？ その連絡ひとつを怠ることで、二万どころか何万もの損失を出してしまうことだって、社会に出ればあるんだぞ」

「……」

「父さんは普段無口だけど、たまにこうして説教されてしまう。しかも、何も言い返せないほどの確に。もちろんそれは自分が悪いわけ……」。

「今日は……大事な仲間が養成所を辞めたいって落ち込んで……。皆で励ましてあげようってことになったんだ。だから……ごめんなさい」

「そう言つと、父さんの表情が幾分か和らいだ。」

「それならそうと、正直に言えば良いんだ。お前に演奏を聴いて欲しかった雪菜だって、それを知れば気持ちも違つたと思うぞ？」

「……」

「損失は……お金だけではないんだ。分かるな？」

「僕はただただ頷いて「ごめんなさい」としか言いようが無かった。すると父さんは「出してやれ」と母さんに促す。しばらくして寝室から出てきた母さんは、手にした二万五千円を僕に差し出してくれ

た。そして、父さんは確かめるように僕に言う。

「光弘、お前を信用していいな」

「……うん。俺も頑張るから。ごめん……」

「よし、じゃあもういい。父さんもお前のひのき舞台、楽しみにしているぞ」

「あ……」

僕はそこで打ち明けられなかった。家族はまだ知らないのだ。僕が役者ではなく、お笑いのクラスに在籍していることを。

あの劇場で、僕が初舞台を踏めることが出来たとしても、家族に言えない。複雑な気持ちが僕の胸を締め付けるのだった。

第四章（16） - 女の子って難しい -

アルバム撮影の朝、支度に手間取った僕は少し遅れ気味にファーストフード店へ駆け込む。すでに朝食を済ませていた瑞恵ちゃんは少々ご立腹の様子。いつもの「オハヨー」のトーンが少し変だ。遅れたといっても五分程度。もしかして先週の一件のせいだろうか。

「……怒ってる？」

「別にいい」

「でも、何かへんだよ」

「何でもない」

やっぱりおかしい。でも、その理由が先週の一件ならば、それは突如決まった舞台稽古見学のせいなわけで。待っていた彼女に連絡のしようがなかった。何より先週の帰り際はあまり怒っているようには見えなかったのに……。女の子ってホント難しい。

「あの……そのハンバーガー、今日は俺おごるからさ」

「いーよ。別にいい」

一度へソを曲げたらなかなか元に戻らない子のようだ。連絡できなかっただけでこの態度。「やっぱりケータイ持つようにしようかなあ」と心底思ってしまう僕だった。

「……それで、光弘くんは初舞台に出られる自信あるの？」

「ええ？ そのこと知ってたの？」

「さつき、佐伯さんに聞いたんだ」

「佐伯さんに？ 会ったの？」

「偶然ね。電車同じだったから」

「そう……。初舞台は……。まだ分からないよ。僕も出られるかどうか」

「そっか。……。じゃあさ、もし出るんだったら私、応援に行くから！ その時はちゃんと私に言ってね」

「え？ いや……。いいよ。恥ずかしいや」

「何で？ 恥ずかしいって……。そんなこと言ってるようじゃダメじゃん」

「いや、何ていうか……。まだ瑞恵ちゃんには……。見せられるものでもないし」

「……」

すると、彼女はトレーを持って突然立ち上がった。慥然としたその表情は完全に怒らせてしまったようだ。

「ちよつと……。光弘くんにかっこよかったなあ」

「なんだよ？ いきなり」

「ゴメン、今日は先に行くね」

足早に店を出て行った瑞恵ちゃん。僕はただただ呆然とその後姿を見送るばかりだ。……僕が一体何をしたって言うんだろう？ 佐伯さんから何か言われたのか？ 言い知れぬ不安と妄想にさいなまれてつつ、黙々と食事を済ませると僕は店を出るのだった。

何時以来だろう。一人であるビルに向かう朝は。思えばいつも瑞恵ちゃんと登校していたっけ。やっぱり僕と彼女ってかなり気が合うのかな……。なら、今朝みたいにするれ違う日は、ペペロンチーノの赤唐辛子みたいなものかも……。たまに刺激がある方がうまくまとまったりして。

ポジティブに受け止め浮かれていた僕。一人トボトボと『フェイス・アクト』のビルに入っていく。

「奥村君、キミ、中條さんとちゃんと話をしてるのか？」

教室で佐伯さんからそれをいきなり言われたのだった。

「ちゃんと？ ですか……？」

「あのさ、彼女、もつとキミと『話』がしたいんじゃないかな」

そのときの僕には分からなかった。瑞恵ちゃんが何故僕に怒っていたのか。そして、佐伯さんの言葉の真意が。

第四章（17） - 坂野、怒る -

アルバム撮影は午前中から始まった。クラス単位ではなく個別に呼び出されて撮影するらしい。結局、瑞恵ちゃんとは会えずじまい。とにかく話がしたかったのに……。

「はい、次の人」

パーティーシヨンの奥からカメラマンの声が聞こえた。いよいよ僕の番だ。

タレントアルバム撮影ってどんな撮影をするのだろう。初めての僕には全く分からない。ひよっとすると色々ポーズを指示されて、グラサンを掛けた無精ひげ生やしたカメラマンが、「うーんいいよ、いいよお奥村くん」などと言いながらローアングルで煽ってくるのだろうか。

二階事務室の前にそれほど高くない簡易パーティーシヨンで間仕切られた味気ない即席スタジオを見るまでは、そんな偏った知識を連ねては悶々と変な妄想をめぐらせていた僕だった。

「よ、よろしくお願いします」

中には大きな照明器具と、本格的なカメラが据え置かれ、ようやく「らしき」が垣間見えたものの、少々髪の毛がアフロ気味のカメラマンから与えられた僕への指示は、ただカメラの前に座って笑顔を作るだけ。二、三度フラッシュが焚かれたと思いきや、「はい、終了です。お疲れ様」と、僕はそのブースから体よく外に出されるのだった。

「何だかあつけないな……たったこれだけのことで二万五千円かあ」

僕が教室へと戻ろうとすると、正面からパクリンが着替えを済ませやってきた。聞けば彼はあの煌びやかなピンクのスーツにローラースケート姿で撮影するというではないか。

「奥村サーン。せっかく撮影してくれるのに、もっと自己PRする格好で挑まないと損デース！」

「そ、そうですね」

僕と入れ替わり、パクリンがそのブースに入っていくと、カメラマンの「うひゃあ！」という、何とも形容しがたい声が洩れ聞えてくる。そりゃ、あの格好をいきなり見たら誰でもビツクリするだろうな。

でも……いくらアルバムに載ったとしても、果たしてあの格好のパクリンに、仕事の依頼が来るのだろうか？ 来るとすれば「八十年代アイドル殺人事件」みたいな二時間サスペンスドラマだろうか。崖の上でピンクのスーツを着たパクリンが容疑を自白とか……。

そんなどうでもいいことを考えた僕は、思わず笑いがこみ上げてくる。すると、突然それは僕の目に飛び込んできた。

「そんなことは聞いていないぞ！」

「先生！ 落ち着いてください」

「今日はこれで帰る。あとは君に任せる！」

「先生！ 先生！」

事務室からいきなり飛び出してきたのは、坂野先生と青柳さんだ

った。その騒動は呆然と立ちすくむ僕を尻目に、雪崩のように階段を下り続けられていく。撮影中だったはずのカメラマンやパクリンも、その騒ぎに何事かとブースから飛び出してきたほどだ。

「はぁ……」

しばらくして疲れた顔をして階段を上がってくる青柳さん。

「どうしたんですか……?」

「うん、ちょっとね。こけら落としの件で……。悪いけど今日のW Aのフリータイムは中止になるよ。あとで僕が教室で説明するから」

「わ、分かりました……」

いつも冷静沈着な坂野先生が、あそこまで感情を露にした姿を見るのは初めてだった。僕は余程のことがあったのだろうと直感したのだった。

第四章（18） - 光と影の境界線 -

「今日は坂野先生に急用ができましたので、フリータイムはありません。各自帰ってもらってかまいません」

「えーっ！ そんなんシャレならんわ！」

この日もネタ見せのためだけにやって来た浜谷さんが声を荒げる。仕事の合間を縫って駆けつけている浜谷さんにとって、それは納得できないものだったのだろう。

「悪いね、先生急に仕事が入ったそうなんだ」

青柳さんはそう簡単に告げると、「じゃあみんな、お疲れ様」と、足早にWAの教室を出て行った。おかしい。さっきのアレはどう考えても急な用事が出来て帰ったとは思えない。

「おかしいデース！ 皆さん聞いてくだサーイ！」

やっぱりそう思っていたのは僕だけではなかった。撮影中にある騒動を目撃したパクリンが皆にそれを打ち明ける。

「『そんなこと聞いてない』って言っていたの？」

「そうデース！ 先生かなり怒っていましたネー？」

目撃者の一人である僕に、パクリンが話を振ってきた。

「そうですね……僕が見ても『急な仕事できた』って感じではな

かったです。何だか事務所と揉めているみたいな……」

佐伯さんやエビちゃんも一様に首をかしげる。結局、僕らは授業も受けられず、そのまま教室を出ることになった。

「すみません。佐伯さん、僕ちよつと……」

「分かってるよ。今日もあの喫茶店に行ってると思うから、後から来れば良いよ」

クラスの皆を見送り、僕はビルの玄関先で彼女を待つことにした。そういえば、こうして彼女を待つのは初めてだ。特に終業時間の決まって無いフリータイムは、大抵WAの方が遅くなっていたため、そのせいで瑞恵ちゃんを待たせることばかりだったわけだ。

ビルの前を車が行きかう。自販機で買った缶ジュースもすでに飲み干していた。待ち人の来ないその時間が、こんなにも永いものなのかと、僕は改めて思い知らされたのだった。

「瑞恵ちゃん……あの寒い日も、こうして待っていてくれたんだよな」

そう思うと僕は自分が情けなく思えてきた。もっと彼女と話がしたい。もっと、もっと仲良くなりたい。そんな風に道行く車を眺めていた。

「お疲れー」

ゾロゾロとAクラスらしき生徒たちが玄関から出てきた。ようやく終わったようだ。僕は瑞恵ちゃんが現れるのを待つ。しかし、ワイワイと賑やかに帰っていくAクラスの輪の中に、彼女の姿は無か

った。玄関先のほとぼりが冷めた頃、ようやく彼女はたった一人でやって来た。でも、その表情は暗く沈んでいる。クラスの誰とも会話せず、どこか孤立した印象の様子。ひよっとして彼女、Aクラスでまだ友達が居ないのだろうか。

「……あつ！ 光弘くん？」

僕を見かけた瑞恵ちゃんのその表情は、明らかに先ほど見た表情と違っていた。彼女にある光と影の境界線。僕はその時それを初めて知ったんだ。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7076d/>

---

笑道 - わらいのみち -

2009年7月1日21時15分発行